

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第166集

羽根遺跡

2010

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第166集

は
羽 根 遺 跡
ね
い
せ
き

2010

財團法人 愛知県教育・スポーツ振興財團
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県南東部に位置する豊川市は、豊川稲荷の門前町として知られており、また自動車部品や鉄道車両製造等の工場が並ぶ産業都市としても発展しています。東三河の中心に位置するこの地は、古くから三河の中心として栄え、古代には国府・国分寺・国分尼寺が設置されました。東海道・姫街道などの陸上交通が発達し、人々の往来は活発で、様々な文化が発展したといえましょう。

今回発掘調査をしました羽根遺跡は、東海道の赤坂宿の北東に位置し、赤坂から作手・新城方面へと延びる街道沿いに立地をしています。今回の調査では中世から近世を中心に様々な時期の遺構や遺物が確認されています。豊川市域では、これまでも多くの地域で発掘調査が行われており、既に膨大な史料などの蓄積がありますが、今回調査を行った旧音羽町域に関しては本格的な調査があまり行われていないこともあります。貴重な成果を加えることができました。本書はその成果をまとめたものであります。

今後、こうした調査成果が、豊川市域の歴史を明らかにする上での助けとなり、埋蔵文化財の保護や啓蒙活動に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施に際して、地元住民の方々をはじめとする関係者および関係諸機関のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成22年3月

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 林 良三

例　言

1. 本書は愛知県豊川市萩町羽根に所在する羽根遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県道大代音羽線改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財團法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成 20 年 4 月から 9 月まで、4,100 m²の面積を行った。整理および報告書作成作業は平成 21 年 4 月から平成 22 年 3 月にかけて実施した。
4. 調査担当者は、鈴木正貴（本センター調査研究専門員）・川添和暁（本センター調査研究主任）・成瀬友弘（本センター調査研究主事）である。発掘調査は東海アーネス株式会社の支援を受けて実施した。なお、東海アーネス株式会社のスタッフは本文第 1 章に記した。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部道路建設課、豊川市教育委員会をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の執筆と編集は成瀬友弘が担当したが、一部に分担執筆がある。

第 3 章 第 5 ~ 7 節 川添和暁

第 4 章 第 1 節 鬼頭剛

第 2 節 バレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

7. 整理作業は成瀬友弘が担当した。整理作業は伊藤あけみ・小島裕子・三浦里美（整理補助員）の協力を得て実施した。本製品・炭化材の樹種同定と放射性炭素年代測定を株式会社バレオ・ラボに、遺物の実測・トレース作業は陶磁器・土器・金属製品は株式会社アコード（主に東野穂澄）に、石製品は川添和暁が行い実測補助を株式会社アルカに作業を委託した。また、編集作業を加藤建設株式会社に、写真撮影を写真工房遊（金子知久）にそれぞれ作業を委託した。
8. 本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第VII系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
9. 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
10. 写真や図面等の調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
- 〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4161)
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4164)
12. 本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を受けている。記して感謝したい。（五十音順：敬称略）
北村和宏・城ヶ谷和広・都築暢也・中野晴久・藤沢良祐

目 次

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯	1
第2節 立地と環境	1
第3節 調査の方法と経過	2

第2章 遺 構

第1節 調査前地形測量	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構	11

第3章 遺 物

第1節 出土遺物の概要	45
第2節 土器・陶磁器類	45
第3節 金属製品・金属関連遺物	65
第4節 木製品・布製品	65
第5節 石製品	68
第6節 貝製品	69
第7節 繩文時代以前の石器	79

第4章 自然科学分析

第1節 羽根遺跡周辺の地形・地質	81
第2節 放射性炭素年代測定	83

第5章 考察・総括

第1節 遺構の変遷	86
第2節 総 括	88
付 表	89
遺構図版	95
写真図版	103
抄 錄	127

挿図・挿表目次

第1図 羽根遺跡位置図	1	第33図 動跡 1557SL 遺構図	41
第2図 羽根遺跡周辺遺跡地図	3	第34図 井戸 1348SE・1594SE 遺構図	43
第3図 羽根遺跡調査区位置図	4	第35図 井戸 1596SE・1597SE・	
第4図 羽根遺跡調査前平面図	8	1598SE 遺構図	44
第5図 基本層序1(A区南壁)	9	第36図 501SW 出土遺物(1)	47
第6図 基本層序2 (B区中央トレンチ、C区南西壁)	10	第37図 501SW 出土遺物(2)	48
第7図 旧宗桂寺基壇 001SB 遺構図(1)	12	第38図 502SU 出土遺物	49
第8図 旧宗桂寺基壇 001SB 遺構図(2)	13	第39図 503SM 出土遺物(1)	50
第9図 竪穴建物 322SI 遺構図	14	第40図 503SM 出土遺物(2)	51
第10図 挖立柱建物 1024SB・1025SB・ 1026SB・1027SB 遺構図	16	第41図 A区 溝出土遺物	52
第11図 挖立柱建物 1028SB・1595SB 遺構図	17	第42図 B区 溝出土遺物	53
第12図 溝 031SD・034SD 遺構図	18	第43図 764SD 出土遺物	55
第13図 溝 048SD 遺構図	19	第44図 C区 溝出土遺物	56
第14図 溝 051SD・060SD・240SD・ 243SD・244SD 遺構図	21	第45図 1352SK 出土遺物	57
第15図 溝 051SD 遺構図	22	第46図 土坑出土遺物(1)	59
第16図 石組み 052SS・溝 053SD 遺構図	23	第47図 土坑出土遺物(2)	60
第17図 溝 070SD 遺構図	24	第48図 SX 出土遺物	61
第18図 溝 246SD・386SD 遺構図	25	第49図 穴等出土遺物	63
第19図 土坑 239SX・ 溝 381SD・325SD・380SD 遺構図	26	第50図 包含層掘削・検出時出土遺物	64
第20図 溝 1201SD・1256SD・1341SD・ 1580SD 遺構図	27	第51図 出土銭貨	66
第21図 溝 1341SD 遺構図	28	第52図 金属製品	67
第22図 溝 1385SD・1385SD(下層) 遺構図	29	第53図 鍛冶関連遺物	67
第23図 溝 1412SD・1648SD 遺構図	30	第54図 木製品	68
第24図 石垣 501SW 遺構図	31	第55図 石塔頸(1)	70
第25図 石垣 510SW・ 盛り土 503SM 遺構図	32	第56図 石塔頸(2)	71
第26図 盛り土 503SM 遺構図	33	第57図 石塔頸(3)	72
第27図 土坑 205SK・206SX・247SK・ 248SK 遺構図	34	第58図 石塔頸(4)	73
第28図 土坑 256SP・257SP 遺構図	35	第59図 石塔頸(5)	74
第29図 土坑 643SK・644SK・884SK・ 950SK 遺構図	37	第60図 石塔頸(6)	75
第30図 土坑 1358SK・1500SK 遺構図	38	第61図 石塔頸(7)	76
第31図 土坑 828SK・829SK・1351SK・ 1527SK 遺構図	39	第62図 石塔頸(8)	77
第32図 土坑 1539SK・動跡 555SL 遺構図	40	第63図 石塔頸接合事例	77
		表1 測定試料及び処理	84
		表2 放射性炭素年代測定及び曆年較正の 結果	85

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯

羽根遺跡は、愛知県豊川市萩町に位置する遺跡である。本遺跡の調査はまず豊川市赤坂町から岡崎市大代町に至る県道大代音羽線のバイパス道路の建設工事が計画されたことに伴い平成19年度に愛知県教育委員会による遺跡の有無を確認する試掘調査が行われた。この結果当該地域に遺跡が存在することが認められたため、事前調査を愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた(財)愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財セン

ターが実施した。調査期間は平成20年4月から平成20年9月であり、調査面積は4,100 m²であった。調査は全体をA・B・C・D・Eの5調査区に分けて実施した。

また、本書作成にかかる整理作業は平成20・21年度で実施した。1次整理はコンテナ60箱分の出土遺物の洗浄を発掘調査と併行して実施した。2次整理及び本書の執筆・編集作業を平成21年度に実施した。

第2節 立地と環境

羽根遺跡は、豊川市萩町羽根(旧宝飯郡音羽町萩)に所在し、山陰川に向かって傾斜をする丘陵北側斜面の裾部に北東から南西に向かって約200mの範囲に広がっている遺跡で、標高は70~80mを測る。北側中央付近から北東方向に向け山の尾根にあがる道が延びており、山は豊川市立萩小学校の自然観察の場として活用されていた。

当遺跡周辺では、丘陵尾根を挟んだ南側斜面末端には後期旧石器時代の良好な資料が出土した駒場遺跡や、東には古代の三河国分寺跡・国分尼寺跡が所在している。旧音羽町域では縄文時代の遺跡として毘沙門遺跡・堂ノ上遺跡・中林遺跡等があげられる。弥生時代の遺跡としては平山遺跡・毘沙門遺跡・岩手遺跡・城の越遺跡・上林遺跡等がある。古墳時代では東山古墳群・



第1図 羽根遺跡位置図

羽根遺跡

下林古墳・雨田古墳等が存在する。律令時代にはいるところの付近は三河国宝飯郡宮道郷に属し、東海道の宮地駅家が置かれたと考えられている。この駅家はその後赤坂宿となり、江戸時代には東海道の宿場町として地域の中心となり栄えた。本遺跡の時期である中世から近世の萩の状況は、室町時代には熱田大宮司家の萩氏の支配をうけており、萩氏は幕府の奉公衆としても名を連ねていた。その後戦国の動乱期に入る

と萩は奥平氏の支配を受けた。江戸時代に入るときの支配は当初幕府領であったものが1698年(元禄11)には鍋島氏領に、その後1785年(天明5)に田沼氏領、1787年(天明7)に幕府領、1802年(享和2)以降は安藤氏領と変遷を重ねた。江戸時代の萩は東海道赤坂宿と密接に結びついており、赤坂宿の定助郷八か村の1つとして人馬役の負担等を負っていた。

第3節 調査の方法と経過

発掘調査は愛知県埋蔵文化財センターが東海アナース株式会社の支援を受け実施した。調査担当者は鈴木正貴・川添和暁・成瀬友弘である。東海アナースのスタッフは下記の通りである。

現場代理人：未次正法、調査補助員：古川久雄、測量技術：若林純也・山本真二、作業班長：西沢俊明、調査補助：松浦昭文・海原良二・早川晴生・竹中充、作業員：伊藤明生・伊藤正吾・伊藤真彦・岩田友一・上田敬子・太田研一・大塚たか子・金子久雄・小林育子・小柳津あい子・田中愛子・田中博明・利根一元・鳥居和子・鳥居仙一郎・中尾敏彦・中尾ヨネ子・中田房子・夏目今朝松・野原寛・藤田正子・松本純子・松本直志・三輪淑子・森新八郎

調査区は便宜上、調査区を横切る沢を挟んで北側をA区、南側をB・C・D区、D区と道を挟んだ西側をE区に分けて実施し、A区→C区→Ab区(A区北への拡張部分)→B区→D区→E区の順に行なった。

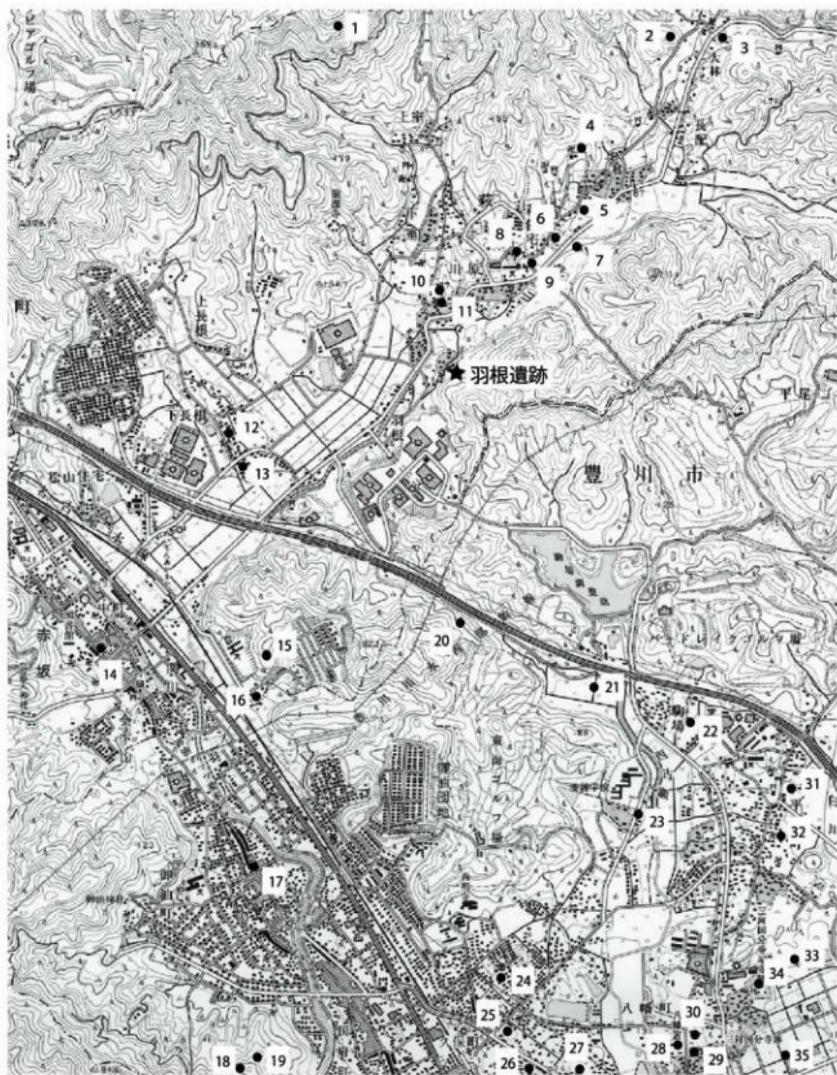
調査方法は、斜面地に遺跡が展開することもあり調査区の調査前地形測量を行った後、バックホウにより褐色砂質土等の表土を除去し、江戸時代の遺構面まで掘削した。遺構は最終的には、鎌倉時代・戦国時代・江戸時代の各時期の遺構が存在していたことが明らかになったが、遺跡全体を時代別に掘り分けることは困難で

結果的に江戸時代を中心とした遺構を第1面、鎌倉時代から戦国時代の遺構を第2面として調査を実施した。しかしこの区分は時期的なまとまりを保証するものではなく、上位から順に検出・掘削した便宜上の遺構面に過ぎない。

調査区は5mグリッドを設定し、遺物は原則このグリッドごとに取り上げている。土坑類は半裁掘削、溝等は土層観察用のベルトを残して掘削し、必要な記録を採取した後に全掘作業を行った。遺構の実測は電子平板による測量を実施し、成果品はすべてデジタルデータで作成した。写真は6×7リバーサルフィルムとデジタルカメラによる撮影を調査補助員古川久雄が行った。

平成20年8月9日には地元向け現地説明会を開催し、検出された遺構と出土した遺物について説明を行った。約90人の参加者がいた。また、出土した遺物については現場で洗浄作業を実施し、その量は洗浄を終了した時点で27リットル入りコンテナで60箱に及ぶ。現地作業は平成21年9月1日に終了した。

整理・報告書作成印刷作業は平成21年度に成瀬が担当して弥富市の愛知県埋蔵文化財センターで実施した。遺物は整理補助員の協力を得て接合・選別作業を実施し、報告書に掲載する遺物については陶磁器・土器・金属製品等の実測・トレースは株式会社アコードに、石器につ



- 1 船岡遺跡 2 萩城跡 3 岩手遺跡 4 善住寺横穴古墳 5 中林道路 6 城の腰道路 7 城の腰城跡 8 堂ノ上道路 A 9 堂ノ上道路 10 雨田遺跡
 11 雨田古墳 12 上林道路 13 下林古墳 14 近世赤坂宿 15 東山5号古墳 16 東山遺跡 17 近世御油宿 18 国府第4号墳 19 国府第5号墳
 20 源祖遺跡 21 勝場道路 22 天間道路 23 門田遺跡 24 黒仏遺跡 25 船山1号墳 26 久保古墳 27 白鳥遺跡 28 八幡村古城跡 29 三河国分寺跡
 30 本郷遺跡 31 平尾遺跡 32 中貝津道路 33 三さんまい山古墳 34 三河国分尼寺跡 35 小柳遺跡

第2図 羽根遺跡周辺遺跡地図 1/25,000

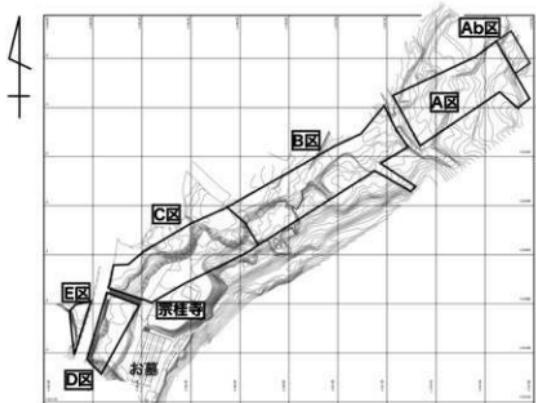
羽根遺跡

いは川添が実測図作成を行い、実測補助・トレースを株式会社アルカに、遺物の写真撮影は写真工房遊に、樹種同定・放射性炭素年代測定を株式会社パレオ・ラボに、報告書編集作業は加藤建設株式会社に、報告書印刷作業はサンメッセ株式会社にそれぞれ作業を委託し行った。整理作業が終了した時点では、遺物は27リットル入りコンテナ75箱に整理され、愛知県に移管された。

調査日誌抄

- 3月28日(金)：東海アーナスと現地で初顔合わせ。
- 4月7日(月)：東海アーナスと現地で打ち合わせ。
- 4月14日(月)：東海アーナスによるプレゼンテーション。
- 4月23日(木)：ラジコンヘリによる調査前地形測量を行う。
- 4月30日(木)：羽根詰所移動。
- 5月7日(水)：A区表土掘削を開始。作業員を使いC区001SB（旧宗桂寺基壇）の精査。

- 5月8日(木)：A区壁トレンチの掘削開始。トレンチの状態から遺構の状況を確認、部分的に遺構面が2面になることが確認される。A区1面の遺構検出作業を開始。C区001SBの写真撮影・測量を行う。
- 5月19日(月)：A区1面遺構掘削作業を開始。
- 5月20日(火)：東海アーナスと電子納品についての説明会。
- 5月22日(木)：県文化財保護室野口哲也、県埋文調査センター都築暢也・北村和宏、城ヶ谷和広来訪。
- 5月26日(月)：豊川市教委前田清彦・桑原将人・細井美那子来訪。
- 5月27日(火)：A区一面遺構清掃とローリングタワーでの写真撮影。
- 5月28日(水)：A区1面のラジコンヘリによる測量用写真・斜め写真撮影。A区1面補足調査開始。
- 5月30日(金)：C区001SB測量用写真撮影。
- 6月2日(月)：C区001SBトレンチ掘削開始。
- 6月5日(木)：C区表土掘削開始。



第3図 羽根遺跡調査区位置図 1/2,000

調査の概要

- 6月 6日(木)：県埋文調査センター都築暢也来訪。
- 6月 10日(火)：清水泰明・伊藤義幸・寺西孝生・城ヶ谷和広・鬼頭剛来訪。
- 6月 11日(水)：C区1面遺構掘削作業開始。
- 6月 13日(金)：501SW・石塔の廃棄が集中する502SUを確認。精査を開始。
- 6月 17日(火)：県建設部・県埋文調査センターとの連絡会議。501SW・502SUの写真撮影。
- 6月 18日(水)：堀木真美子による石垣・積み石等の石材の同定作業。調査前地形測量の補足を行う。鬼頭剛・永井邦仁・早野浩二来訪。
- 6月 19日(木)：A区2面に向け重機での包含層掘削作業を開始。A区2面の遺構検出作業を開始。
- 6月 24日(火)：A区2面遺構掘削作業を開始。県埋文調査センター都築暢也、東海アナース森繁男・矢田洋士来訪。
- 6月 28日(土)：A区2面遺構清掃とラジコンヘリによる写真撮影。撮影後、遺構補足調査を開始。
- 6月 30日(月)：東海アナースによる熱中症対策等の安全大会を開催。
- 7月 4日(金)：A区補足調査（深掘り調査）を実施。鬼頭剛により土層サンプル採取。
- 7月 7日(月)：豊川市教委前田清彦・細井美那子来訪。
- 7月 8日(火)：A区埋め戻し作業開始。
- 7月 9日(水)：C区1面の遺構清掃とラジコンヘリによる写真撮影。
- 7月 10日(木)：C区1面遺構補足調査開始。
- 7月 11日(金)：Ab区・B区1面の表土掘削を開始。
- 7月 14日(月)：C区2面に向け人力による包含層掘削作業を開始。
- 7月 15日(火)：Ab区遺構検出作業・掘削作業を開始。
- 7月 16日(水)：Ab区遺構清掃と写真撮影。
- 7月 22日(火)：Ab区補足調査（深掘り調査）を実施。鬼頭剛によりサンプル採取。埋め戻し作業も開始。B区1面遺構検出作業を開始。C区2面遺構検出・掘削作業を開始。
- 7月 23日(水)：A区・Ab区埋め戻し作業終了。
- 7月 24日(木)：C区2面遺構清掃と高所作業車による写真撮影。撮影後補足調査を開始。C区埋め戻し作業開始。
- 7月 25日(金)：B区1面遺構検出作業を開始。堀木真美子により積み石等の石材の同定作業を行う。中近世部会による遺跡検討会を行う。
- 7月 29日(火)：B区1面遺構掘削作業を開始。
- 7月 31日(木)：県教育・スポーツ振興財団監事視察。C区補足調査（深掘り調査）を実施。鬼頭剛によりサンプル採取。
- 8月 1日(金)：B区1面遺構清掃と高所作業車による写真撮影。撮影後補足調査を開始。
- 8月 4日(月)：B区2面に向け重機による包含層掘削開始。
- 8月 5日(火)：B区2面遺構検出・掘削作業を開始。
- 8月 6日(水)：D区表土掘削を開始。荒木集成館岩野見司・永井宏幸来訪。
- 8月 7日(木)：B区2面遺構清掃とラジコンヘリによる写真撮影。現地説明会の準備開始。C区埋め戻し作業を終了。
- 8月 9日(土)：地元向け現地説明会を開催。約90人参加。
- 8月 11日(月)：B区2面補足調査を開始。
- 8月 18日(月)：E区遺構検出作業を開始。E区表土掘削作業を開始。
- 8月 19日(火)：県建設部・県埋文調査センターとの連絡会議。D区遺構掘削作業を開始。E区遺構検出・掘削作業を開始。
- 8月 21日(木)：B区井戸断ち割り調査。B区埋め戻し作業を開始。ラジコンヘリによる

羽根遺跡

- 遺跡の遠景撮影。
- 8月26日(火) : D・E区遺構清掃とクレーンによる写真撮影。
 - 8月27日(水) : D・E区埋め戻し作業を開始。
 - 8月28日(木) : D・E区埋め戻し作業を終了。
 - 8月29日(金) : B区埋め戻し作業を終了。
 - 9月1日(月) : 現場作業を終了。
 - 9月5日(金) : 業者評価委員会を開催。
 - 9月8日(月) : センターへ一次整理後の出土遺物の搬入。
 - 9月24日(水) : 現場のすべての撤去作業が終了。
 - 12月2日(火) : センターにて成果品の納品。

第2章 遺構

第1節 調査前地形測量

羽根遺跡では、調査前より斜面地に小規模な平場が展開していることが確認できたため掘削作業に入る前に地形測量を実施した。(第4図)その結果、A区では山へ向かう道の両側に比較

的小規模な平場が数段確認され、それ以外の区域ではやや規模の大きい平場が展開をしていることが確認されたため、この平場を考慮に入れて調査を行うこととした。

第2節 基本層序

羽根遺跡における基本的な層序については場所によってやや異なるのでA区・B区・C区についてそれぞれ紹介した。

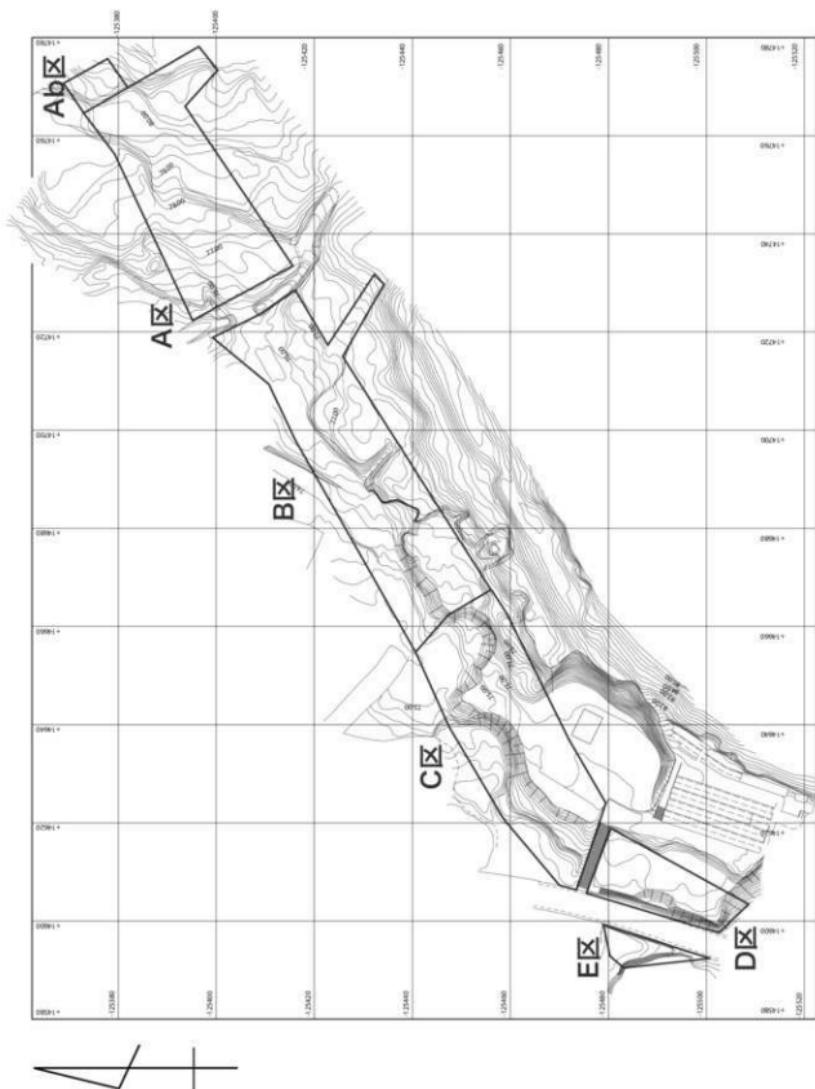
A区の基本層序をA区南壁断面図(第5図)で見ると、緩やかにB区との境にある沢の方に向へ下る傾斜に平場を作り出すために黄褐色砂質土・褐色砂質土等により整地が行われ、段差が生まれた部分に石を積んで崩落を防止している。この平場の上に近世の遺構が展開している。整地土の下に褐色シルト(第5図79層・85層)・黄褐色シルト(第5図80層)・灰黃褐色シルトの層(第5図81層)が堆積しており、この面に中世後半を中心とする遺構が展開すると考えられる。これらの層の下は土石流の堆積と推定される灰黃褐色礫層(第5図99層)がA区の広範囲に展開をしていた。

B区の基本層序をB区中央部トレント断面図(第6図上)で見ると、北西方向に緩やかに傾斜する地形を平場とするために整地が行われており、表土を除去した下の第1層は黒褐色シルトの層(第6図上4層・4層)、第2層は黒色シルト(第6図上10層)、第3層は黒褐色シルト(第6図上13層・14層)と堆積している。このうち第1層は近代以降の整

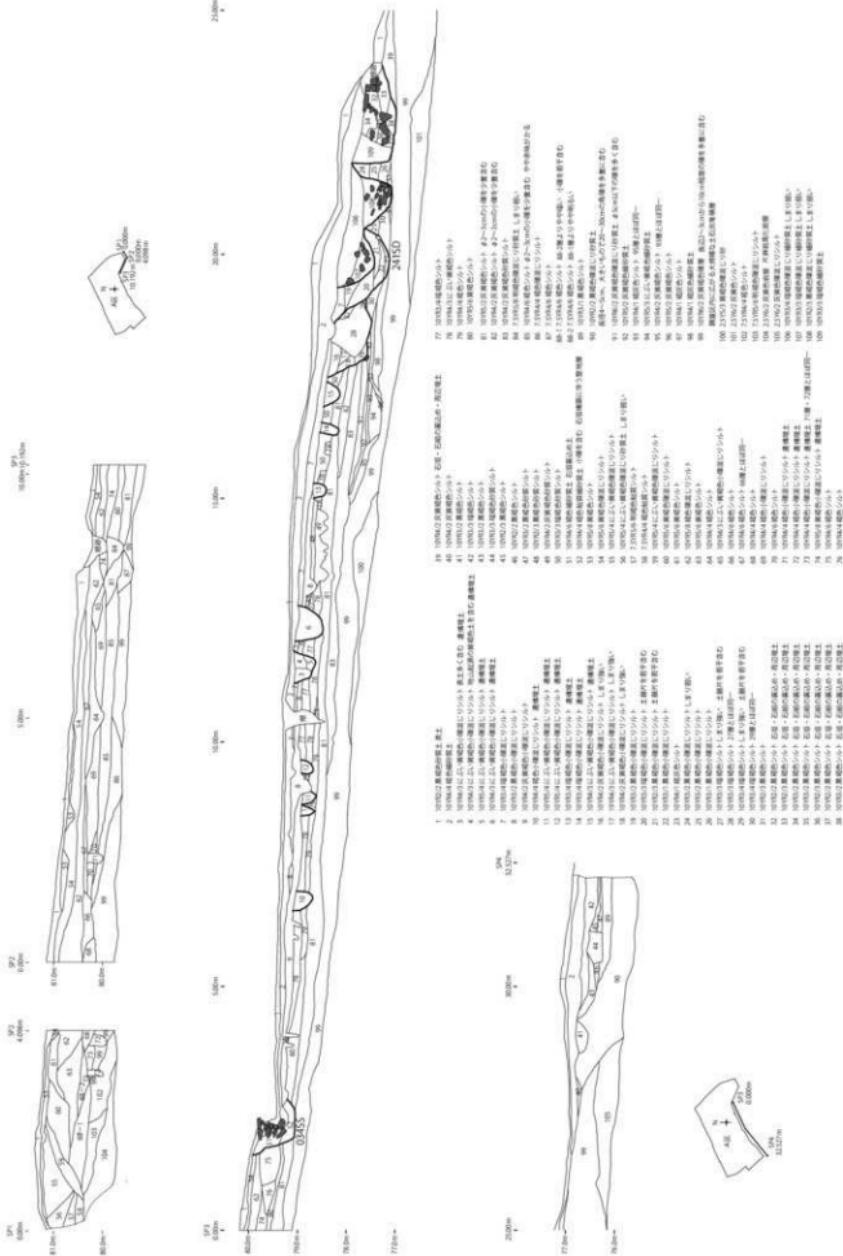
地層、第2層が近世の遺構面、第3層は整地層と考えられる。B区では2段の平場が確認されたが、上段のA区に近い区域でのみ第3層の整地層が確認されたため上段の一部のみを2面調査とした。

C区の基本層序をC区南西壁断面図(第6図下)で見ると、A区・B区同様に北西方向に傾斜している地形に盛り土による整地を施し、平場を形成している。第1層はアスファルト・瓦を含む現代の堆積層(第6図下1~11層・14層・17~18層)、第2層(第6図下1~26層)、第3層(第6図下29層~60層)の順に堆積している。堆積の状況や遺物などから、第2層は近世末から近代に最上段の平場を拡幅した時の整地層、第3層は近世初頭の平場を造成時の整地層と考えられる。最下段の平場は地山である明褐色細砂質土(第6図下67層)・明褐色シルト(第6図下68層)を削平して作られており、遺構なども非常に希薄なことから第2層形成以降の削平と考えられる。こうしたことからC区については第3層が確認された最上段の平場のみ2面の調査とした。第3層上面で近世の遺構、第3層下面で中世後半の遺構が展開しているものと考えられる。

羽根遺跡

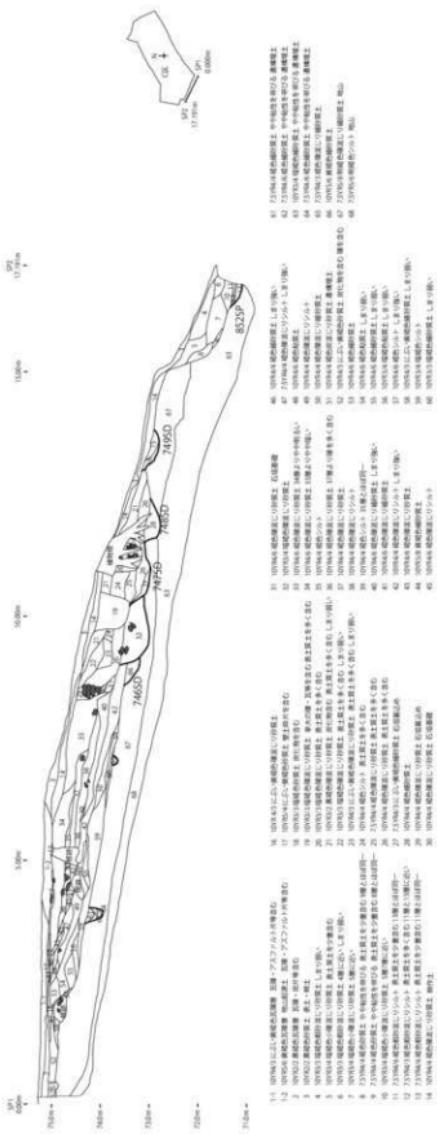
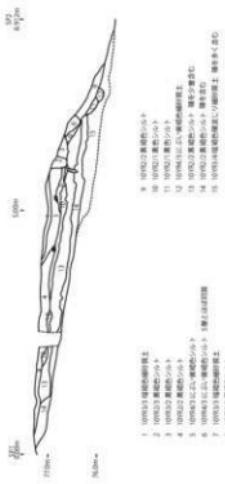
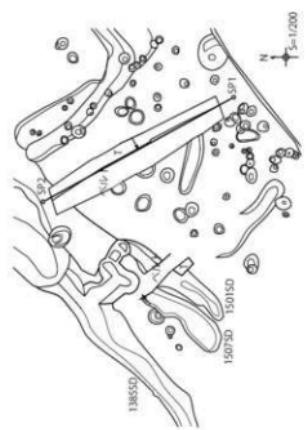


第4図 羽根遺跡調査前平面図 1/1,000



第5図 基本層序1(A区南壁) 1/100

羽根遺跡



第6図 基本層序2 (B区中央トレーン・C区南西壁) 1/100

第3節 遺構

今回の調査で検出された遺構は約1500基であった。これらは前記で説明した各遺構面から掘削されたものと考えられるが、実際の調査では、精度に問題があるため、検出された遺構と遺構面がきちんと対応できる事例は限定されているのが現状である。本来は遺構面、時期別に記述を進めるべきであろうが、ここでは遺構の種類別に記述をしていきたい。

(1) 旧宗桂寺基壇 (001SB)

C区には宗桂寺跡と呼ばれる部分が含まれていた。

まず宗桂寺であるが、その記録がほとんど残っていない寺院である。寛政年間の萩村絵図や文政年間以降の宗門人別御改帳にも記載はなく、わずかに明治2年、4年の三河国宝飯郡村差出明細帳の萩村明細書上扣帳に禅宗の寺であり、萩地区にある曹洞宗龍源寺に関連する寺であると考えられる記録が残るのみである。明治4年の記録以後、この寺は廃寺となったと考えられ、その後羽根地区の人々の集会所としてこの場所が使用してきた。調査前にあった建物自体は数十年前の建築物であったが、基壇については、旧宗桂寺からの可能性も考えられたため、表土掘削に入る前にこの基壇部分について調査を行った。

基壇(第7図)は、9.40m×9.26mのほぼ正方形の平面形態を有し、周囲に石を積みおよそ0.3mの高さを形成していた。石材の中心は地元産の片麻岩である。概ね30cm以下の石材が用いられているが、南西側のみや大振りな石材が使われており明らかに他の部分とは積み方などに相違が見られることから作り替えられた可能性がある。断面(第8図)を確認すると大きく2層あり上層が橙色シルト(基本層A)、下層が褐色シルト(基本層B)となつており、元々下層段階の基壇があったものを拡張したものと考えられる。

遺物は、寛永通宝をはじめとする銭貨や将棋の駒、刀子・鉄釘、ツツジ属・マツ属の板材等が出土している。

(2) 建物跡(竪穴建物・掘立柱建物)

建物関係では竪穴建物跡と思われる遺構は1棟、掘立柱建物跡と思われる遺構は6棟を確認した。

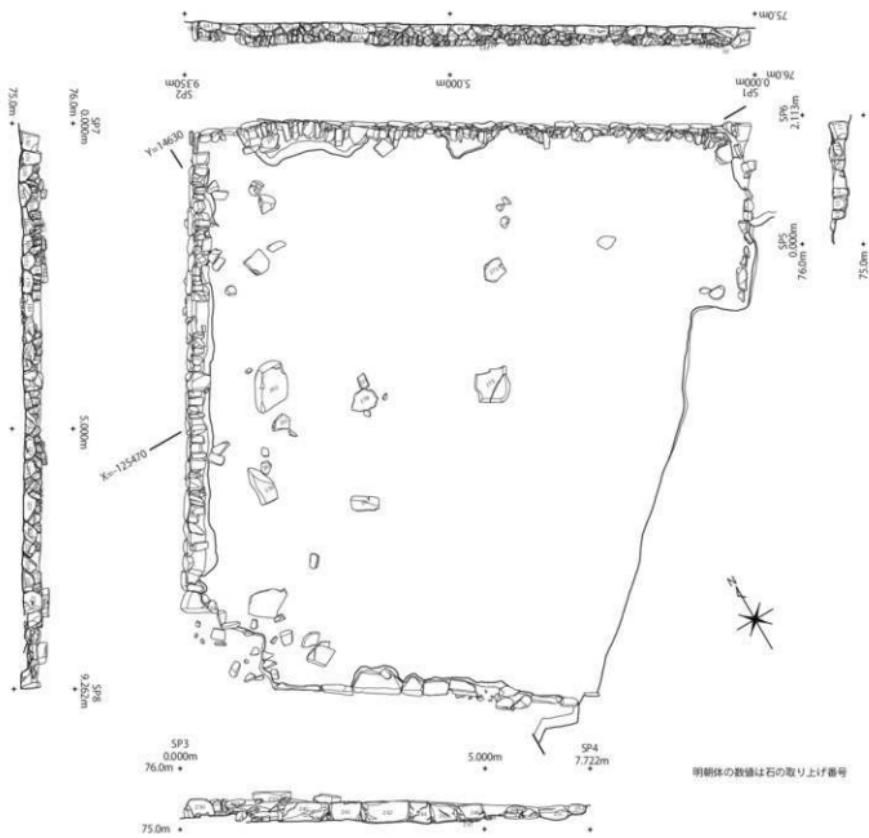
322Si(第9図) A区中央部東よりにある竪穴建物跡で、検出段階で平面プランがはっきり確認できず整地層の確認のためのベルト断面でとらえられたものであるため残存状況はあまりよくない。平面形態は方形であったと推定されるが規模などは不明、深さは40cmを測る。床面は黒褐色シルトと地山の黄橙色シルト等のブロックで整地されている。遺物は出土しておらず、時期の特定は難しい。

1024SB(第10図) C区南部の平場に位置する1面で検出された4間×2間の掘立柱建物である。規模は6.56m×3.44mを測り、柱穴612SP、620SP、628SP、630SP、641SP、648SP、662SP、667SP、671SP、689SP、693SPによって構成される。柱穴の掘形は梢円形を呈するものが多い。柱穴628SP、630SPからは土師器鍋、柱穴667SP、671SPからは土師器皿が出土しているがいずれも小片であり、時期の特定は難しい。

1025SB(第10図) C区南部の平場に位置する1面で検出された1間×3間の掘立柱建物である。規模は2.88m×4.82mを測り、柱穴611SP、616SP、619SP、627SP、634SP、639SP、650SP、657SPによって構成される。柱穴の掘形は円形を呈するものが多い。いずれの柱穴からも遺物は出土しておらず、時期の特定は難しい。

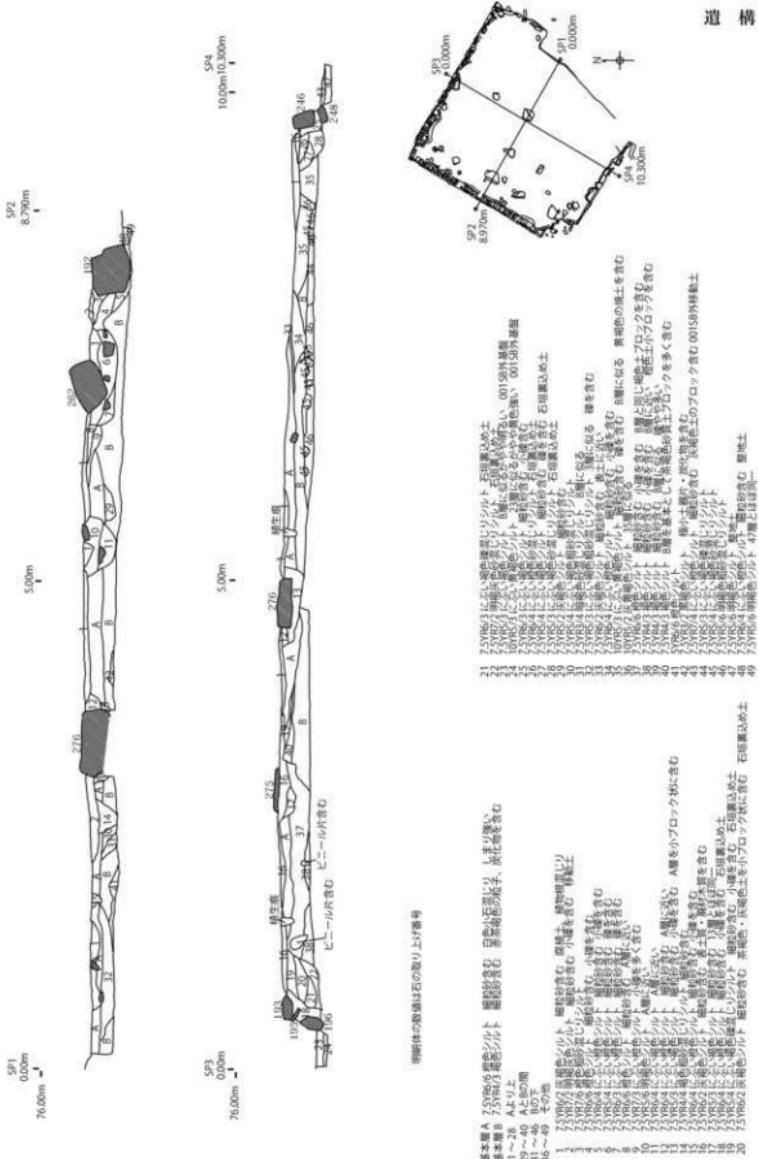
1026SB(第10図) C区南部の平場に位置す

羽根遺跡

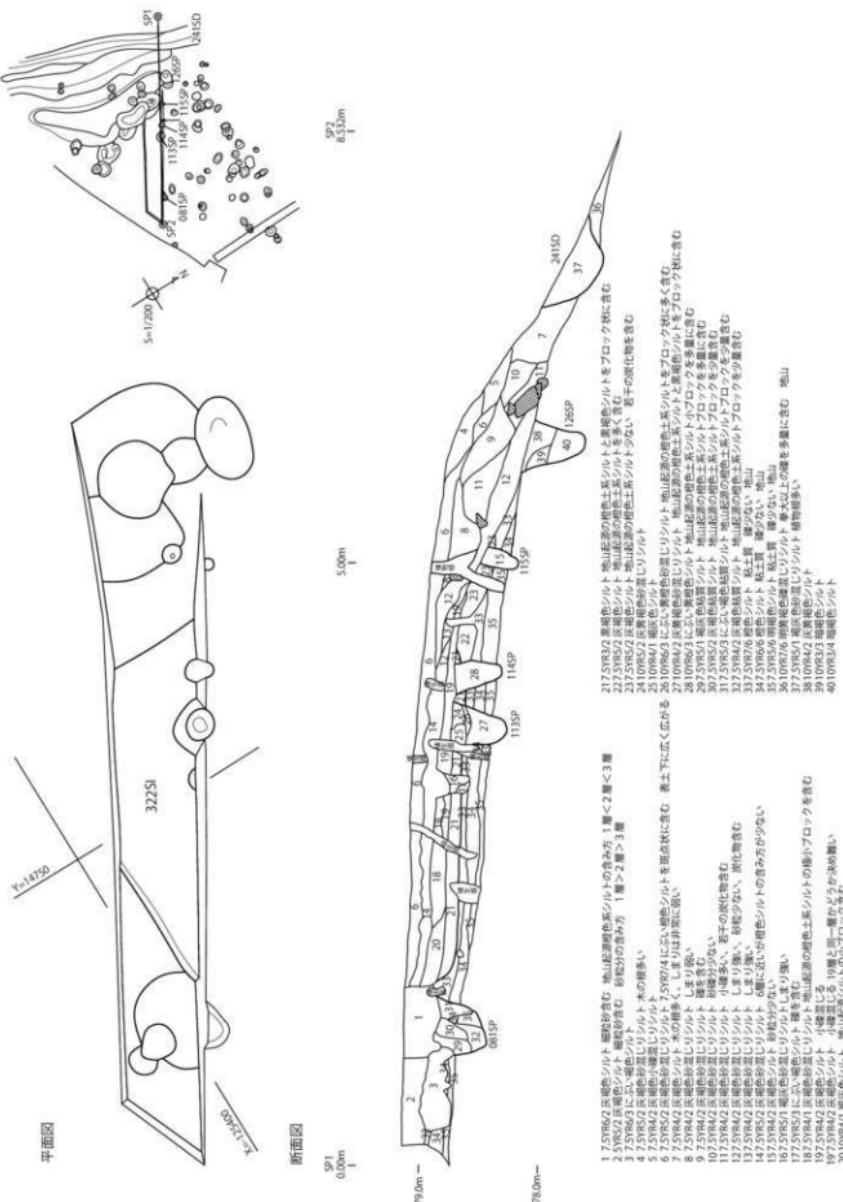


第7図 旧宗桂寺基壇 001SB 遺構図(1) 1/80

遺構



第8図 旧宗桂寺基壇 001SB 遺構図(2) 1/50



第9図 坪穴建物 322Si 遺構図 1/40

る1面目で検出された1間×2間の掘立柱建物である。規模は1.84 m×2.88 mを測り、柱穴557SP、580 SP、592SP、593SP、600 SPによって構成される。柱穴の掘形は円形を呈するものが多い。柱穴600SPから土師器皿の小片が出土しているが、時期の特定は難しい。

1027SB（第10図）C区南西よりに位置する1面目で検出された3間×2間の掘立柱建物である。規模は4.56 m×4.08 mを測り、柱穴547SP、551 SP、561SP、576SK、582SP、587SP、603 SP、609SP、625SPによって構成される。柱穴の掘形は円形を呈するものが多い。柱穴547SPからは土師器皿、柱穴551SPからは肥前系陶器、土師器皿、土坑576SKからは土師器類・皿、鉄釘などが出土しているが、いずれも小片であり、時期の特定は難しい。

1028SB（第11図）C区南部の平場に位置する1面目で検出された掘立柱建物である。一部が調査区外にあるため明確な規模は定かではないが確認できる範囲で7.04 m×4.72 mを測り、土坑536SK、540SK、573SK、590 SK、605SK、606SK、623SK、によって構成される。柱穴の掘形は円形を呈するものが多い。土坑536SKからは古瀬戸小片、鉄製の包丁片、洪武通宝、土坑540SKからは土師器皿、土坑590SKからは土師器類、祖母懐壺など、土坑606SKからは捕鉢が出土しているが、いずれも小片で詳細な時期は不明であるが15世紀後半であろうか。

C区では、これらの建物の柱穴付近には数多くの柱穴があり、数度の立て替えが行われていた可能性が考えられる。

1595SB（第11図）B区北部の平場に位置する2面目で検出された3間×1間の掘立柱建物である。規模は7.45 m×3.75 mを測り、柱穴1298SP、1307SP、1314SP、1316SP、1334SP、1419SP、1573SPによって構成される。柱穴の掘形は円形を呈するものが多い。柱穴1314SPからは土師器皿の小片が出土している。

(3) 溝

溝については、平場を構成する段差のすぐ下を平場を区画するように巡るものが中心であり、一部に石組みを持つものや暗渠と考えられるものもある。使用されている石材のほとんどは片麻岩であった。

031SD（第12図）A区1面目で検出された最上段の平場端部にあり道406SFに沿って屈曲する溝である。規模は幅0.8 m、深さ0.2 mを測る。平場端部を巡る溝で確認されたのはこれのみである。034SDを切っていることから18世紀以降と考えられる。

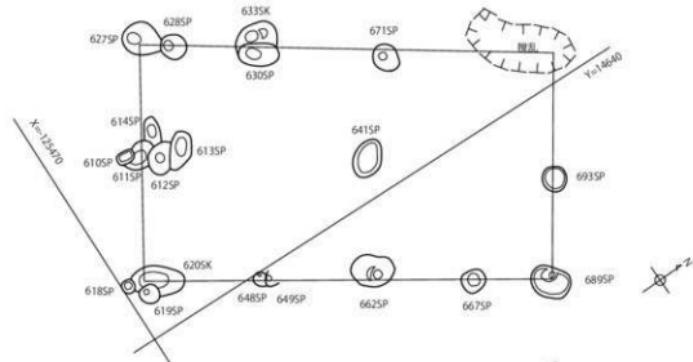
034SD（第12図）A区1面目で検出された031SDのある平場から一段下の平場を巡る溝である。規模は幅1.10 m、深さ0.27 mを測る。美濃窯産登窯第6小期の陶器等を含むことから17世紀末から18世紀初頭と考えられる。

048SD（第13図）A区1面目で検出された溝034SDのある平場からさらに一段下の平場を巡る溝である。規模は幅0.9 m、深さ0.24 mを測る。406 SFと接する部分で幅が細くなり、崩落防止のための石組みが4 m程度施されていることからこの部分が平場への出入り口となっていたと考えられる。また、この先は一段下の051SDとつながっている。瀬戸窯産登窯第8小期の陶器まで含まれることから18世紀と考えられる。

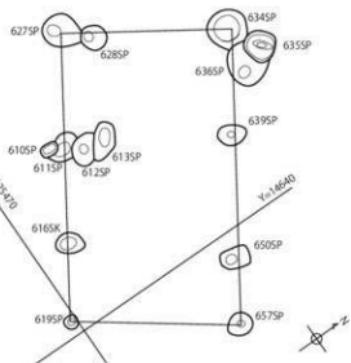
051SD（第14図・第15図）A区1面目で検出された溝048SDのある平場からさらに一段下の平場を巡る溝である。規模は幅0.8 m、深さ0.2 mを測る。048 SDと接続する部分と道406SFとの比高差が大きくなる部分に石組みがみられる。瀬戸・美濃窯産登窯第6小期の陶器などが含まれることから17世紀末から18世紀と考えられる。

053SD（第16図）A区1面目で検出された406SF南にある最下段の平場を巡る溝である。規模は幅1.3 m、深さ0.15 mを測る。上段の平場との段差側にのみ石組み(052SS)がある。

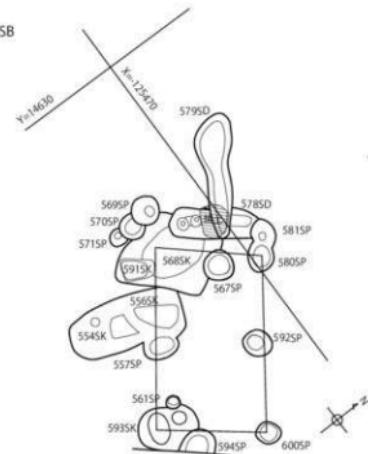
1024SB



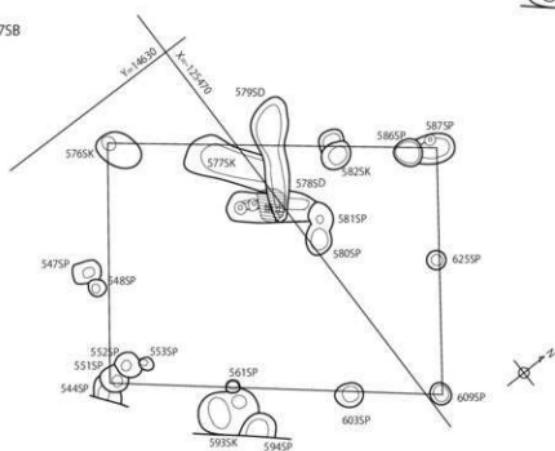
1025SB



1026SB

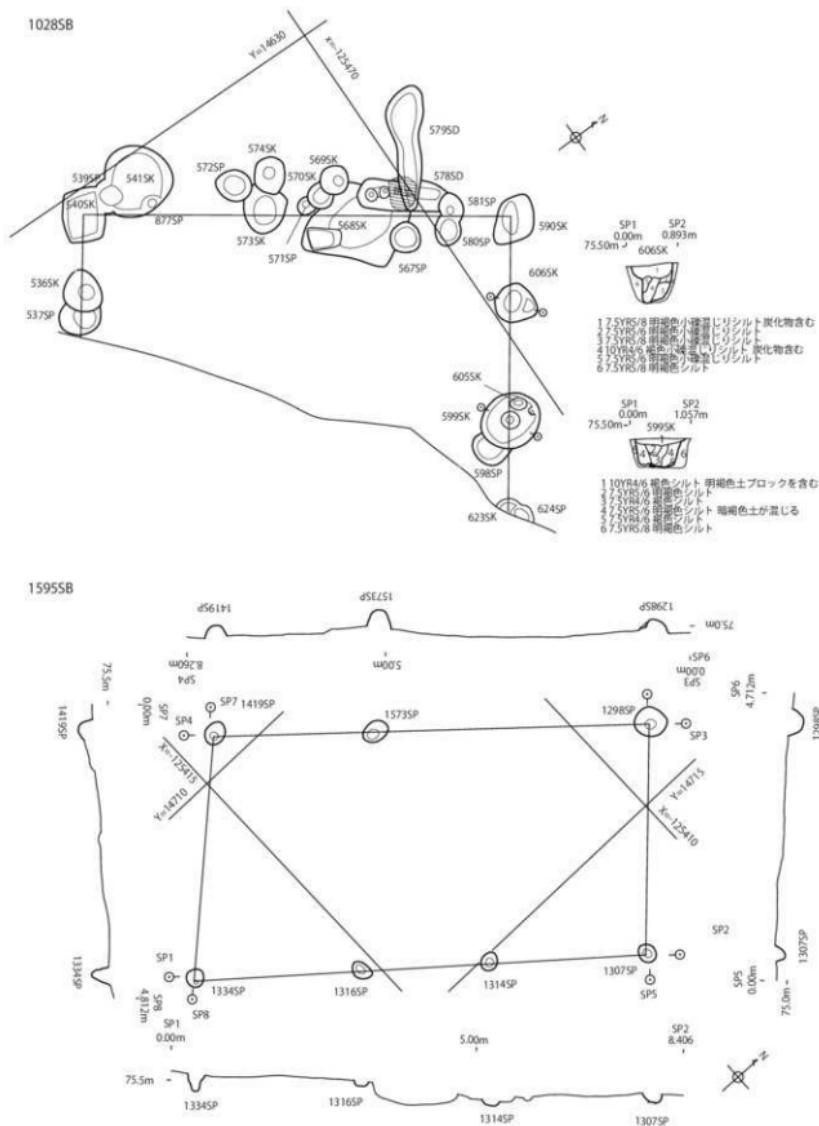


1027SB

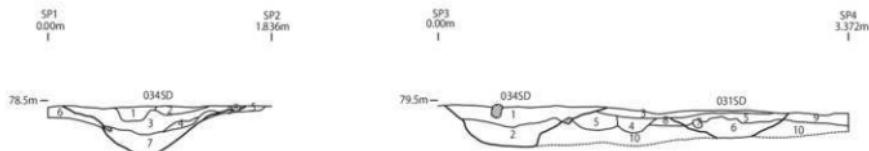
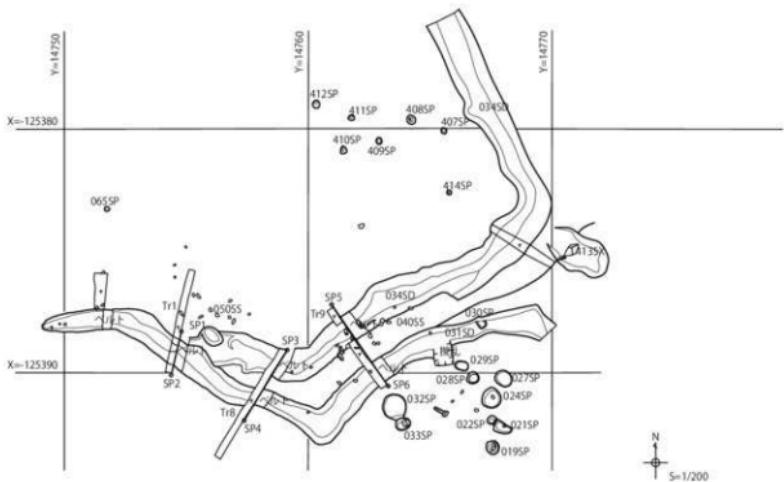


第10図 挖立柱建物 1024SB・1025SB・1026SB・1027SB 遺構図 1/80

遺構



第 11 図 挖立柱建物 1028SB・1595SB 遺構図 1/80



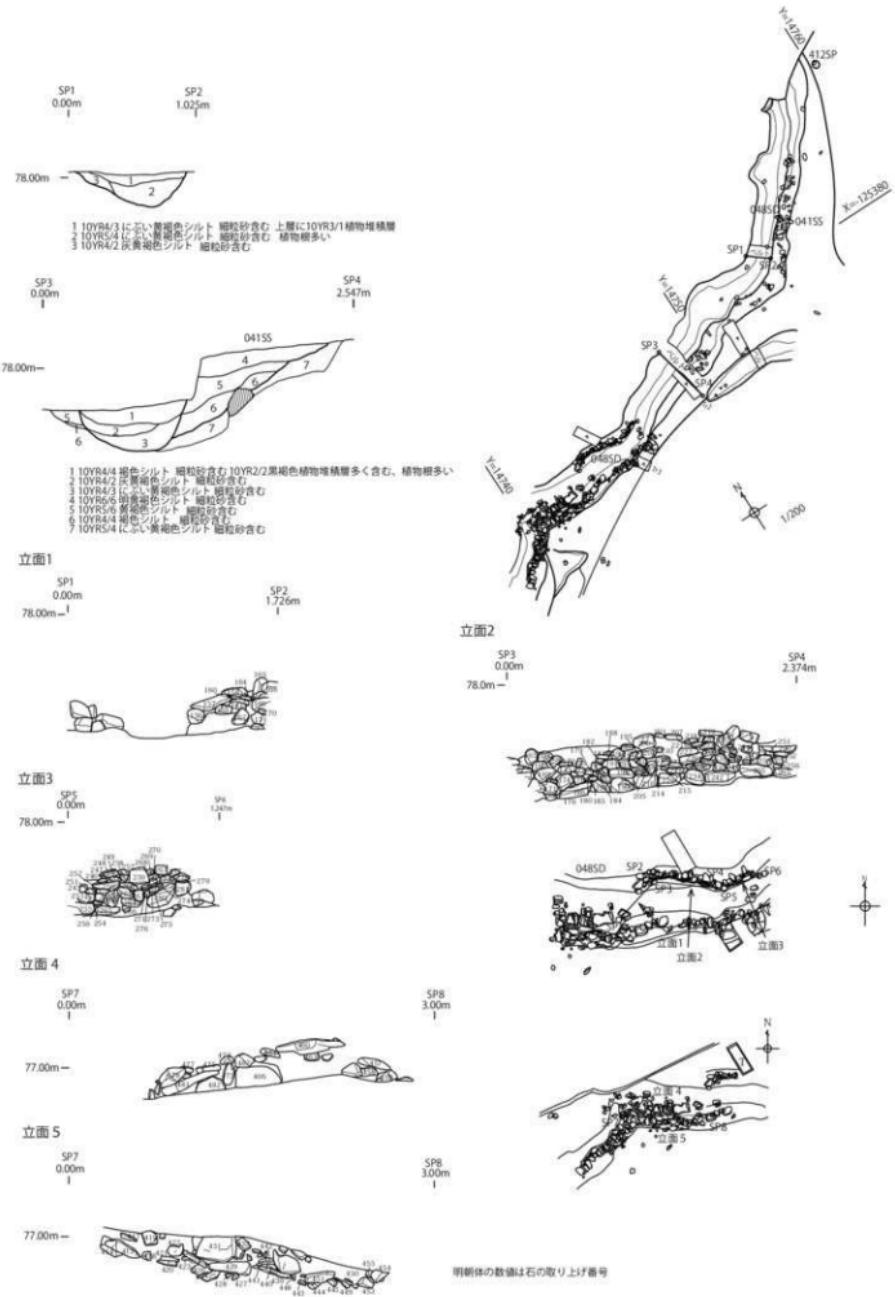
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 硫化物含む 細粒砂含む
- 2 2.5Y3/3 黄褐色シルト 細粒砂含む 植物根跡含む
- 3 10YR4/5 黄褐色シルト 細粒砂含む
- 4 10YR4/6 明黄色シルト 細粒砂含む
- 5 2.5Y3/3 黄褐色シルト 細粒砂含む
- 6 7SYR5/6 明黄色シルト 細粒砂含む 5層に近い
- 7 10YR5/3 黄褐色シルト 細粒砂含む
- 8 10YR4/2 底黄褐色シルト 細粒砂含む
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 細粒砂含む

- 1 10YR5/6 黄褐色シルト 細粒砂含む
- 2 10YR5/3 黄褐色シルト 売化物を含む <5cm以下の小礫を含む 植物根多い
- 3 2.5Y3/3 黄褐色シルト <5cm以下の小礫を含む 植物根跡あり
- 4 10YR4/5 黄褐色シルト 細粒砂含む
- 5 10YR4/1 にぶい黄褐色シルト 細粒砂含む
- 6 10YR4/6 褐色シルト 細粒砂含む
- 7 10YR4/2 底黄褐色シルト 細粒砂含む
- 8 10YR5/6 黄褐色シルト 細粒砂含む
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 細粒砂含む
- 10 7SYR5/6 明褐色シルト 細粒砂含む



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 細粒砂含む 植物根多い
- 2 10YR6/6 明黃褐色シルト 細粒砂含む しまり悪い
- 3 10YR4/4 褐色シルト 細粒砂含む しまり悪い
- 4 10YR5/5 黄褐色シルト 細粒砂含む しまり悪い
- 5 10YR5/8 黄褐色シルト 細粒砂含む しまり悪い
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 細粒砂含む
- 7 10YR5/6 黄褐色シルト 細粒砂含む
- 8 10YR5/8 黄褐色シルト 細粒砂含む
- 9 10YR5/8 黄褐色粘質シルト 10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロックを含む
- 10 7SYR5/6 明褐色粘質シルト

第12図 溝031SD・034SD 遺構図 1/40



第13図 溝 048SD 遺構図 1/40

羽根遺跡

上段の平場との比高差は0.2m程であるが沢に近く地盤が軟質であるため土留めとして築かれたものと考える。古瀬戸後期IV段階の遺物なども含まれるが、周辺の以降の状況などから18世紀であろう。

060SD（第14図） A区1面目で検出された406SFの南側に沿って走る溝である。規模は幅0.54m、深さ0.24mを測る。053SDを切っていることから18世紀以降の溝と考えられる。

070SD（第17図） A区1面目で検出された053SDのある平場の上段に位置する平場の中央やや北よりにある溝である。規模は長さ4.0m、幅0.3m、深さ0.15mを測る。溝の中に礫が充填されており暗渠として機能していたと考えられる。遺物はわずかであり時期は不明であるが053SDの屈曲部に接続していた可能性があることから同時期に存在していたと考えられることから18世紀であろう。

240SD（第14図） A区2面目で検出された406SFの北側に沿って走る溝である。規模は幅0.6m、深さ0.20mを測る。埋土の状況から、060SDに先行する溝であると考えられる。

241SD（第9図） A区2面目中央で平場を区画するようにL字に検出された溝である。規模は幅0.9m、深さ0.2mを測る。406SFなどに先行することから17世紀以前であろう。

243SD（第14図） A区2面目で検出された051SDに切られつつ併行して走る溝である。規模は幅0.75m、深さ0.2mを測る。051SDに切られていることから17世紀末以前であろう。

244SD（第14図） A区2面目東端で検出された溝である。規模は幅1.7m、深さ0.35mを測る。瀬戸・美濃窯産登窯第3もしくは第4小期の陶器等を含むことから17世紀半ばから後半と考えられる。

246SD（第18図） A区2面目西よりで検出された溝である。規模は幅1.22m、深さ0.18mを測る。北東側にのみ石組みが確認されている。

240SDに切られることからそれ以前であると考えられるが時期は不明である。

325SD（第19図） A区2面目東よりで平場を区画するようにL字に検出された溝である。規模は幅1.54m、深さ0.21mを測る。時期は不明であるが241SDと同時期に存在したと考えられることから17世紀以前であろう。

381SD（第18図） A区2面目南端で検出された溝である。規模は幅1.42m、深さ0.27mを測る。詳細な時期は不明であるが053SDに切られることから18世紀以前であろう。

386SD（第18図） A区2面目北よりで検出された溝で部分的に石組みがある。規模は幅0.95m、深さ0.15mを測る。時期は17世紀前半と考えられる206SXに切られていることからそれ以前であろう。

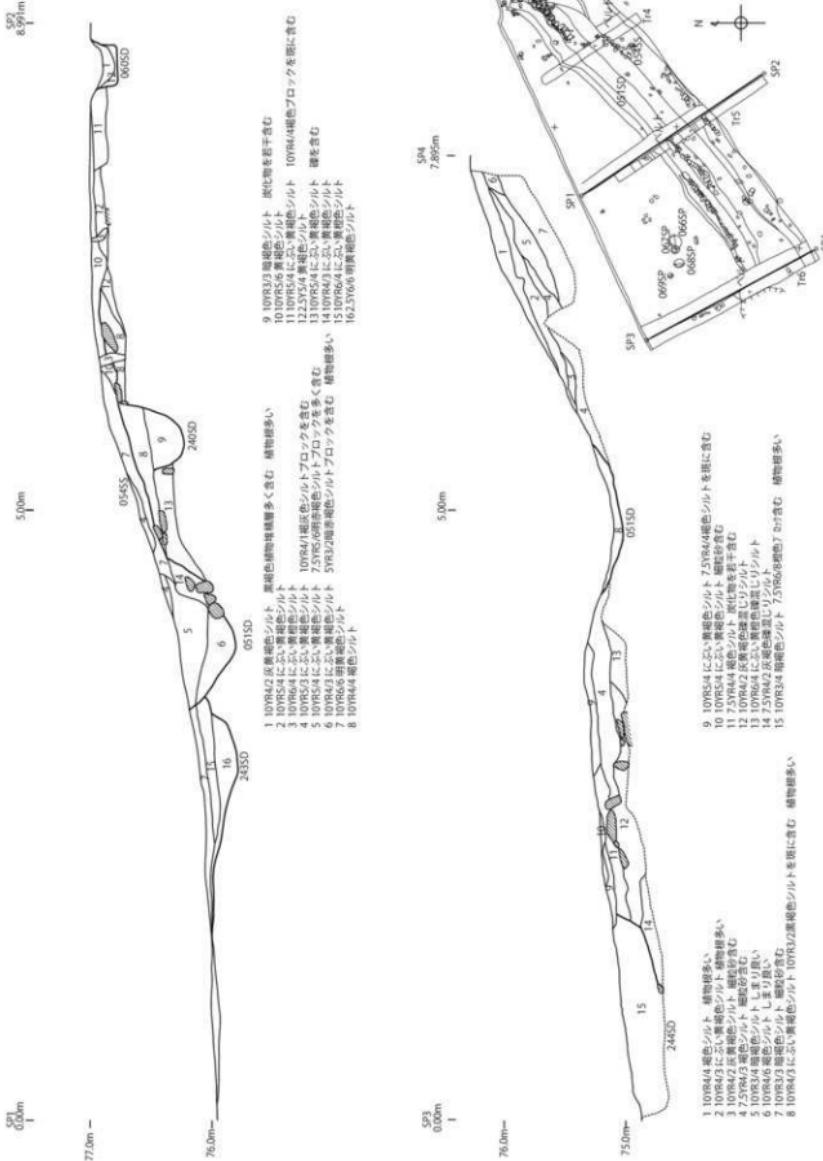
746SD（第25図） C区1面中段の平場で検出された溝である。規模は幅0.8m、深さ0.2mを測る。瀬戸・美濃窯産登窯第2から第8小期の陶器が含まれており、18世紀と考えられる。

769SD（第25図） C区1面中段の平場で検出された溝である。規模は幅2.7m、深さ0.47mを測る。瀬戸・美濃窯産登窯第1から第5小期の陶器が含まれているが、501SWに一部切られていることなどから16世紀後半には存在し、17世紀以降も利用されていたと考えられる。

1201SD（第20図） B区1面中央東よりでL字に検出された溝である。規模は幅0.7m、深さ0.05mを測る。時期の詳細は不明であるが1256SDを切っていることから18世紀と考えられる。

1256SD（第20図） B区2面中央東よりでL寺に検出された溝である。規模は幅1.80m、深さは0.2mを測る。瀬戸・美濃窯産登窯第5から第7小期の陶器を含むことから17世紀半ばから18世紀初めと考えられる。

1341SD（第20図・第21図） C区2面中央西よりで検出された溝である。一部に石組みが確認されている。規模は幅1.2m、深さ0.2m



第 14 図 溝 051SD・060SD・240SD・243SD・244SD 遺構図 1/40

羽根遺跡

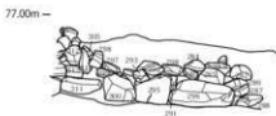
立面 1

SP1
0.00m
I



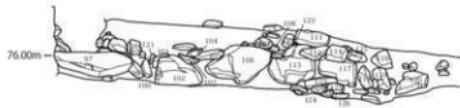
立面 2

SP2
2.248m
I

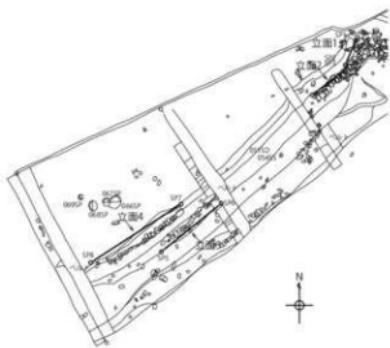


立面 3

SP11
0.00m
I



SP6
3.386m
I



立面 4

SP7
0.00m
I

76.00m —

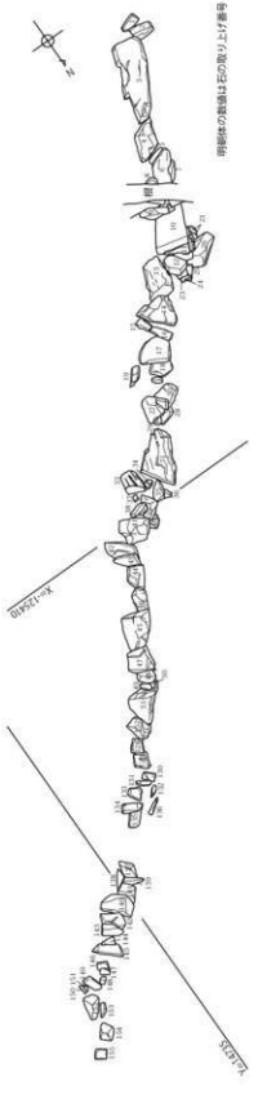


SP8
4.642m
I

明朝体の数値は石の取り上げ番号

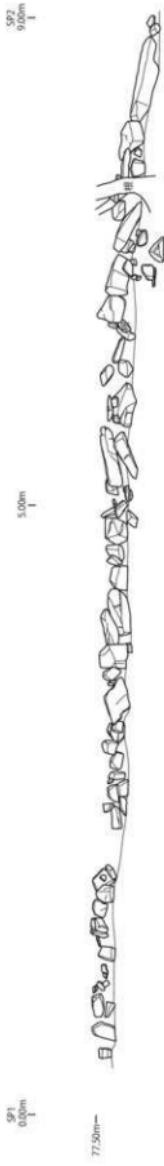
第 15 図 溝 051SD 遺構図 1/40

05255
平面図



明示的な数値は石の高さ(上げ巻号)

立面図



SP2
0.00m

SP1
0.00m

7.75m—

05350



SP2
3.00m

05355

05350

05355

05350

05355

05350

05355

05350

05355

05350

05355

05350

05355

05350

05355

05350

05355

05350

05355

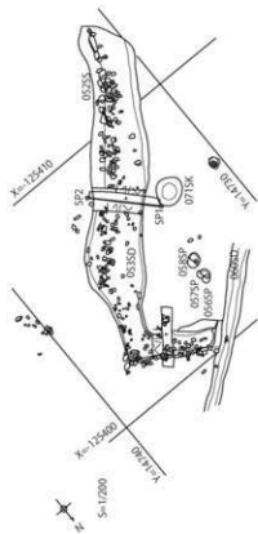
05350

05355

05350

1. 10YR4/2 黒褐色シルト 塗膜含む 槌突壁多い
2. 10YR4/4 紅色シルト 塗膜含む しまで悪い
3. 10YR4/2 水黄褐色シルト 塗膜含む
4. 10YR4/1 沖灰セメント 塗膜含む しまり悪い、

遺構



X=125410

SP2

0.00m

05355

SP1

0.00m

05355

SP2

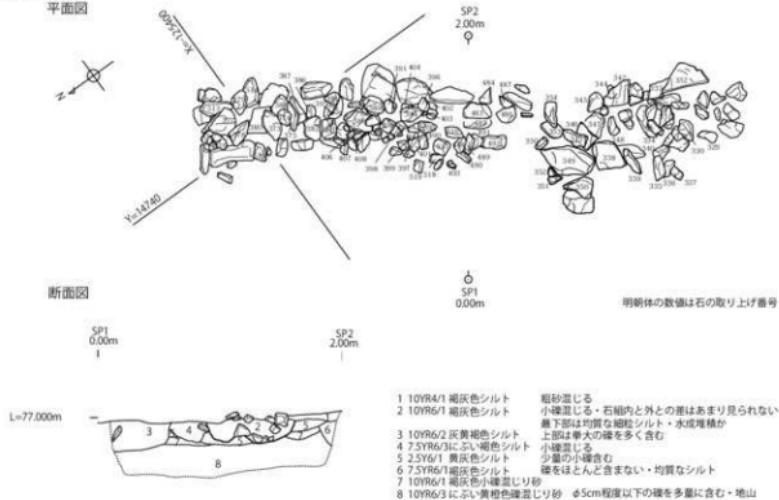
0.00m

05355

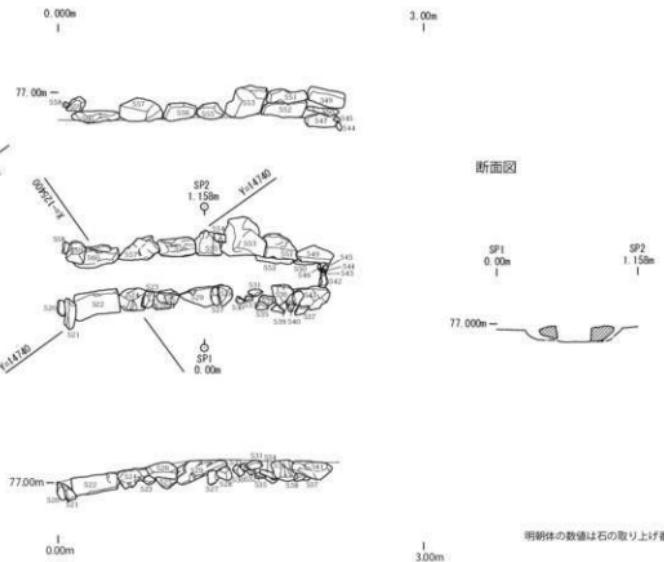
SP1

第 16 図 石組み 052SS・溝 053DD 遺構図 1/40

070SD 上層
平面図



070SD 平面図・立面図・断面図



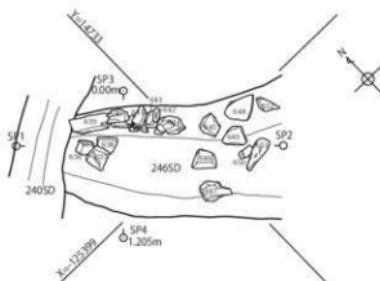
第 17 図 溝 070SD 遺構図 1/40

246SD

平面図・立面図



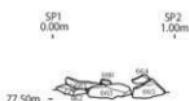
断面図



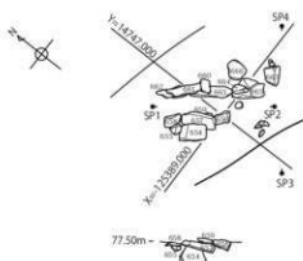
明礬体の数値は石の取り上げ番号

386SD

平面図・立面図



断面図



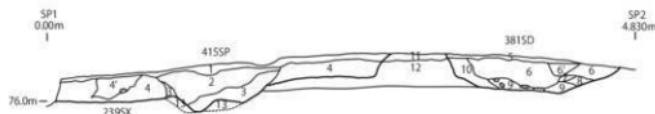
明礬体の数値は石の取り上げ番号

SP1
0.00m
1.00m

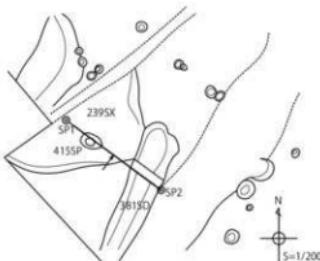
第 18 図 溝 246SD・386SD 遺構図 1/40

羽根遺跡

239SX・381SD 断面図



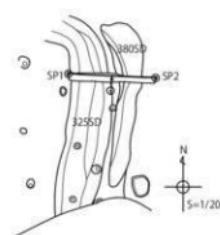
- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト 植物根多い
- 2 10YR4/1 暗赤色シルト 壓化物含む 植物根多い
- 3 10YR4/1 暗赤色縞混じりシルト φ1cm以下の小礫を含む
- 4 10YR3/2 黒褐色シルト極めて均質 淡灰褐色のシルトブロックを少量含む
- 4' 10YR3/2 黒褐色シルト 植物根多い
- 5 10YR4/1 暗赤色シルト 淡灰褐色シルトブロックを多く含む
- 6 10YR5/1 黑褐色シルト風化塊、淡灰褐色シルトブロック、小礫を少量含む
- 6' 10YR5/1 黒褐色シルト層より黒が強い
- 7 10YR5/1 黑褐色シルト
- 8 10YR5/2 灰褐色砂混じりシルト
- 9 10YR4/1 暗赤色縞混じりシルト φ5cm以下の礫を含む
- 10 10YR4/2 暗黒褐色シルト
- 11 10YR6/2 暗黒褐色シルト
- 12 10YR6/1 黑褐色シルトを基にしたシルトを多く含む
- 13 10YR6/1 暗黄褐色縞混じりシルト 傘大の礫を多く含む



325SD・380SD 断面図



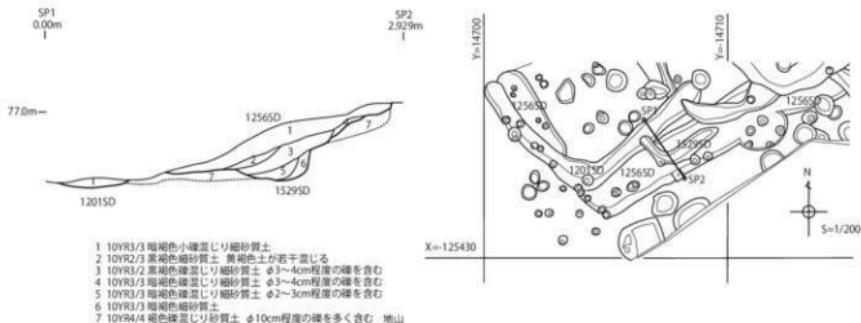
- 1 10YR5/4 暗褐色混じりシルト φ2~3cmの小礫と炭化物を含む
- 2 10YR5/1 にふい 黃褐色縞混じりシルト φ4~5cm礫を含む
- 3 10YR5/3 にふい 黄褐色シルト 均質
- 4 10YR5/4 にふい 黄褐色砂質シルト
- 5 10YR5/6 黄褐色砂質シルト
- 6 10YR3/2 黑褐色縞混じりシルト 風化木跡
- 7 10YR4/3 にふい 黄褐色シルト
- 8 10YR4/6 暗赤色砂シルト 結めて均質
- 9 10YR5/3 にふい 黄褐色シルト 長辺4~5cmの角礫を含む
- 10 10YR5/2 黄褐色砂粘質シルト 一部長辺10cm以上の角礫を含む
- 11 10YR5/6 黄褐色シルト や砂粘土質



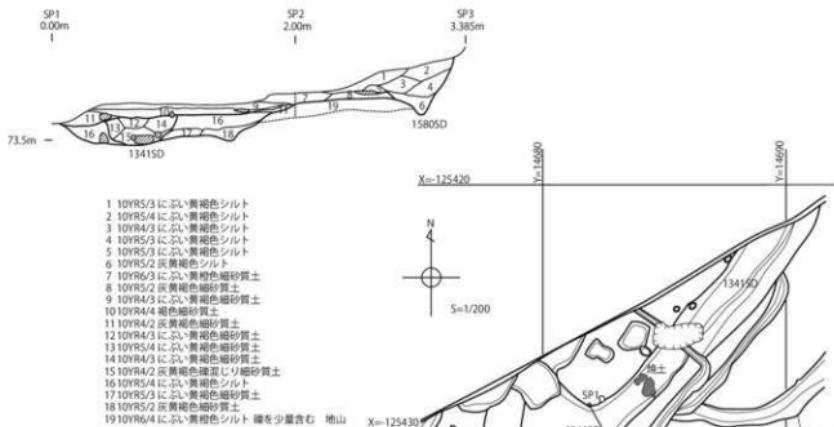
第19図 239SX・溝 381SD・325SD・380SD 遺構図 1/40

遺構

1201SD・1256SD・1529SD断面図



1341SD・1580SD 断面図



第20図 溝 1201SD・1256SD・1341SD・1580SD 遺構図 1/40

羽根遺跡

を測る。瀬戸・美濃窯産登窯第10もしくは第11小期の陶器を含むことから19世紀初めに廃絶したものであろう。

1385SD（第22図）C区2面中央で検出された溝である。1358SD・1500SKとの接合部に石組みを持つ。特に1500SKとの接合部は土坑からの水を受けるように円弧状に石を組んでいる。規模は幅1.2m、深さ0.35mを測る。あまり遺物を含まないため時期の詳細は不明であるが17世紀であろうか。

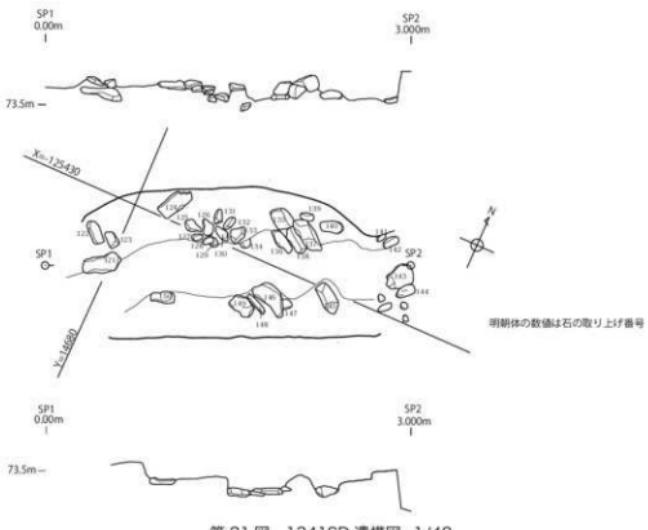
1412SD（第23図）C区2面中央南よりで検出された溝である。規模は3.1m、深さ0.5mを測る。瀬戸・美濃窯産登窯第7小期の陶器を含むことから18世紀前半と考えられる。

1648SD（第23図）D区北側半分を区画するようにコの字に巡る溝である。規模は幅1.0m、深さ0.16mを測る。746SDを切っていることから18世紀以降であろう。

（4）石垣関連遺構

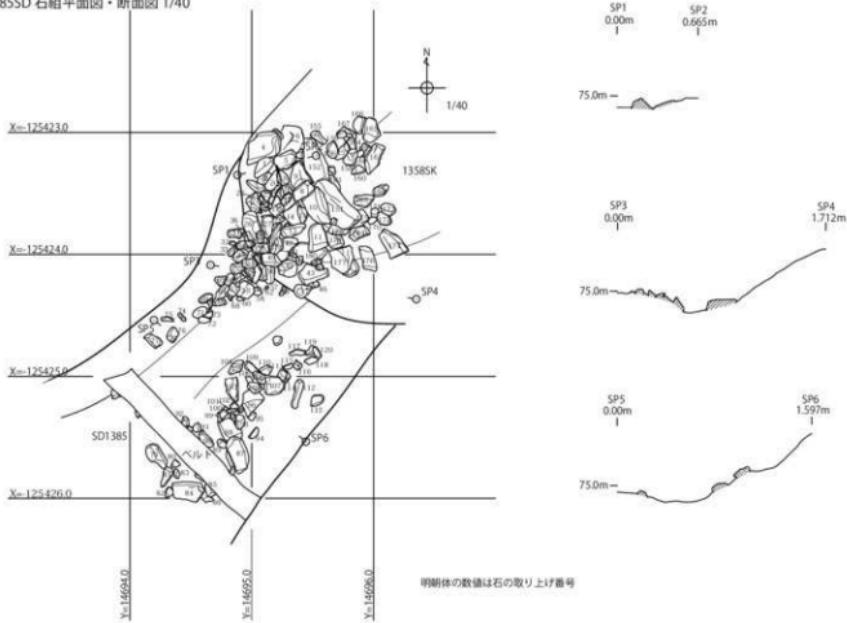
501SW（第24図・第25図）C区1面目で最上段の平場端部で検出された石垣である。規模は長さ6m、高さ1.4mを測る。石材の中心は30cm程度の片麻岩で、中には石塔の部材も含まれていた。石材を撤去後の裏込め部より古瀬戸後期IV段階から瀬戸・美濃窯産登窯第2小期までの陶器が含まれており、また501SWの北端部に一石五輪塔を中心とする遺物廃棄遺構（502SU）があり含まれる遺物が瀬戸・美濃窯産登窯第1から第2小期にかけての陶器のものであることなどから、17世紀前半までには築造されたものと考えられる。

502SU C区1面目で石垣501SWの北端で一石五輪塔等の石塔が集中廃棄された状態で検出された遺構である。石塔類は16世紀後半のものが中心であると考えられるが、瀬戸・美濃窯産登窯第1・第2小期の陶器類を含み、大窯期

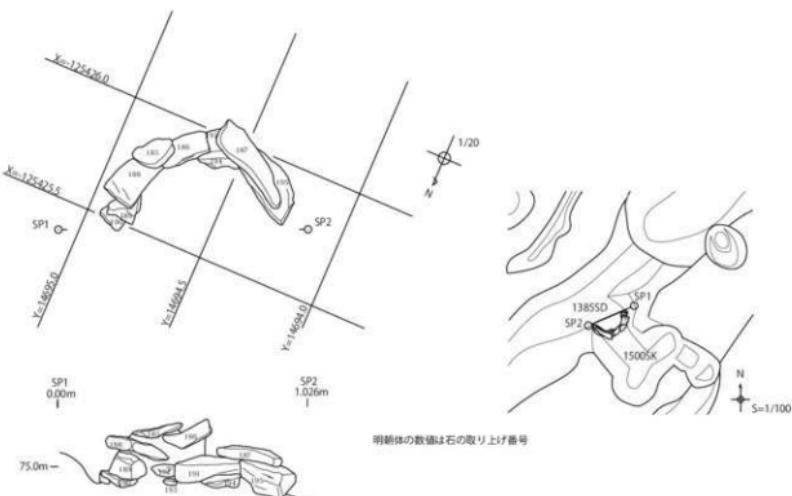


第21図 1341SD 遺構図 1/40

1385SD 石組平面図・断面図 1/40



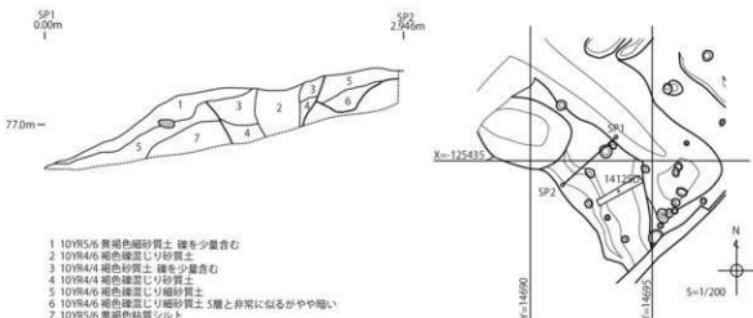
1385SD (下層) 石組平面図・立面図 1/20



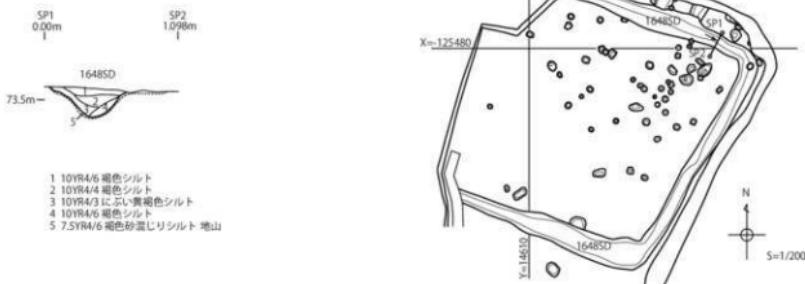
第 22 図 溝 1385SD 遺構図 1/40 + 1385SD (下層) 遺構図 1/20

羽根遺跡

1412SD断面図



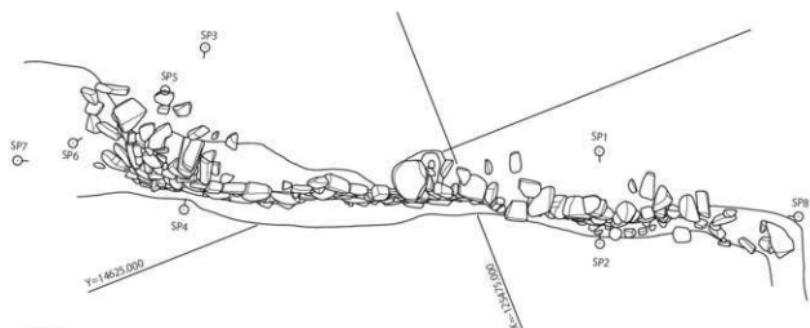
1648SD断面図



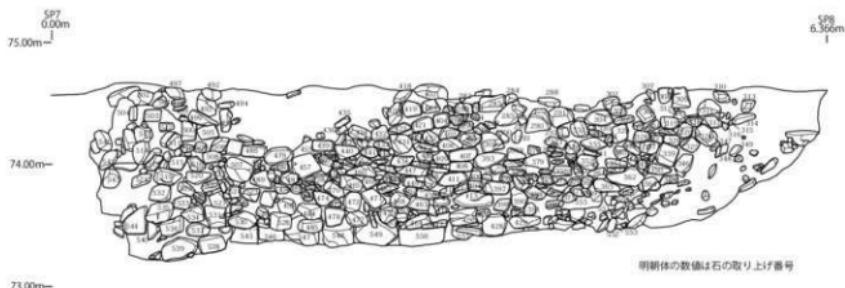
第 23 図 溝 1412SD・1648SD 遺構図 1/40

遺構

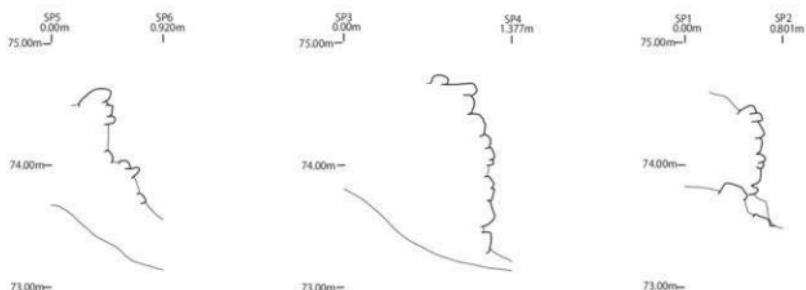
平面図



立面図

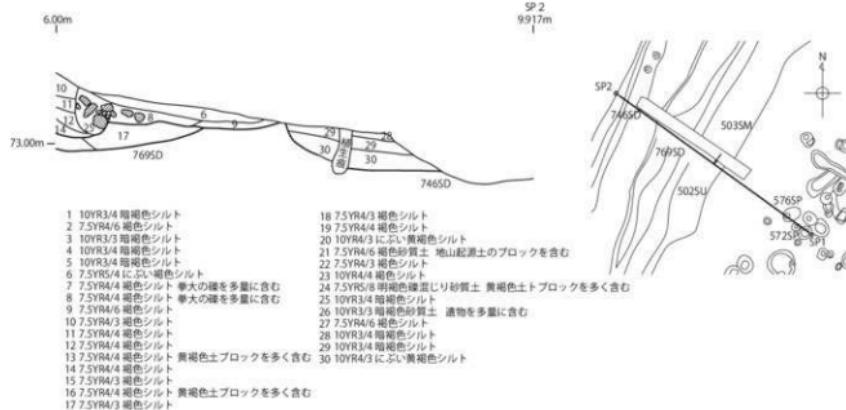
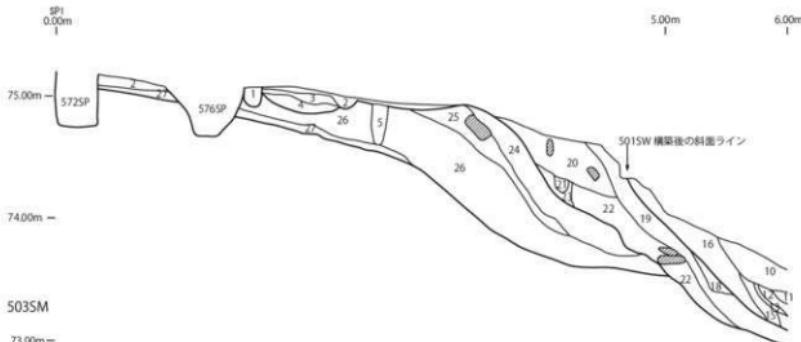
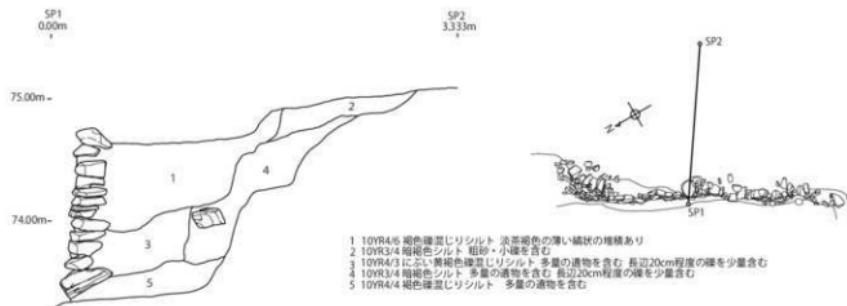


断面図

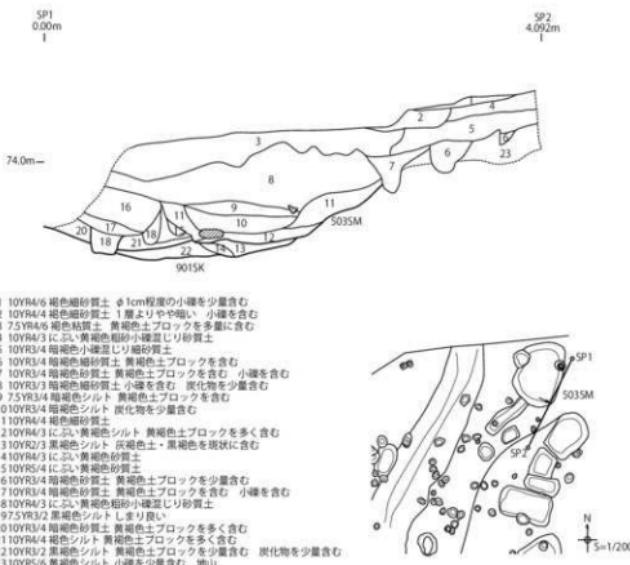


第24図 石垣 501SW 遺構図 1/40

501SW



第25図 石垣 501SW・盛り土 503SM 遺構図 1/40



第26図 503SM 遺構図 1/40

の陶器がないことから、廃棄は17世紀前半に行われたと考える。

503SM (第25図・第26図) C区1面目で石垣501SW北側から裏にかけて検出された盛り土遺構である。本来の緩やかな斜面に褐色砂質土などの土を入れて平場の造成を行っていることが見て取れる。古瀬戸後IV期から瀬戸・美濃窯産大窯第3期までの陶器を含んでいることなどから16世紀後半のものと考えられる。

(5) 土坑

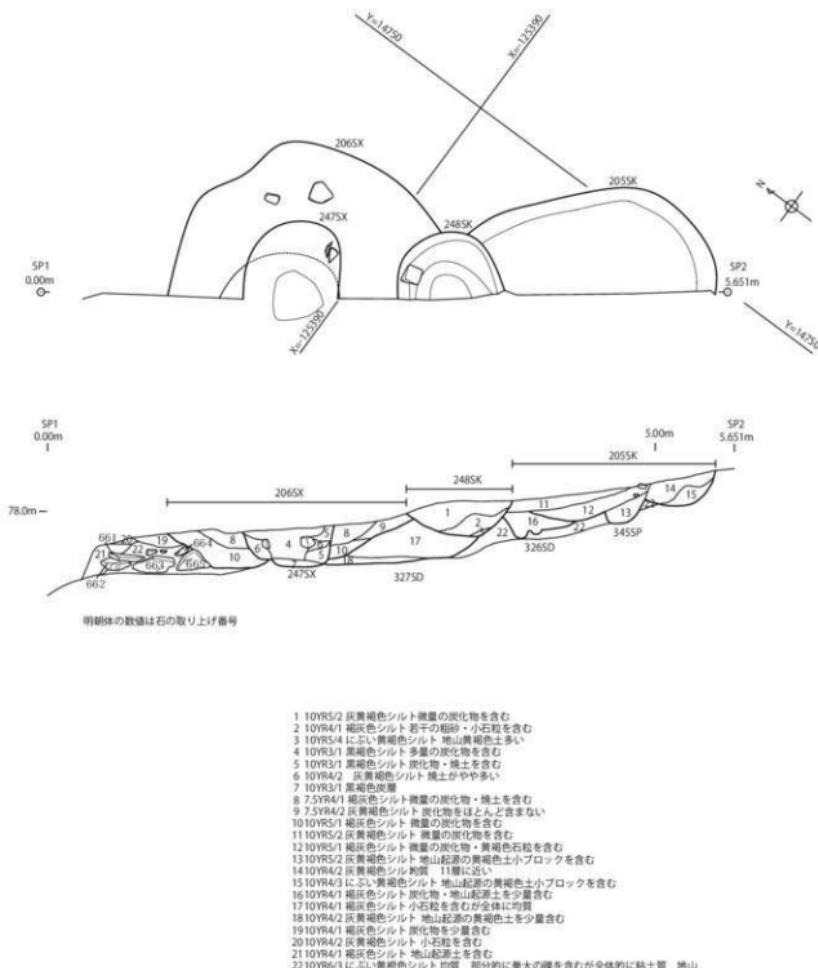
205SK (第27図) A区2面目北よりで検出された土坑である。平面形は1.88m×1.65mの楕円形で、深さ0.35mを測る。瀬戸・美濃窯産大窯I期の擂鉢等を含んでいることから、16世紀初めと考える。

206SX (第27図) A区2面目北よりで205SKと並んで検出された土坑である。明確な規模は不明ながら長径1.50m、深さ0.38mを測る。瀬戸・美濃窯産登窯第2から第5小期の陶器を含むことから17世紀であろう。

239SX (第19図) A区2面目南端で検出された大型の土坑である。平面形は方形であると考えられ、規模は確認できた部分で5.30m×2.80mで、深さ0.38mを測る。山茶碗第6から第10形式が含まれていることから中世前半期となり、時期の確認できる遺構の中では最も古いものである。

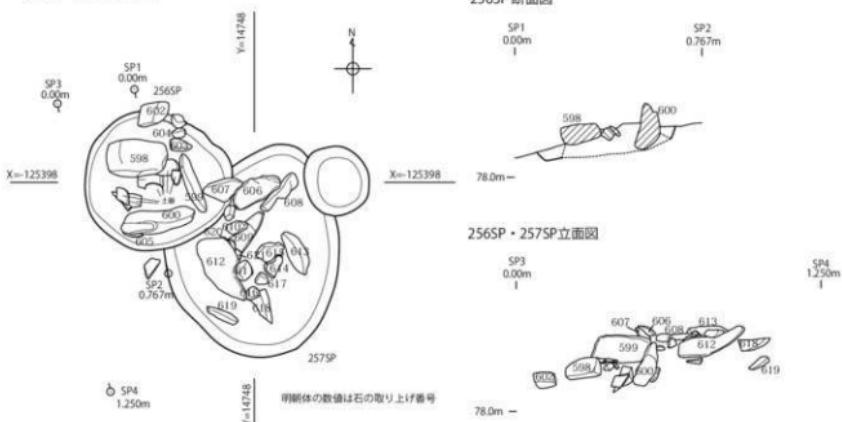
247SX (第27図) 206SKを切る形で検出された土坑である。平面形は0.73m×0.65mの楕円形で、深さ0.34mを測る。埋土は焼土や炭化物を含むもので最深部には2cm程の炭化物

羽根遺跡



第27図 土坑 205SK・206SX・247SK・248SK 遺構図 1/40

256SP・257SP平面図



第28図 土坑 256SP・257SP 遺構図 1/20

の層が確認された。炭化物の年代測定で17世紀前半と考える。

248SK（第27図） 205SK・206SKを切るように検出された土坑である。平面形は $0.88\text{m} \times 0.53\text{m}$ の楕円形で、深さ 0.29m を測る。205SK・206SKを切っていることから17世紀以降と考えられるが明確な時期は不明である。

256SP（第28図） A区1面から2面への包含層掘削段階に中央部東よりで検出された土坑である。平面形は $0.57\text{m} \times 0.57\text{m}$ の円形で、深さ 0.1m を測る。土坑内には25cm前後の礫がコの字に配置され、内側から内耳鍋（半球形）が出土している。炭化物の年代測定とあわせ、15世紀中頃と考える。

257SP（第28図） A区1面から2面への包含層掘削段階に中央部東よりで256SKを切る形で検出された土坑である。平面形は $0.8\text{m} \times 0.7\text{m}$ の楕円形である。256SPほど明確ではないが礫がコの字に配されていたと考えられる。256SPに切られているもののほぼ同時期

ではないかと考えられる。

643SK（第29図） C区1面最上段の平場東側で検出された土坑である。平面形は $1.15\text{m} \times 1.00\text{m}$ の方形で、深さ 0.22m を測る。土坑墓の可能性も考えられる遺構であるが、時期は不明である。

644SK（第29図） 643SKに切られる形で検出された土坑である。平面形は方形で、規模残存部で $1.36\text{m} \times 1.02\text{m}$ 、深さ 0.11m を測る。643SK同様土坑墓の可能性が考えられる遺構であるが、時期は不明である。

884SK（第29図） C区2面目の中央で検出された土坑である。平面形は $2.20\text{m} \times 1.36\text{m}$ の方形で、深さ 0.42m を測る。埋土は地山ブロックなどを含む斑土であることからも土坑墓の可能性が高い。古瀬戸後III期の縄袖皿が出土していることから15世紀であると考える。

950SK（第29図） C区2面への包含層掘削の段階で503SMの下から検出された土坑である。平面形は $0.46\text{m} \times 0.40\text{m}$ の楕円形で、深

羽根遺跡

さは 0.08 m を測る。土坑の中央には底を人為的に抜いたと考えられる内耳鍋が正位で据えている。内耳鍋は半球形と考えられるが口縁部も欠損しており体部のみのため時期などは不明である。

828SK（第 31 図）C 区 1 面で B 区と接する平場で検出された常滑窯産赤物の甕が据えている土坑である。平面形は $0.87\text{m} \times 0.82\text{m}$ の梢円形で、深さ 0.36m を測る。甕の内部には 2 cm 程の黒色の円印が大量に入っている。石灰分の沈着などもないとから水甕として使用された可能性が高い。甕の形状から 18 世紀後半であると考える。

829SK（第 31 図）C 区 1 面で B 区と接する平場で検出された常滑窯産赤物の甕が据えている土坑である。平面形は $0.70\text{m} \times 0.70\text{m}$ の円形で、深さ 0.15m を測る。829SK と同様に水甕として使用された可能性が高い。内部より銅製の棒が出土している。甕の形状から 18 世紀後半であると考える。

1351SK（第 31 図）B 区で C 区と接する平場で検出された常滑窯産赤物の甕が据えている土坑である。平面形は $0.74\text{m} \times 0.70\text{m}$ のほぼ円形で、深さ 0.20m を測る。甕の口縁部が欠損しており、明確な時期は不明である。

1352SK B 区南西より検出された土坑である。平面形は $2.50\text{m} \times 1.70\text{m}$ の梢円形で、深さ 0.30m を測る。内耳鍋（半球形）を中心にも量の遺物を含んでいた。内耳鍋の炭化物の年代測定、瀬戸・美濃窯産登窯第 5・6 小期の遺物などから 18 世紀半ばと考える。

1358SK（第 30 図）B 区 2 面中央で検出された土坑である。平面形は $2.90\text{m} \times 2.30\text{m}$ の梢円形で、深さは 0.60m を測る。1385SK と接しており、接続部には 20 cm 前後の礫が敷き詰められていたことなどからこの溝と一体で機能していたと考えられる。

1500SK（第 30 図）B 区 2 面中央で検出された土坑である。平面形はいびつな形をして

おり、深さ 0.80m を測る。1358SK と同様に 1385SK と接しており、一体で機能していたと考えられる。

1527SK（第 31 図）B 区で C 区と接する平場で検出された常滑窯産赤物の甕が据えている土坑である。平面形は $0.67\text{m} \times 0.67\text{m}$ の円形で、深さ 0.18m を測る。甕の形状からは 17 世紀のものと考えられるが甕内部より瀬戸窯産登窯第 7 小期の陶器が出土していることから、少なくとも廃絶時期は 18 世紀に下ると考えられる。

1539SK（第 32 図）B 区で C 区と接する平場で検出された常滑窯産赤物の甕が据えている土坑である。今回検出された他の埋甕土坑と違い平面形は $1.20\text{m} \times 1.10\text{m}$ の方形で中央にさらに円形の穴を掘り甕を据えていることが確認された。深さ 0.16m を測る。甕の口縁部が欠損しているため、明確な時期は不明である。

（6）炉跡

555SL（第 32 図）C 区 1 面南より検出された炉跡である。平面形は $1.50\text{m} \times 0.65\text{m}$ の隅丸方形で、深さは 0.20m を測る。底の部分は黒褐色で固く焼けしまっており、側壁部も被熱していた。周辺で輪の羽口なども出土しており、鍛冶炉である可能性が考えられる。時期は不明である。出土した炭化材はクヌギ節であった。年代測定に遺構の状況を加味して考えると 17 世紀前半であろう。

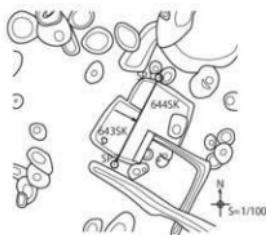
1557SL（第 33 図）B 区西より 1341SD の埋土上で検出された炉跡である。平面形は不定形で、規模は $0.72\text{m} \times 0.50\text{m}$ である。上部は削平を受けており、底面部が残存している状況であった。検出段階で内部にあった細かな炭化物や焼土混じりのにぶい黄褐色砂質土などを除去すると、5cm 前後の炭化物が底部直上に多く確認された。被熱の度合いは強くなく、竈のようなものであった可能性が考えられる。1341SD が 19 世紀初めに廃絶したと考えると 19 世紀以降のものとなる。

遺構

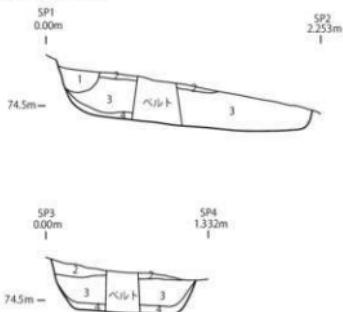
643SK・644SK 断面図 1/40



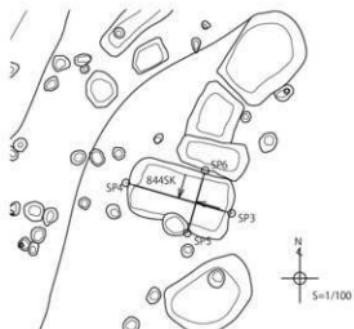
- 1 7.SYR5/8 明褐色シルト
- 2 7.SYR4/6 暗褐色シルト
- 3 7.TYR4/6 暗褐色シルト
- 4 10.YR4/6 暗褐色シルト
- 5 7.SYR4/4 暗褐色シルト
- 6 7.SYR5/8 暗褐色シルト
- 7 7.SYR4/6 暗褐色シルト
- 8 7.SYR5/6 明褐色シルト
- 9 7.SYR5/6 明褐色シルト
- 10 7.SYR5/8 明褐色シルト



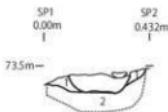
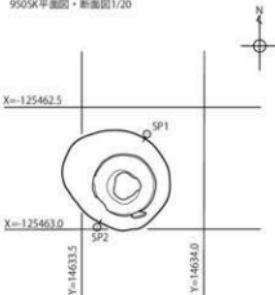
884SK断面図1/40



- 1 10.YR3/4 暗褐色シルト
- 2 10.YR3/3 明褐色シルト
- 3 10.YR3/2 灰黄褐色シルト 地山起源の極小シルトブロックを含む
- 4 10.YR3/3 明褐色シルト 地山起源の極小シルトブロックを含む

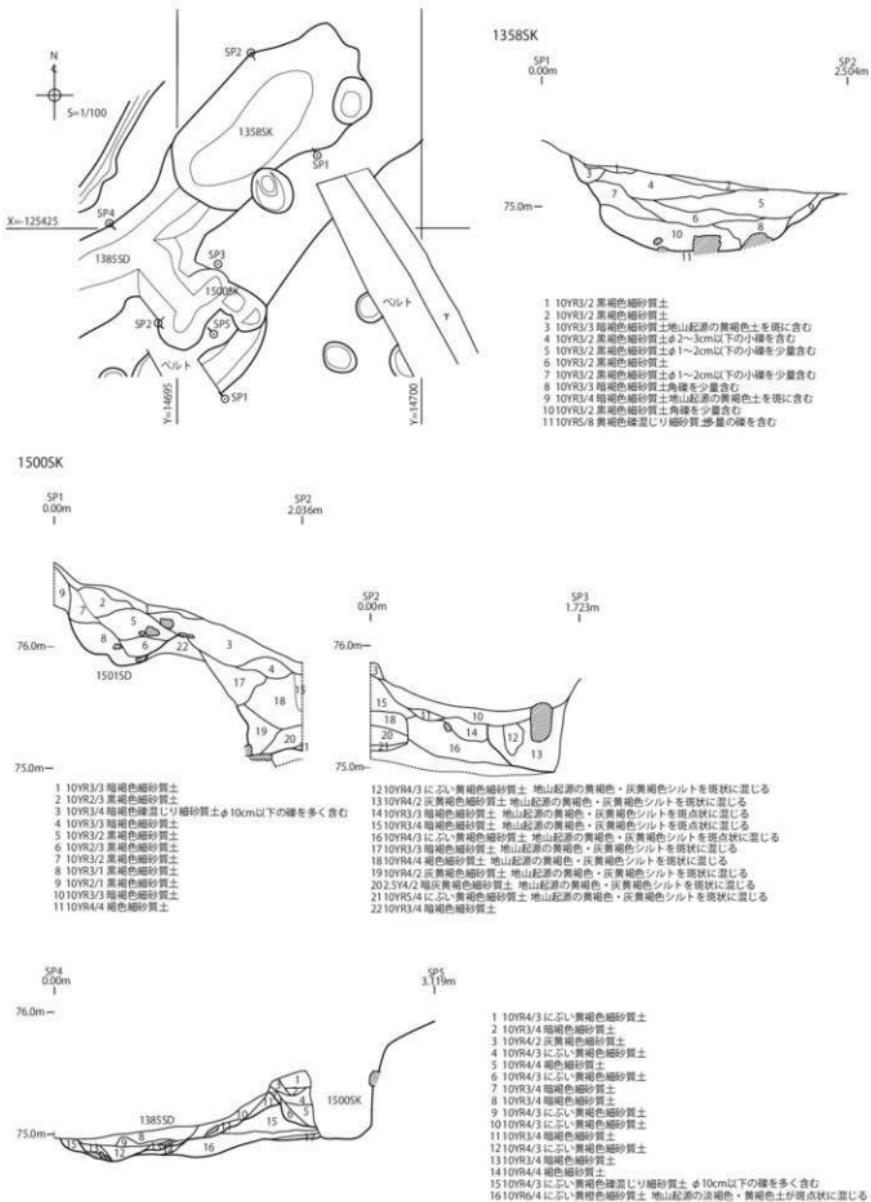


950SK平面図・断面図1/20

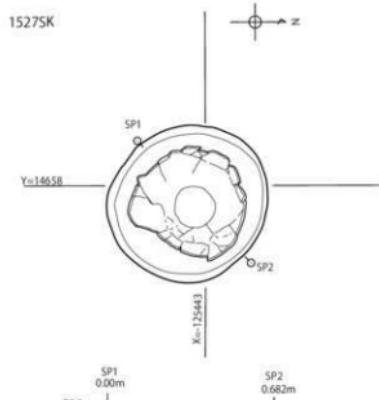
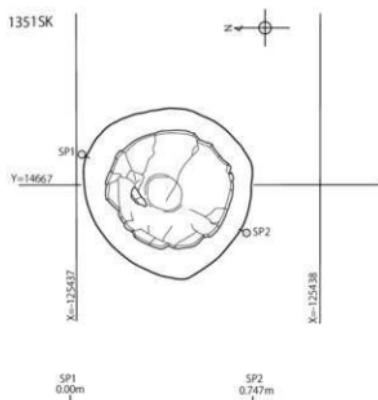
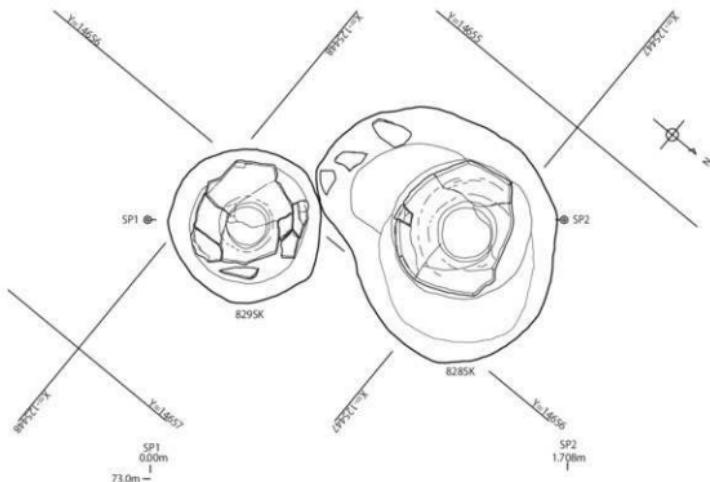


- 1 SYR4/6 香褐色シルト
- 2 7.SYR3/4 暗褐色シルト

第29図 土坑 643SK・644SK・884SK 遺構図 1/40 + 950SK 遺構図 1/20



第30図 土坑1358SK・1500SK構造図 1/40

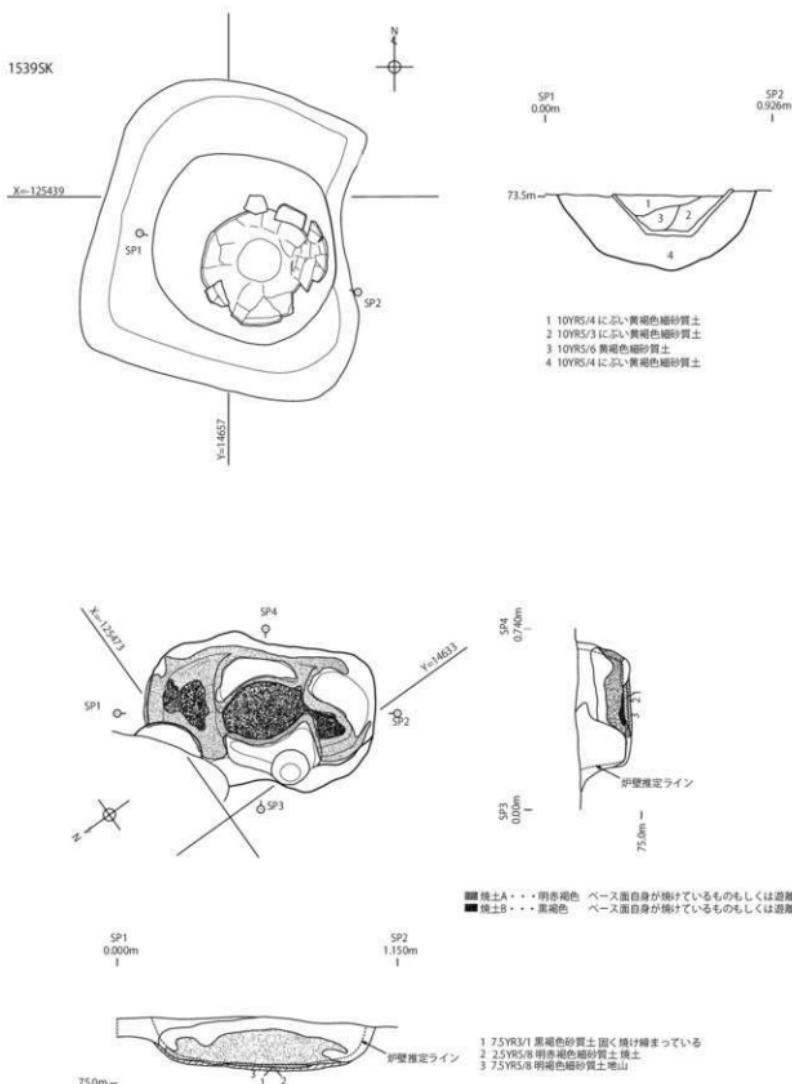


- 1 10YR5/4に近い黄褐色砂質土 褐色が強い
- 2 10YR5/3に近い黄褐色砂質土 やや灰色がかる
- 3 10YR5/4に近い黄褐色砂質土 やや灰色がかる
- 4 10YR5/3に近い黄褐色砂質土

- 1 10YR4/6 褐色細砂質土 褐色が強い

第31図 土坑 828SK・829SK・1351SK・1527SK 遺構図 1/20

羽根遺跡

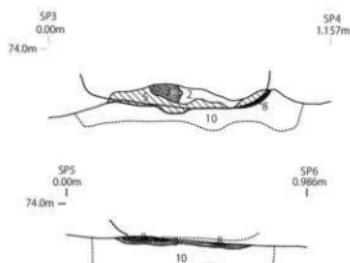
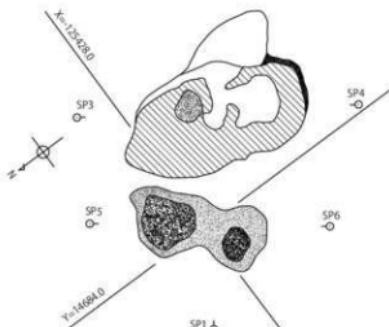


第32図 土坑 1539SK・炉跡 555SL 遺構図 1/20

遺構

1557SL 平面図・断面図 1/20

SP2 ♀



■ 地土A・・・赤褐色 ベース面自身が掛けているものもしくは遮離地土塊
■ 地土B・・・黒褐色 ベース面自身が掛けているものもしくは遮離地土塊
▨ 地土片・炭泥じり

- 1 10YR5/4 に近い黄褐色細砂質土 壕・填土を少量含む
- 2 10YR5/3 に近い、黄褐色細砂質土 壕・填土を含む
- 3 2SYR5/8 明赤褐色地土塊
- 4 10YR4/2 床黄褐色地土塊
- 5 SYR6/4 に近い、橙色地土 遮離地土を大量に混じる
- 6 10YR2/1 黒色炭層
- 7 10YR5/3 に近い、黄褐色細砂質土 壕・填土を少量含む
- 8 10YR3/2 黑褐色 10層が被疊
- 9 SYR4/4 に近い、赤褐色細砂質土 10層が被疊
- 10 10YR5/3 に近い、黄褐色細砂質土 134150埋土

1557SL (下層) 平面図 1/20

白抜きは炭化物

■ 地土A・・・赤褐色 ベース面自身が掛けているものもしくは遮離地土塊
■ 地土B・・・黒褐色 ベース面自身が掛けているものもしくは遮離地土塊

第33図 炉跡 1557SL 遺構図 1/20

羽根遺跡

(7) 井戸

1348SE（第34図）B区北西壁南よりに接するように検出された土坑である。平面形は1.10m×1.00mの方形で、深さは2.00mを測る。底部で湧水層に達していることから井戸と判断される。井戸側の構築物は残存しておらず、抜き取られて依存しないものと判断される。底部から径数cmの丸木が出土しており、マツ属とモクレン属のものであった。古瀬戸後IV期新段階の陶器などが含まれることから15世紀後半と考える。

1594SE（第34図）B区南より中央部で検出された土坑である。平面形は2.20m×2.00mの円形で、深さは1.50mを測る。土層断面を確認すると掘り方が不自然ではあるが、底部で湧水層に達していることから井戸と考えられる。井戸側の構築物は残存していないかったが、底部からマツ属の丸木とクリ属の柵目が出土していることから抜き取られたものと考えられる。時期は不明である。

1596SE・1597SE・1598SE（第35図）B区2

面の沢よりで1591NRの埋土の下から検出された土坑である。

1596SEは1597SEに切られている。残存している平面形は1.90m×1.10mで円形であったと考えられ、深さは0.50mを測る。底部で湧水層に達することから井戸と判断される。井戸側の構築物などは確認できない。

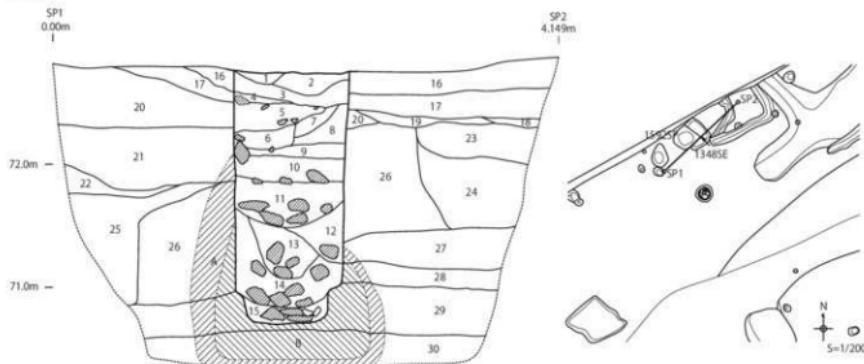
1597SEの平面形は2.20m×2.00mの円形で、深さは0.90mを測る。底部で湧水層に達することから井戸と判断される。井戸側の構築物などは確認できない。1596SEが埋まつた後に掘り直したものと考えられる。

1598SEの平面形は2.80m×2.20mの楕円形で、深さは0.5mを測る。底部が湧水層に達することから井戸と判断される。井戸側の構築物などは確認できない。

これらの時期は、いずれからも遺物が出土せず明確ではないが、1591NRの埋土から渥美型第6形式の山茶碗が出ていることから、13世紀以前である可能性が考えられる。

遺構

1348E

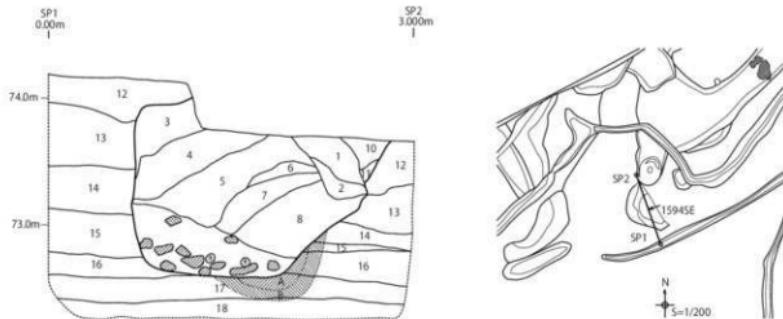


- 1 10YR4/4 褐色砂質土 細褐色土を少々含む
- 2 10YR4/4 褐色細砂質土 細褐色土を含む
- 3 10YR4/4 に少々褐褐色地山 地山褐色土を含む 岩化物を少々含む
- 4 10YR4/4 に少々褐褐色地山 地山褐色土を含む 岩化物を少々含む 3層よりしまりが強い
- 5 10YR3/3 褐褐色地山じり粘質土 褐褐色土を含む 岩化物を少々含む
- 6 10YR4/2 黄褐色地山 黄褐色土ブロックを多く含む
- 7 10YR4/4 褐色粘質土 褐褐色土ブロックを多く含む
- 8 10YR3/4 褐褐色地山 黄褐色土ブロックを多く含む
- 9 10YR4/4 褐色粘質土
- 10 10YR4/4 に少々褐褐色地山じり粘質土 繾を多く含む
- 11 2.5YR6/6 明黄色地山じり粘質土
- 12 2.5YR6/6 明黄色地山じり粘質土
- 13 10YR1/1 灰色硬混じりヘドロ
- 14 2.5YR3/1 オリーブ色黒色硬混じり粘質土
- 15 10YR4/1 灰色硬混じりヘドロ

- 16 10YR7/6 明黄色地山じりシルト
- 17 10YR7/7 に少々褐褐色地山じりシルト
- 18 2.5YR7/2 明赤色シルト
- 19 2.5YR6/6 明黄色シルト 鉄分を多く含む
- 20 10YR7/6 明黄色地山じりシルト 鉄、マンガンを多く含む
- 21 10YR7/6 明黄色シルト 鉄、マンガンを多く含む
- 22 10YR7/6 明黄色地山じりシルト 地山より鉄分が細かい
- 23 10YR7/6 明黄色地山じりシルト 鉄分を多く含む
- 24 10YR7/6 明黄色地山じりシルト
- 25 10YR7/6 明黄色地山じりシルト 鉄、マンガンを多く含む
- 26 10YR7/8 黄褐色地山じりシルト
- 27 10YR7/4 浅黄褐色繊維
- 28 10YR7/6 黄褐色シルト
- 29 10YR7/7 黄褐色シルト
- 30 10YR7/8 黄褐色シルト わずかに漏水

- A 586/1 青灰色に変色
B 10YR7/1 灰白色に変色

1594SE

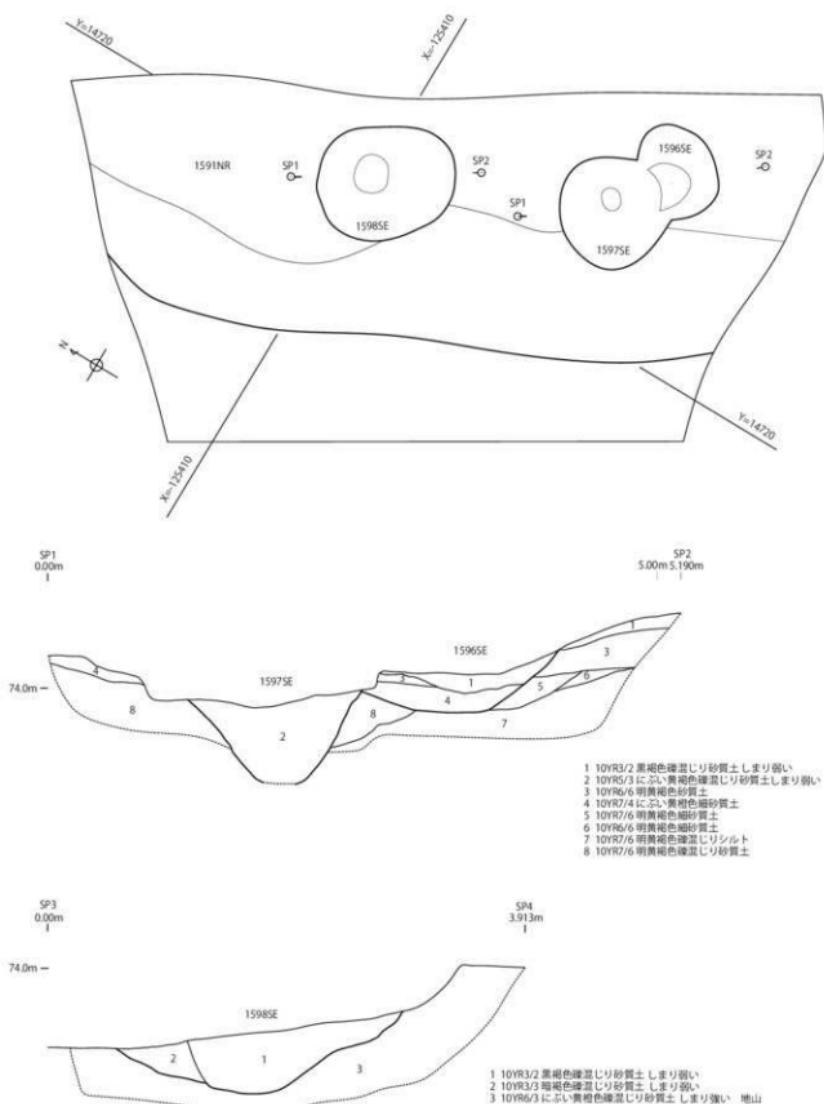


- 1 10YR7/4 に少々黄褐色細砂質土
- 2 10YR7/2 に少々黄褐色細砂質土
- 3 10YR6/6 明黄色細砂質土
- 4 10YR4/3 に少々黄褐色細砂質土
- 5 10YR4/4 に少々黄褐色細砂質土
- 6 10YR5/3 に少々黄褐色細砂質土
- 7 10YR5/2 黄褐色細砂質土
- 8 10YR4/4 黄褐色細砂質土
- 9 10YR4/4 褐色細砂質土
- 10 10YR6/4 に少々黄褐色細砂質土 地山崩壊土

- A 586/1 青灰色に変色
B 10YR7/1 灰白色に変色

第34図 井戸 1348E・1594SE 遺構図 1/40

羽根遺跡



第35図 井戸 1596SE・1597SE・1598SE 遺構図 1/40

第3章 遺物

第1節 出土遺物の概要

今回の調査で羽根遺跡から出土した遺物は、整理作業終了後の段階で27リットル入りコンテナに約60箱にのぼる。その内訳は、土器・陶磁器類、金属製品、木製品、石製品などに分けることができる。ここでは、遺物をこの材質別に大別して報告することとしたい。

遺物の採取方法は、通常の包含層や遺構掘削において発見された遺物を採取する方法であり、篩別などの厳密な方法を採用してはいない。

第2節 土器・陶磁器類

本遺跡から出土した焼物（土器・陶磁器類）は弥生時代から江戸時代までに至る幅広い時期の遺物が存在しているが、遺物の大半は戦国時代から江戸時代に属するものである。この時期の遺物は瀬戸・美濃窯産陶器と土師器が大半を占め、この他に常滑窯産陶器、肥前窯産陶器、京・信楽窯産陶器、中国産磁器、瓦器、瓦などが存在する。瀬戸・美濃窯産陶器については藤澤良祐の分類と編年を、常滑窯産陶器については中野晴久の分類と編年を参考にした。また土師器については便宜上次のように分類を行うこととした。

内耳鍋のうち体部から口縁部が全く屈曲しないものをA類とし、体部と口縁部の境界でわずかに屈曲する内彎形のものをB類、体部から口縁部が大きく屈曲し口縁部を外側に折り返すくの字形のものをC類とした。A類は、体部が直立するものを第1形式、口縁部がやや内彎したものを第2形式、体部は直立するものの器高が低くなるものを第3形式、体部から口縁部へ内彎し器高が低くなるものを第4形式とした。B類は、口縁部より体部が膨らむものを第1形式、体部から口縁部へほぼ一

遺物の多くは遺構から出土しているが、実際の調査では厳密に遺構面を把握して掘削していないことなどから、別遺構を起源とする遺物を含んでしまっている場合も想定される。多くの資料群にこのような一括性に疑問が生じていることをあらかじめ断っておきたい。

以上のような状況ではあるけれども、本報告では比較的豊富な出土量を持つ遺構の出土資料を中心に図化し紹介することとした。

直線に立ち上がるものを第2形式、口縁部が体部より開くものを第3形式とした。C類は、口縁部より体部が膨らむものを第1形式、口縁端部と体部の膨らみが嘶面でほぼ一直線に並ぶものを第2形式、口縁部が体部より開くものを第3形式とした。これら鍋の時期を鈴木正貴の分類と編年を参考に放射性炭素年代測定のデータを加味して考えると、第1形式が15世紀中～15世紀後半、第2形式が15世紀後半～16世紀前半、第3形式が16世紀末～17世紀前半、第4形式が18世紀と考えられる。B類は第1形式が15世紀後半～16世紀前半、第2形式が16世紀後半～17世紀初頭、第3形式が16世紀末～17世紀初頭と考えられる。C類は第1形式が15世紀中頃、第2形式が15世紀後半、第3形式が15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

土師器皿については、そのほとんどが非ロクロ調整のものであるため個体差が大きくなりにくいが、便宜上断面形が箱形に近いものをA類、底部からやや膨らみながら口縁部へ立ちあがるものをB類、口縁部が外へ反るもののがC類、底部から体部が直線的に開くものをD類、

羽根遺跡

それ以外のものとして分類を行った。

501SW 出土遺物（第 36 図・第 37 図 1～39）瀬戸・美濃窯産陶器と土師器、常滑窯産陶器、中国産青磁・白磁などがある。検出・精査時の遺物として土師器皿 A 類（1～7、9、10）、土師器皿 D 類（8）、瓦質蓋がある。石垣解体後、裏込め部分から出てきたものとして、瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗（12～15）があり、12 と 15 は古瀬戸後 IV 期、13 は大窯 2 段階、14 は登窯第 2 小期の資料と考える。17 は白磁皿で湖高台をもち、27 は青磁である。土師器は、蓋（16）、皿（18～26）、茶釜（28・29）、内耳鍋 A 類（30）、C 類（31～34）、羽付鍋（35～37）がある。16 は内側にススが付着しており火消壺の蓋と考えられる。皿は A 類（18）、B 類（19～21・24）、C 類（26）、D 類（22・23・25）であり、26 については底部が穿孔されている。内耳鍋 A 類（30）は第 2 形式、C 類（31～34）は 31 が第 1 形式、他は第 2 形式である。この他、常滑窯産陶器として真焼の甕（38）、壺（39）がある。38 は 10 形式、39 は 11 形式に属する。全体としては 17 世紀前半までの資料でまとまっていると考えられる。

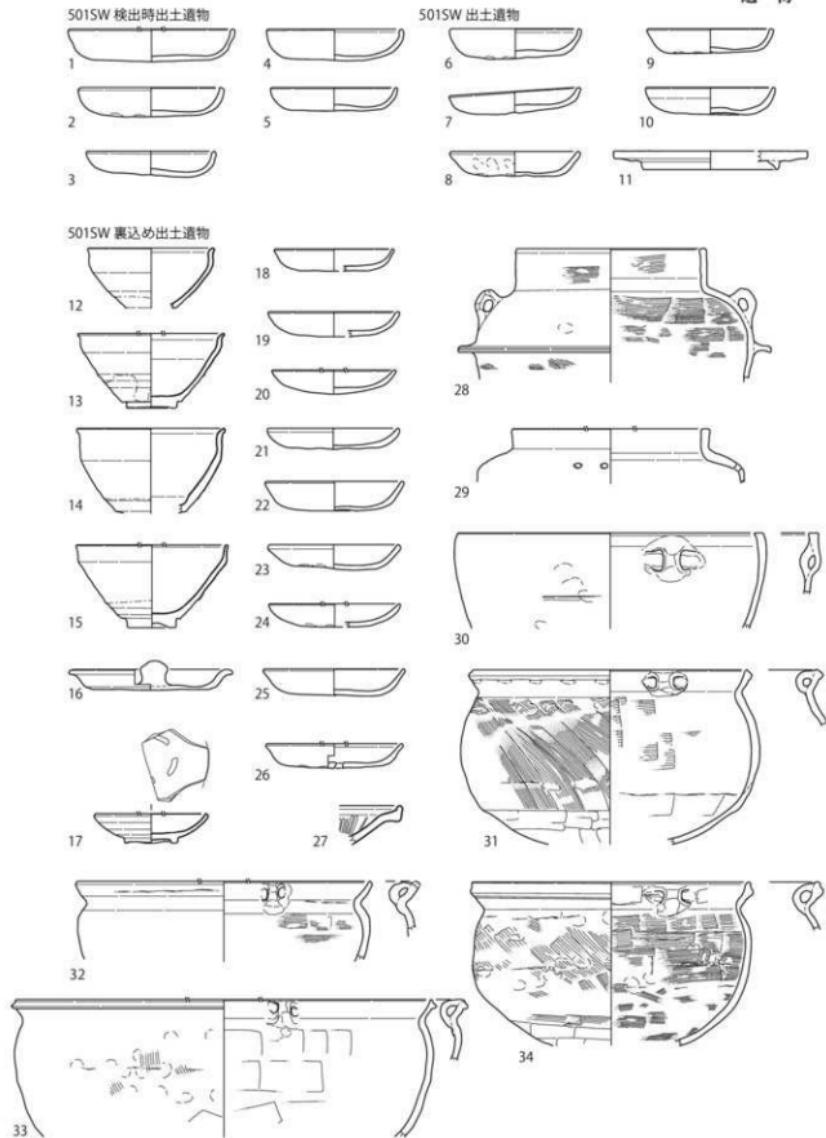
502SU 出土遺物（第 38 図 40～56）瀬戸・美濃窯産陶器と土師器、常滑窯産陶器などがある。検出・精査時の遺物として土師器内耳鍋 A 類第 2 形式（40）がある。石塔類とともに出土した遺物として、瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗（43・44）、丸碗（45）、丸皿（46）がある。44 は白天目、45 は底部に墨書がある。丸皿（46）は大窯 2 段階と考えられるが、それ以外は登窯第 1～第 2 小期に位置づけられる。土師器は、皿（47～50）、内耳鍋 A 類（55）、内耳鍋 B 類（53・55・56）、内耳鍋 C 類（52）、羽付鍋（54）がある。皿は A 類（49・50）、D 類（47・48）である。内耳鍋は内耳鍋 A 類（55）は第 1 形式、内耳鍋 B 類（53・56）は 53 が第 1 形式、56 が第 2 形式、内耳鍋 C 類（52）

は第 2 形式である。常滑窯産陶器として 17 世紀に属する赤物の深鉢（51）がある。下層からの遺物としては、土師器皿 B 類（41）、土師器鍋（42）がある。土師器鍋については羽付鍋の可能性もあるが、口縁部が内傾しておりはっきりしない。概ね 17 世紀前半を中心とする資料であるといえる。

503SM 出土遺物（第 39 図 57～91）瀬戸・美濃窯産陶器と土師器、常滑窯産陶器などがある。瀬戸・美濃窯産陶器には仏壇具（58）、端反皿（59）、折縁中皿（60）、花瓶（73）、捕鉢（74・75）がある。58・60・73 は古瀬戸後 IV 期、59 は大窯第 1 段階、74 は大窯 3 段階、75 は大窯 2 もしくは 3 段階に位置づけられる。土師器には皿（62～72）、茶釜（86～88）、内耳鍋 A 類（89～90）、内耳鍋 B 類（83～85）、内耳鍋 C 類（79～82）がある。土師器皿は A 類（64・65）、B 類（67～70）、C 類（62・63）、D 類（66・71）で、72 は唯一のロクロ調整皿である。内耳鍋 A 類（89～90）は 90 が第 1 形式、89・91 は第 2 形式、内耳鍋 B 類（83～85）はすべて第 1 形式、内耳鍋 C 類（79～81）は 79・82 が第 1 形式、80・81 が第 3 形式である。常滑窯産陶器として真焼の甕（76）があり、10 形式に属する。この他、京・信楽系碗（57）、中国産磁器大皿（61）がある。57 については底部に『清』の刻印が施されている。下層からは瀬戸・美濃窯産の丸皿（77）、土師器皿（78）がある。丸皿（77）は大窯 3 段階である。78 は土師器皿と考えてはいるが体部が丸く口縁端部が外反しており今回の分類に当てはまらないものである。全体としては 15 世紀後半から 16 世紀後半に位置づけられる。

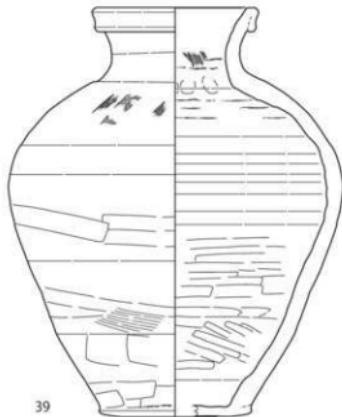
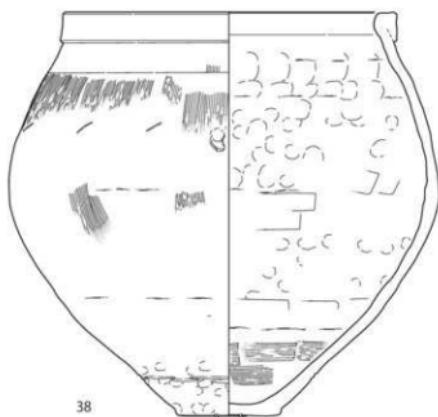
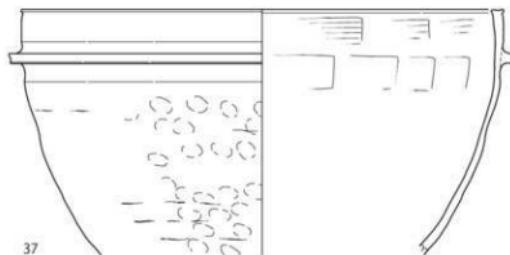
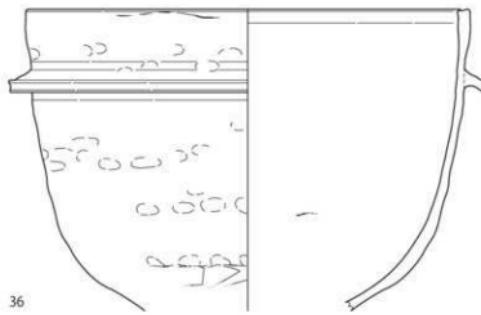
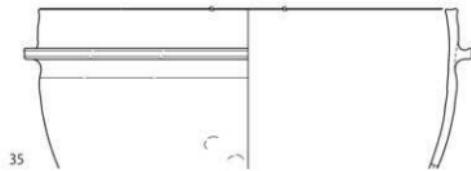
A 区溝出土遺物（第 41 図 92～107）A 区の溝から出土した資料を一括して紹介したい。92・93 は 031SD 出土遺物。92 は弥生時代後期の高杯脚部で混入資料である。93 は土師器皿 B 類である。94・95 は 034SD 出土遺物。94 は仏壇具で美濃窯産登窯第 6 小期と考えら

遺物

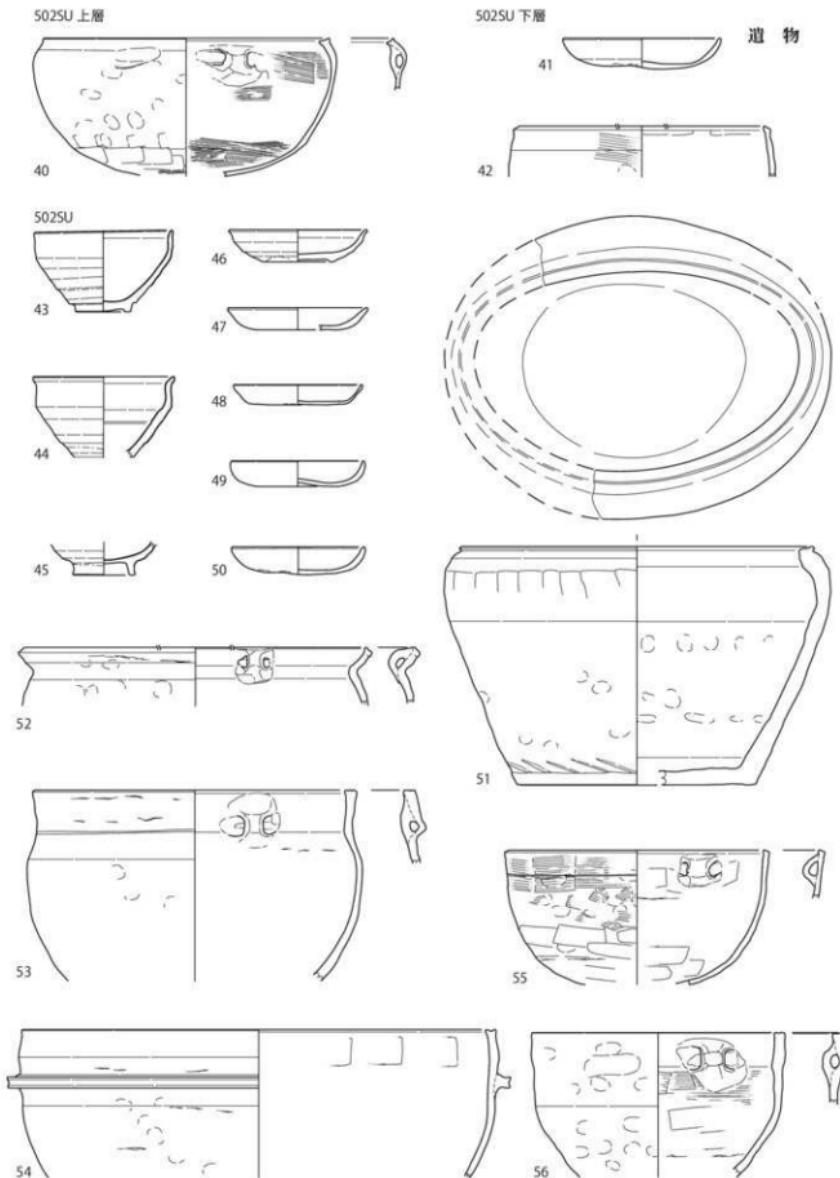


第36図 501SW出土遺物(1) (S=1/4)

羽根遺跡



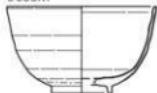
第37図 501SW 出土遺物(2) (S=1/4)



第38図 502SU出土遺物 (S=1/4)

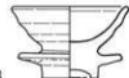
羽根遺跡

503SM



57

58

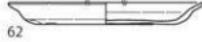


59

60



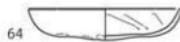
61



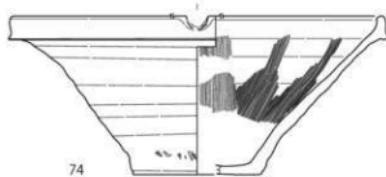
62



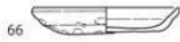
63



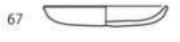
64



74



65



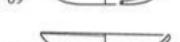
66



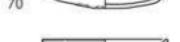
67



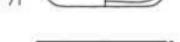
68



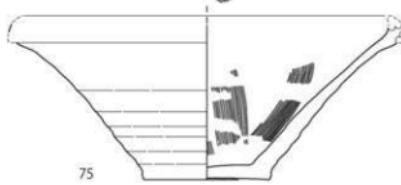
69



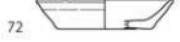
70



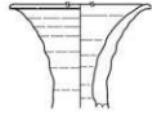
71



75



72



73

503SM 下層

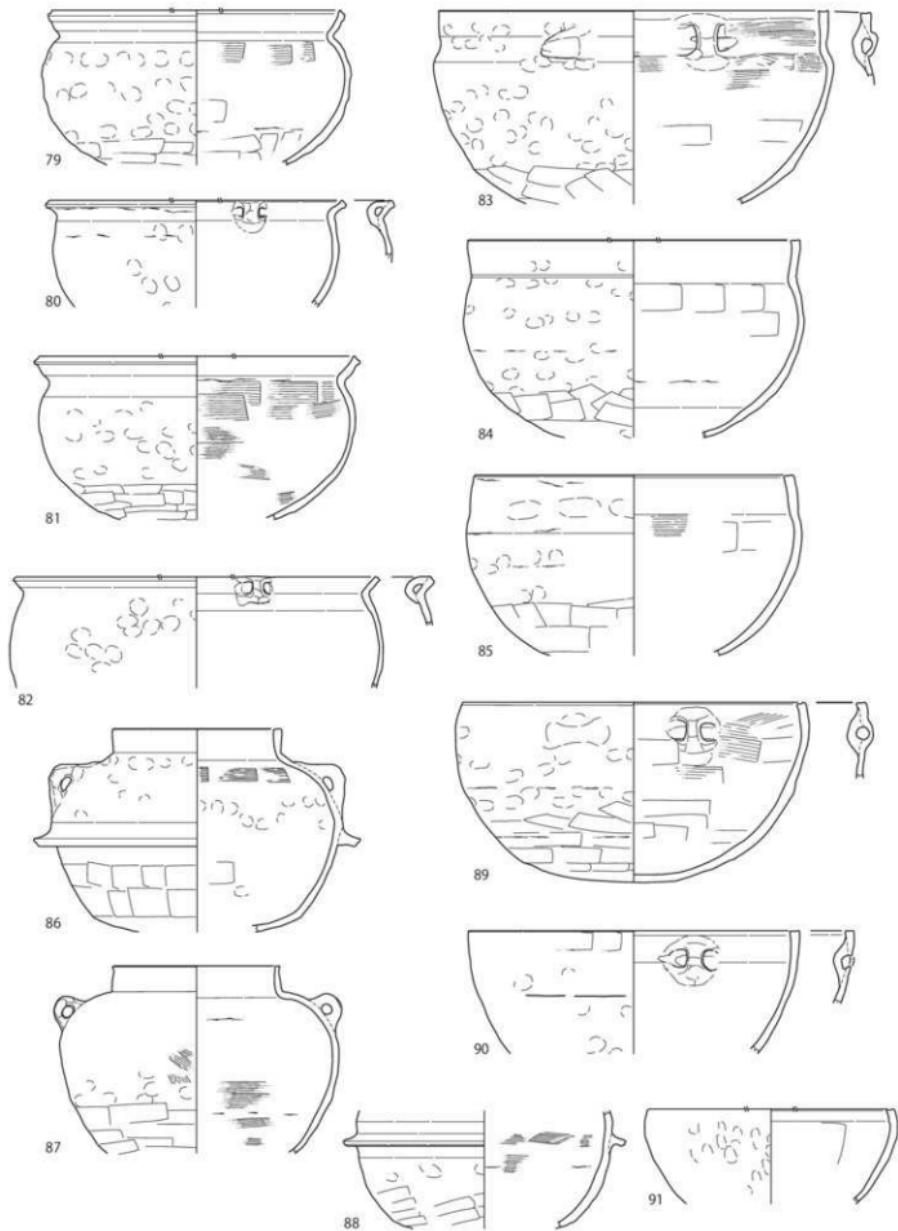


77

78

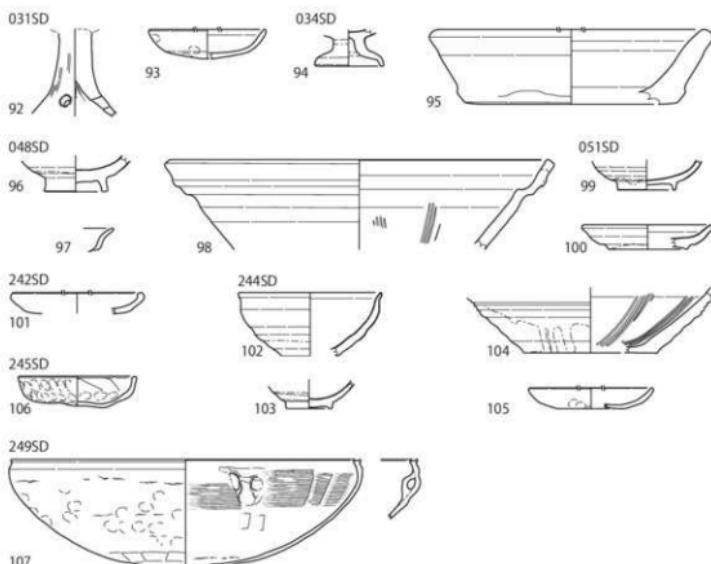
76

第39図 503SM 出土遺物(1) (S=1/4)



第40図 503SM 出土遺物(2) (S=1/4)

羽根遺跡



第41図 A区 溝出土遺物 (S=1/4)

れるもの。95は常滑窯産赤物の三足火鉢で17世紀と考えられる。96～98は048SD出土遺物。96・98は瀬戸窯産陶器で96は御室茶碗、98は捕鉢である。96は登窯第2小期、98は登窯第8小期に属すると考える。99・100は051SD出土遺物。99は瀬戸窯産の御室茶碗、100は美濃窯産灯明皿である。いずれも登窯第6小期に属するものである。101は242SD出土の土師器皿A類、102～105は244SD出土遺物。102～103は瀬戸・美濃窯産陶器で102は天目茶碗、103は丸銷小杯、104は捕鉢である。102・104は古瀬戸後IV期のもの、103は登窯第3もしくは第4小期に属するものである。105は土師器皿B類である。107は249SD出土遺物で土師器の熔渣で18世紀と考えられる。

B区溝出土遺物（第42図 108～135）

B区の溝から出土した資料を一括して紹介したい。

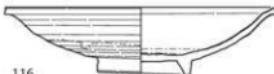
108～117は1256SD出土遺物である。108は瀬戸・美濃窯産の祖母懐壺底部、古瀬戸後IV期もしくは大窯I段階に属するものである。109は瀬戸窯産かけ分け碗で登窯第5もしくは第6小期、116は美濃窯産折緑輪禿皿で登窯第7小期に属するものである。110～115は土師器皿で110～114はA類、115は底部から口縁まで直線的に開き口縁部が水平になでてあり、今回の分類に属さないものである。117は、土師器内耳鍋C類第2形式である。118～121は1257SD出土遺物である。118は瀬戸窯産腰銷碗、119は美濃窯産灯明皿でともに登窯第6小期に属する。121は土師器皿A類、121は常滑窯産真焼の小型壺である。

遺物

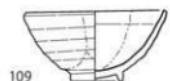
1256SD



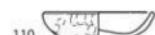
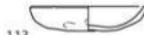
112



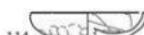
116



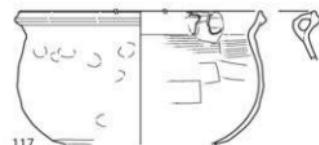
113



114

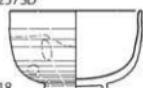


115



117

1257SD



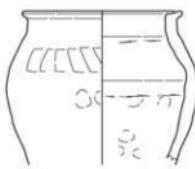
120



122



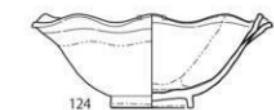
119



121



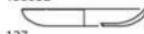
124



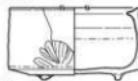
1344SD



1385SD



1412SD



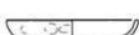
1463SD



1525SD



128

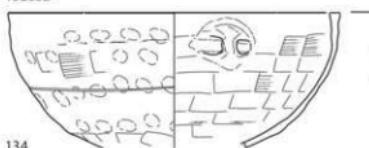


131

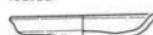


133

1528SD



1529SD



135

第42図 B区 溝出土遺物 (S=1/4)

羽根遺跡

17世紀に属する。122から124は1341SDから出土した遺物である。122は土師器皿A類、123は常滑窯赤物の三足火鉢で17世紀と考えられ、124は瀬戸・美濃窯産菓子鉢で登窯第10もしくは第11小期に属するものである。125・126は1344SDから出土した遺物である。125は美濃窯産仏龕具で登窯第8小期もしくは第9小期に属するもの、126は弥生時代末期と考える台付甕の脚部である。127は1385SD出土遺物で土師器皿B類である。128～130は1421SDの出土遺物である。128は美濃窯産筒形香炉で登窯第7小期に属するもの、129・130は土師器皿A類である。131・132は1463SD出土遺物である。131は土師器皿B類、132はロクロ整形された土師器の深皿で底部が被熱している。当遺跡の他の土師器皿とは明らかに異なっており、古代以前のものの混入資料の可能性もある。133は1525SD出土遺物で瀬戸・美濃窯産端反碗の蓋で登窯第11小期に属するものである。134は1528SD出土遺物で土師器内耳鍋A類第3形式である。135は1529SD出土遺物で土師器皿C類である。

746SD出土遺物（第43図136～166）瀬戸・美濃窯産陶器、肥前系陶磁器、京・信楽系陶器、中国産磁器、土師器などがある。瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗（136・137）、丸碗（138・142）、端反碗（139・140）、尾呂茶碗（141）、小碗（143）、小杯（144）、梅文碗（147）、せんじ碗（149）、仏龕具（152）、灯明皿（154）がある。時期的には登窯第2小期以降のものであり、149が登窯第8小期となり最新資料である。肥前系陶磁器には刷目碗（145）、陶器碗（146・148）、磁器碗（150）がある。148は京焼風のもので底部に刻印が入る。京・信楽系陶器には碗（151）がある。中国産磁器には青花皿（153）がある。土師器は皿（155～166）でA類（156～161・164・165）、B類（155・162・163・166）である。163につい

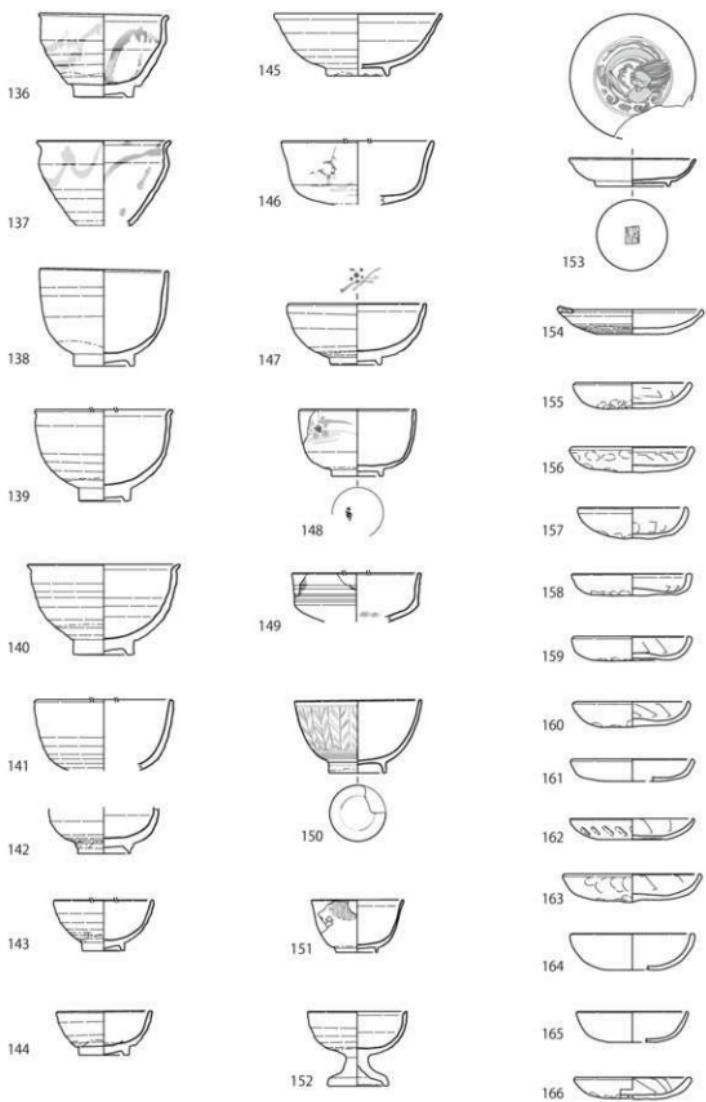
ては内部にススが付着しており灯明皿としての使用が考えられる。また、166については底部に穿孔が施してある。

769SD出土遺物（第44図168～180）瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、土師器、瓦器がある。瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗（168）、尾呂茶碗（169）、向付（170・171）、筒形香炉（172）、擂鉢（176・177）がある。177は古瀬戸後IV新期、172は大窯I段階170・171・177が登窯第1もしくは第2小期、168が登窯第3小期、169が登窯第5もしくは第6小期で最新資料である。170・171の底部には花押の様な墨書が施されている。176は一度割れたものを接ぎ直してあり、177は口縁部が割れたものを整形し、火鉢に転用したものと思われる。土師器には皿（173～175）、内耳鍋B類（180）がある。皿について173はA類、174はB類、175はD類である。内耳鍋B類は第3形式である。常滑窯産陶器には赤物の三足火鉢（178）があり17世紀前半と考えられる。瓦器には三足火鉢（179）がある。

C区溝出土遺物（第44図167・181・182）C区の746SD、769SD以外の溝の出土遺物を一括して紹介したい。167は747SD出土遺物で巴紋の軒丸瓦でコピキBである。181は787SDの出土遺物で京・信楽系小杉茶碗で底部に墨書がある。182は846SD出土遺物で土師器皿B類である。

1352SK出土遺物（第45図183～195）瀬戸・美濃窯産陶器、土師器がある。瀬戸・美濃窯産陶器には平碗（183）、御室茶碗（184）、擂鉢（194・195）がある。183は登窯第5もしくは第6小期、その他は登窯第6小期である。土師器は皿（185～187）、内耳鍋A類（188～193）である。皿はすべてA類、内耳鍋A類はすべて第4形式である。17世紀末から18世紀の一括資料と考えられる。

土坑出土遺物（第46図・第47図196～228）上記以外の土坑出土遺物について一括して紹



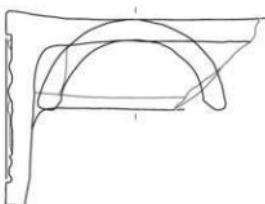
第43図 764SD出土遺物 (S=1/4)

羽根遺跡

747SD



167



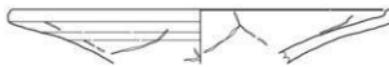
769SD



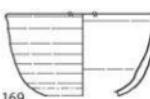
168



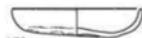
172



176



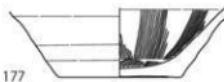
169



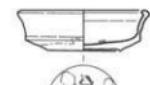
173



174



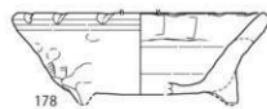
177



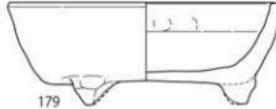
170



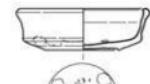
175



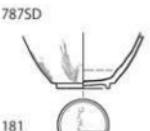
178



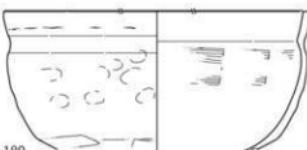
179



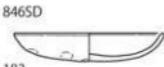
787SD



181

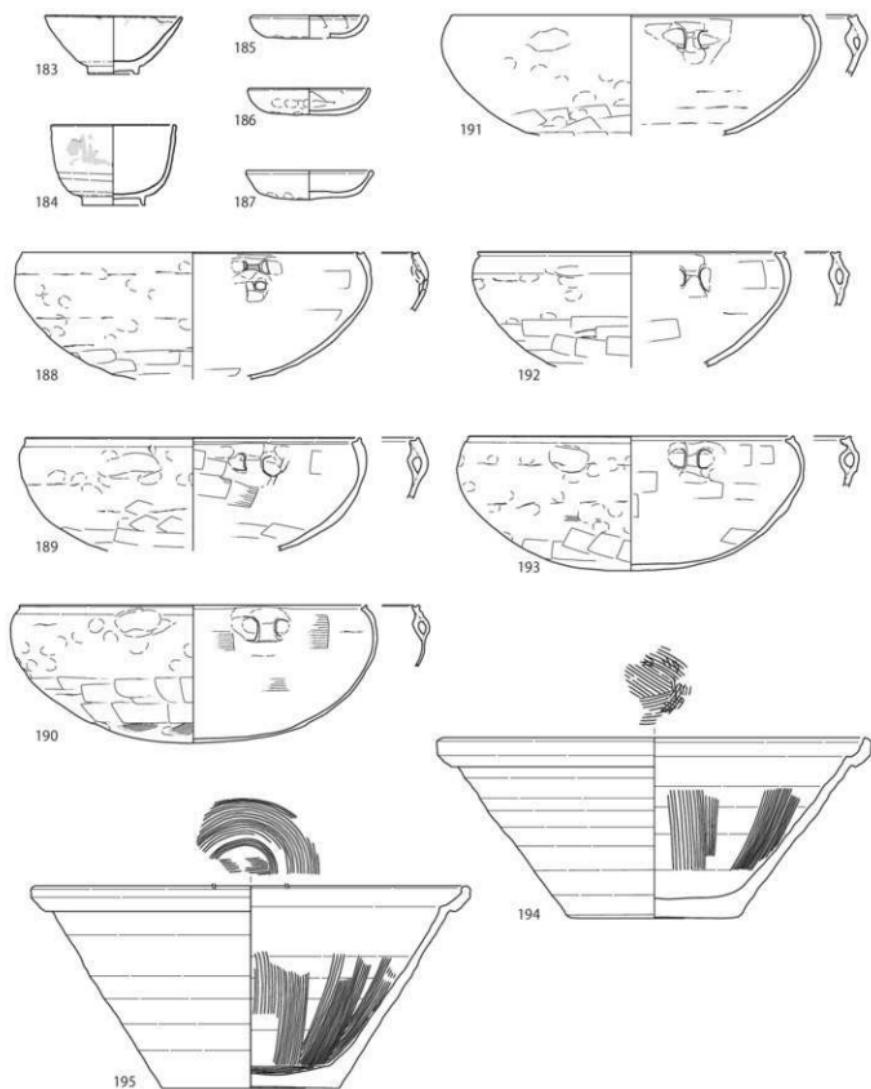


180



182

第44図 C区溝出土遺物 (S=1/4)



第45図 1352SK 出土遺物 (S=1/4)

羽根遺跡

介をしたい。196・197は205SK出土遺物で、196は土師器内耳鍋C類第3形式、197は瀬戸・美濃窯産捕鉢大窓1段階である。198は258SK出土遺物で、土師器内耳鍋B類第2形式である。199は387SK出土遺物で、土師器鍋C類第1形式である。200は389SK出土遺物で、土師器皿B類、201は513SK出土遺物で土師器皿B類である。202・203は643SK出土遺物で202は土師器皿C類、203は土師器皿B類である。204は837SK出土遺物で、瀬戸・美濃窯産仏龕具で登窯第5小期である。205は849SK出土遺物で瀬戸・美濃窯産縁軸卸皿で古瀬戸後III期である。206・207は884SK出土遺物で、206は瀬戸・美濃窯産縁軸皿で古瀬戸後III期、207は土師器伊勢型鍋口縁部で14世紀と考えられる。208は931SK出土遺物で土師器羽釜、209は1137SK出土遺物で土師器皿A類である。210は1317SK出土遺物で瀬戸窯産平碗、古瀬戸後IV新期である。211～214は1347SK出土遺物で211～213は瀬戸・美濃窯産陶器である。211・212は片口鉢で211は登窯第8もしくは第9小期、212は第7小期に属する。213は火入で、登窯第8もしくは第9小期に属する。214は土師器茶釜である。215は1373SK出土遺物で土師器皿A類である。216は1398SK出土遺物で瀬戸窯産捕鉢、登窯第8小期に属する。217は1373SK出土遺物で常滑窯産の真焼の甕で、5形式に属する。218～220は1526SK出土遺物で218・219は土師器皿でいずれもA類、220は土師器有孔円盤で中央の穴は円形ではなく方形に近く、錢貨を模している可能性も考えられる。221・222は1527SK出土遺物で221は瀬戸窯産御室茶碗で登窯第7小期、222は土師器皿B類である。223・224は1534SK出土遺物で223は肥前系の磁器碗、224は瀬戸窯産捕鉢で登窯第6小期である。225は1558SK出土遺物で土師器皿、体部から口縁部に向か外反しているが口縁は直立しているため

ほかの甕とは形状が異なっている。227～228は常滑窯赤物の甕で、227は828SK出土遺物、228は829SK出土遺物、228は1527SK出土遺物で227・228は18世紀、229は17世紀前半と考えられる。

206SX出土遺物（第48図229～233・243）

瀬戸・美濃窯産陶器、土師器がある。瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗（229・230）、黄瀬戸鉢（233）、輪禿皿（243）があり、登窯第1小期から第5小期に属するものである。土師器は皿（231・232）があり、231はA類、232はB類となる。17世紀と評価できる。

239SX出土遺物（第48図234～242・245・246）

山茶碗、土師器がある。山茶碗には尾張型山茶碗（234・237・239）、涅美型山茶碗（235・236・238）、涅美型山茶碗小皿（239）がある。234・237・238・240は藤澤編年の第6形式、235・236は第7形式、239は第10形式である。なお237は内面に厚く炭化物が付着していた。土師器には皿（241・242）、羽釜（244）、伊勢型鍋（245）がある。土師器皿は241がD類、242がC類である。山茶碗の最新資料を評価すれば14世紀末から15世紀初頭と考えられる。

413SX出土遺物（第48図246）瀬戸窯産捕鉢である。登窯第5小期に属するものである。

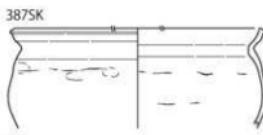
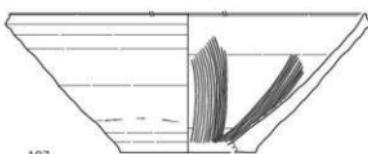
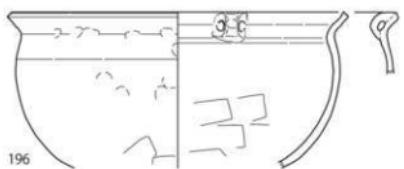
1591NR出土遺物（第48図247・248）山茶碗（247）、土師器皿（248）がある。247は涅美型で藤澤編年の第6形式、248はB類である。

1348SE出土遺物（第48図）瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器がある。瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗（249）、捕鉢（250）があり、古瀬戸後IV新期から大窓1段階に属する。常滑窯産陶器には真焼の甕（251）があり、11形式に属する。15世紀後半から16世紀初頭と考えられる。

その他の遺構出土遺物（第49図252～277）

柱穴などの遺構から少量出土した遺物を一括して紹介したい。瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産

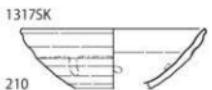
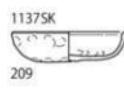
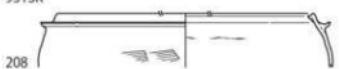
205SK

389SK
200513SK
201837SK
204849SK
205643SK
202

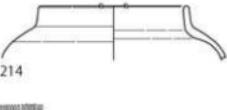
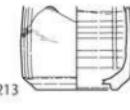
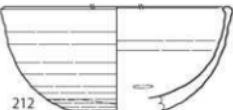
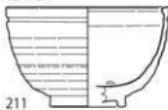
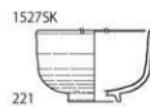
203

884SK
2061317SK
207

931SK



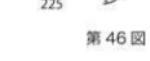
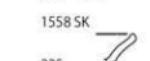
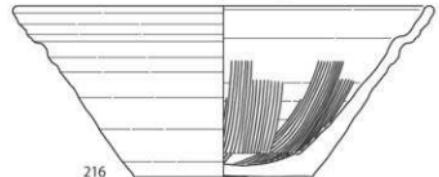
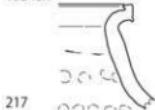
1347SK

1373SK
215

1398SK



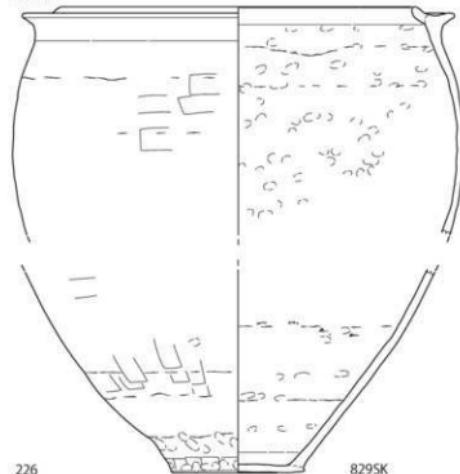
1524SK



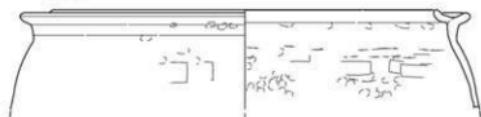
第46図 土坑出土遺物(1) (S=1/4)

羽根遺跡

8285K



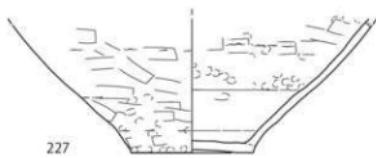
8295K



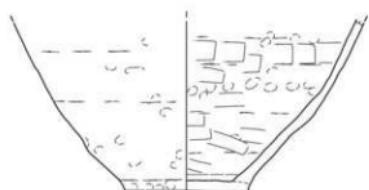
15275K



227

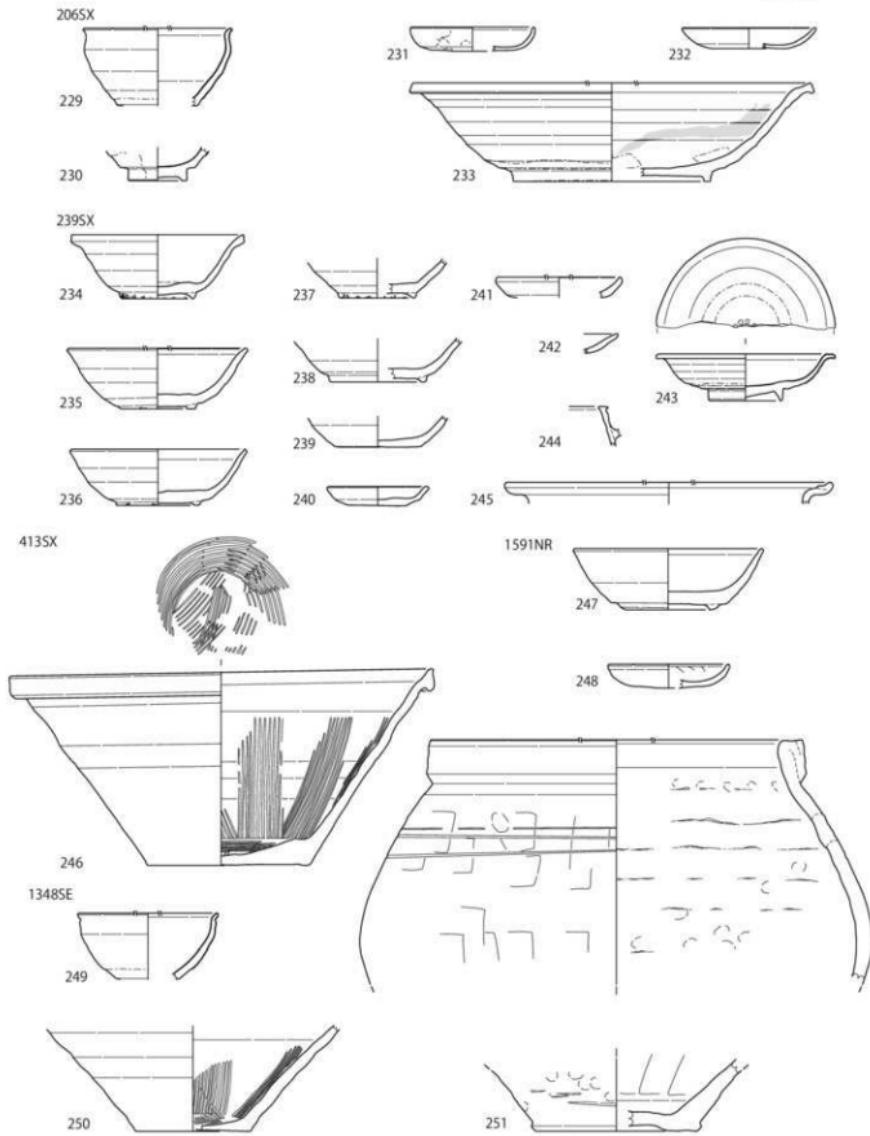


228



第47図 土坑出土遺物(2) (S=1/8)

遺物



第 48 図 SX 等出土遺物 (S=1/4)

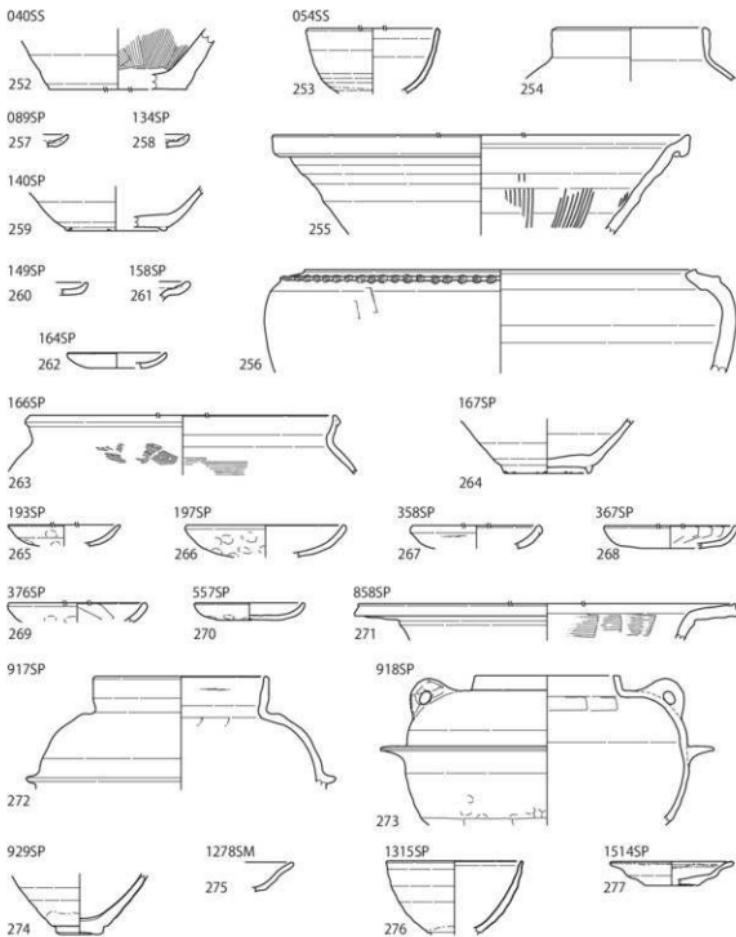
羽根遺跡

陶器、土師器、山茶碗などがある。瀬戸・美濃窯産陶器として捕鉢（252・255）、天目茶碗（274・276）、絞釉小皿（277）がある。252は大窯1段階もしくは2段階、255は登窯第5小期、274は古瀬戸後Ⅲ期、276は大窯1段階、277は古瀬戸後Ⅳ古期である。常滑窯産陶器は17世紀の赤物の突帯付の深鉢（256）がある。土師器には皿（260・262・265～270・275）、茶釜（254・272・273）、伊勢型鍋（257・258・261）、内耳鍋C類（263）、火鉢（271）がある。土師器皿はB類（262・265～269・270）、C類（275）、その他（260）で、260は口径が小さく底部からわずかに口縁が立ち上がるるものである。また265は内面にススが付着しており灯明皿としての使用が考えられる。263は内耳鍋C類第1形式である。山茶碗には渥美型山茶碗（259・264）があり、いずれも藤澤編年で第6形式である。他に产地不明の陶器丸碗（253）がある。

包含層掘削・検出時の遺物（第50図278～308） 包含層の掘削や検出時に遺構出土の遺物として確認できなかった遺物を調査区ごとに一括して紹介したい。A区出土の遺物として瀬戸・美濃窯産陶器、土師器、渥美窯産壺などがある。瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗（278～280）、捕鉢（284）がある。279は登窯第4小期、278・280は登窯第5小期、284は古瀬戸後Ⅳ新期に属する。土師器には皿（281～

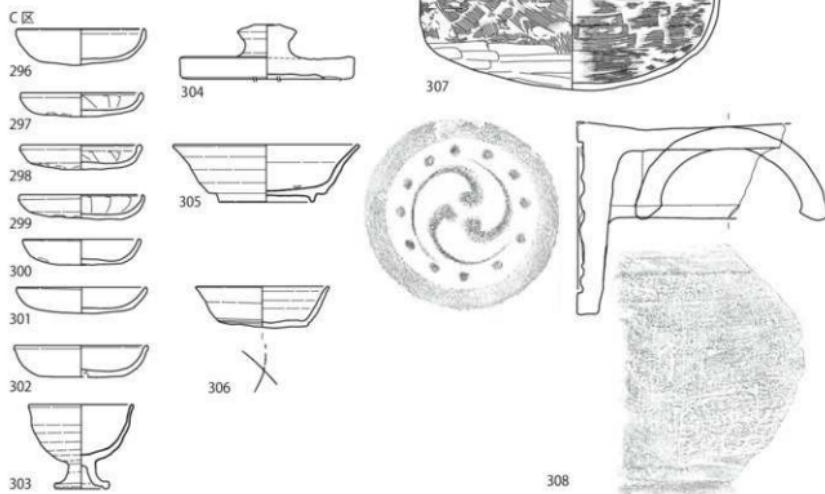
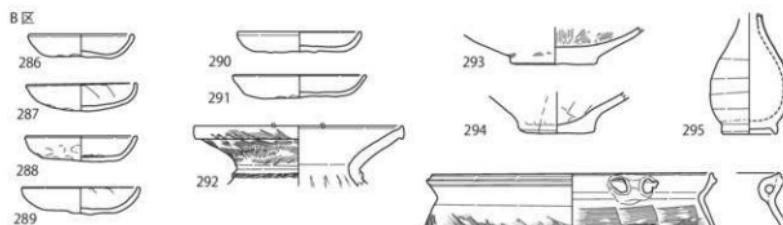
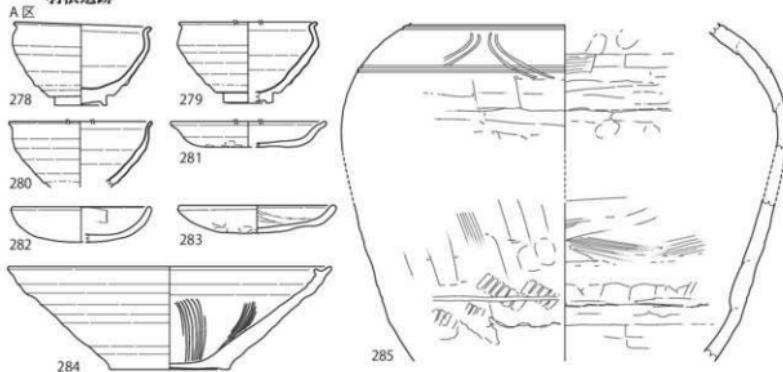
283）があり、281はC類、282がA類、283がB類である。285は渥美窯産の壺である。B区出土遺物としては土師器、弥生土器、瀬戸・美濃窯産陶器などがある。土師器には皿（286～291）があり、286～289はA類、290・291はD類である。弥生土器は壺（292～294）で、主に調査区西よりの山側から出土しているもので、弥生時代末期と考えられるものである。瀬戸・美濃窯産陶器には小瓶（295）があり、登窯第8小期に属するものと考える。C区出土の遺物としては、瀬戸・美濃窯産陶器、土師器、須恵器、瓦などがある。瀬戸・美濃窯産陶器には仏龕具（303）、端反皿（305）があり、303は登窯第6小期、305は登窯第1小期に属する。土師器には、皿（296～302）、土師器蓋（304）、内耳鍋C類（307）がある。土師器皿の多くは501SWの前面の埋土を掘削中に出土したものであり、296～300・302はA類、301はB類である。304は内面にススが付着しており、火消し壺の蓋と考えられる。307は2面への包含層掘削中に出土したもので内耳鍋C類第1形式である。須恵器は环身（306）があり、底部にへら書きがあるので湖西窯産の8世紀頃のものと考えられる。いぶし瓦には巴紋の軒丸瓦（308）がありコピキBである。747SDから出土した軒丸瓦と同形式のものと考えられる。

遺物



第49図 柱穴等出土遺物 (S=1/4)

羽根遺跡



第 50 図 包含層掘削・検出時出土遺物 (S=1/4)

第3節 金属製品・金属関連遺物

本遺跡から出土した金属関連遺物としては、銭貨、鉄製品、銅製品、鍛冶関連製品がある。ここではそれについて紹介をしたい。

(1) 銭貨 (第51図 309～335)

銭貨は本調査で32点出土しており、そのほとんどがC区からのもので、中でも001SB(旧宗桂寺)から出土したもののが中心である。301～320・327・329は寛永通宝である。301～315・327は古寛永、316～319・329は新寛永、320は不明である。

寛永通宝以外の銭貨として、321は皇宋通宝、322は紹聖元宝、324は正隆元宝、325は洪武通宝、328・335は永楽通宝である。330～334はC区2面への包含層掘削時に一括出土したもので遺構は確認できなかったものの土坑墓の六道鉄として埋納された可能性が考えられるものである。330・331は祥符通宝、332は鉄製の元祐通宝、333と334はそれぞれ鉄銭2枚と銅銭1枚が重なったもので鑄のため銭名は明確でないが、334にはX線による撮影で永楽通宝が含まれていることが確認できた。これら寛永通宝以外の銭貨の中には非常に薄く雑なつくりのものも混じることから模造銭が含まれているものと考えられる。

やや特殊なものとして323がある。これはキセルの雁首をつぶして銭貨を模した雁首銭と考えられる。

やや特殊なものとして323がある。これはキセルの雁首をつぶして銭貨を模した雁首銭と考えられる。

(2) 金属製品 (第52図 336～354)

金属製品は本調査で32点出土しており、その多くはA区とC区で出土している。鉄製品と銅製品に分類される。

鉄製品としては、釘(336～338、342・344・349・354)、刀子(339)、刃物の中茎(345)、鎌の刃先(346)がある。

銅製品としては簪類(340・343・348)、薄板(341)、キセルの雁首(350～353)がある。

(3) 鍛冶関連遺物 (第53図 355～359)

鍛冶関連遺物は本調査で13点出土しており、そのうち10点はC区からのものである。

355は846SD出土の鉄滓である。356は502SU出土の炉壁で、銅片をかみ込んでいる。357はB区東端壁沿いで出土した炉壁で流动滓が付着している。358は503SM出土の鞴羽口、359はC区2面への包含層掘削時に出土した鞴羽口で、流动滓が付着している。

第4節 木製品・布製品

木製品・布製品ともに腐食・消失しやすいために限られた遺構から出土したもののみである。

(1) 木製品 (第54図 360・361)

木製品は本遺跡での出土はわずかで、井戸の底や001SBで出土している。ここでは製品として明確な2点のみ図化をした。

360は001SBから出土した将棋の駒で「角

行」、高さ3.6cm、幅2.5cmのものである。361は小型の曲げ物の底板で円形のもの、推定径で9.0cm程である。

(2) 布製品 (写真図版 24-449)

1348SEの底部で出土したもので平織りの布と考えられる。

(成瀬友弘)

羽根遺跡

001SB



309



310



311



312



313



314



315



316



317



318



319



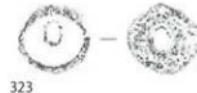
320



321



322



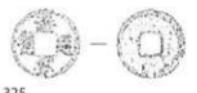
323

5275P



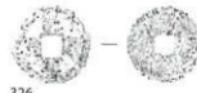
324

5365K



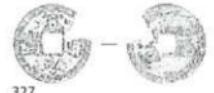
325

5605K



326

7695D



327

B区

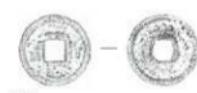


328

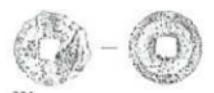
C区



329



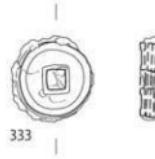
330



331



332



333



334



335

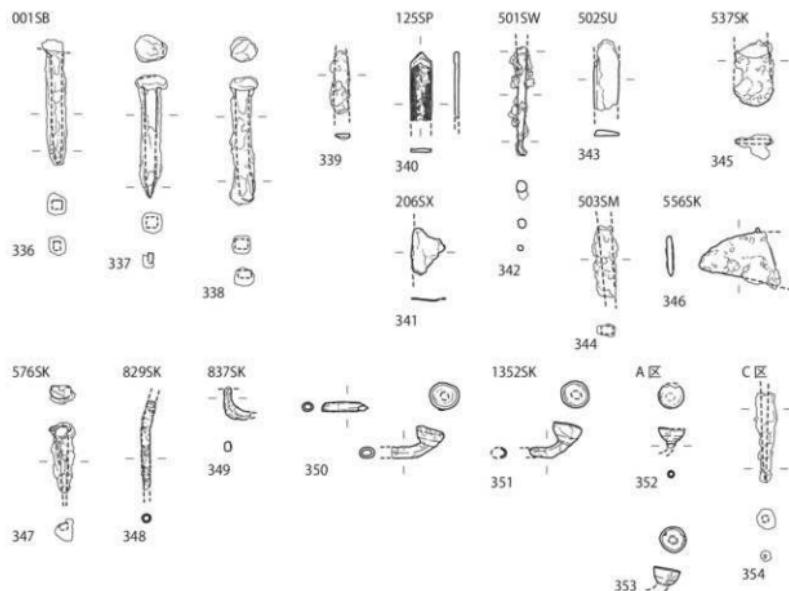
D区



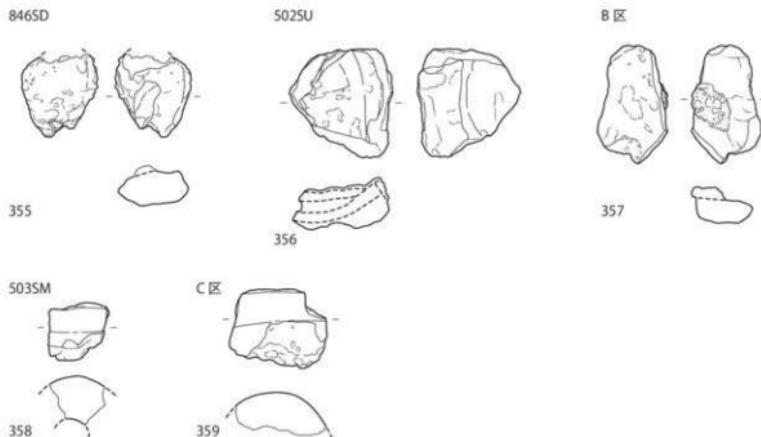
336

第 51 図 出土銭貨 (S < 2/3)

遺物



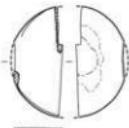
第52図 金属製品 ($S=1/3$)



第53図 銀冶関連遺物 ($S=1/4$)



360



361

第54図 木製品 (S=1/4)

第5節 石製品

ここで取り上げる資料は、中世およびそれ以降の石製品である。以下、器種別に報告する。

(1) 石塔類

羽根遺跡を最も特徴づける資料群の一つであり、石製品の主体をなす。62点出土し、すべてを図化した（第55図362～第62図423）。大多数はC区から出土しており、整地した平場崖面に上から投棄された一群（502SU）と、その崖面の石積み裏込（501SW裏込）からの出土がほとんどである。502SU出土資料は363・364・370・371・374～378・380・381・389～392・394・395・397・399～405・407・410・411～417・419～423で、501SW裏込出土資料は368・373・384・385・398・406・408・409である。今回の資料では、接合例が4例確認できた（第63図）。このうち363・368の接合事例と385・395の接合事例は、ともに501SW裏込と502SUとの接合関係を示すもので、この石塔類の破壊と転用・廃棄行為が時間的断絶のない状況で行なわれたことを示す事例として、大いに注目できよう。以下、石材・種別・部位および残存部位に基づき報告を行う。なお、今回の資料では、梵字を含め文字資料は確認できなかった。

a. 花こう岩製（362～383・404～423）相輪（362～368）、宝筐印塔（笠：369・370、基礎：371～373）、五輪塔（空風輪：374、火輪：375～377、水輪：378、地輪：379～

383）、一石五輪塔（404～423）がある。相輪は、今回の資料では宝筐印塔に対応するものであった可能性が高い。伏鉢の裏には工具痕が多く残されている。宝筐印塔・五輪塔でも側面・裏面に幅10cm程度の工具痕が残されており、373では裏面の凹みを作るために放射状の工具痕が観察できる。五輪塔は法量に二種類存在するようで、374・375・378のやや大型のものと、376・377・379～383のように小型のものがある。一石五輪塔は火輪・水輪・地輪のいずれかが残存している資料13点で幅を計測した結果、10.8～14.0cmの範囲で平均12.58cmを測り、後述する凝灰岩製より若干大きい。器面には幅5～10cm程度のノミ状と考えられる工具痕が多く認められる。火輪と風輪との境付近で欠損している資料が目立つ。水輪の中央部に製作後の敲打痕が認められる資料（417・421・422）がある。

b. 凝灰岩製（384～403）五輪塔（地輪：384）、一石五輪塔（385～403）がある。五輪塔は花こう岩製で報告したところの小型の部類のものと考えられる。器面全体に工具痕が確認できる。一石五輪塔では、完形資料が4点存在している。あわせて火輪・水輪・地輪のいずれかが残存している資料計15点で幅を計測した結果、9.4～11.8cmの範囲で平均10.18cmであった。花こう岩製同様に火輪と風輪との境付近で欠損している資料が目立ち、一打点から打撃が加えられ破損している事例

(390・396～398など)が多く確認できることから、意図的な破壊が行なわれた可能性が考えられる。水輪の中央部に製作後の敲打痕が認められる資料(392・399)も同様な行為の結果かもしれない。これらも器面全体に工具痕が認められ、工具の作用による表面の剥がれなどもよく観察できる。

(2) 砥石

砥石としては、小型のもの(7点出土で6点図化。第64図424～430)と、大型のもの(3点出土。同432～434)があり、前者が手持砥石、後者が置砥石に該当するものと考えられる。小型のものは、断面形状が方形を呈するもの(424～427)と扁平なもの(428～430)にさらに分けられる。使用痕としては、全面磨痕が認められるものの、424のように部分的に鋭い細溝状を呈する部分や428のように側面に不連続に刻目状に磨痕が認められるものもある。使用石材は、426・428・430が泥岩で、その他は凝灰岩・凝灰質泥岩・泥質凝灰岩である。大型

のものは、礫の平面あるいは側面に連続した細溝状の使用痕が認められるものである。いずれも片麻岩製である。

(3) 石臼

2点出土し、すべて図化した(第64図435・436)。435はA区溝内から出土している。435は下臼、436は上臼と考えられる。435は両面に目立てが施されていたようであるが、片面側の磨滅が特に著しい。側面には加工に伴うノミなどの工具痕が認められる。435・436ともに平面に幅5～10cm程度の磨痕が認められることから、石臼としての使用後に砥石に転用されたものと考えられる。両者とも凝灰岩製である。

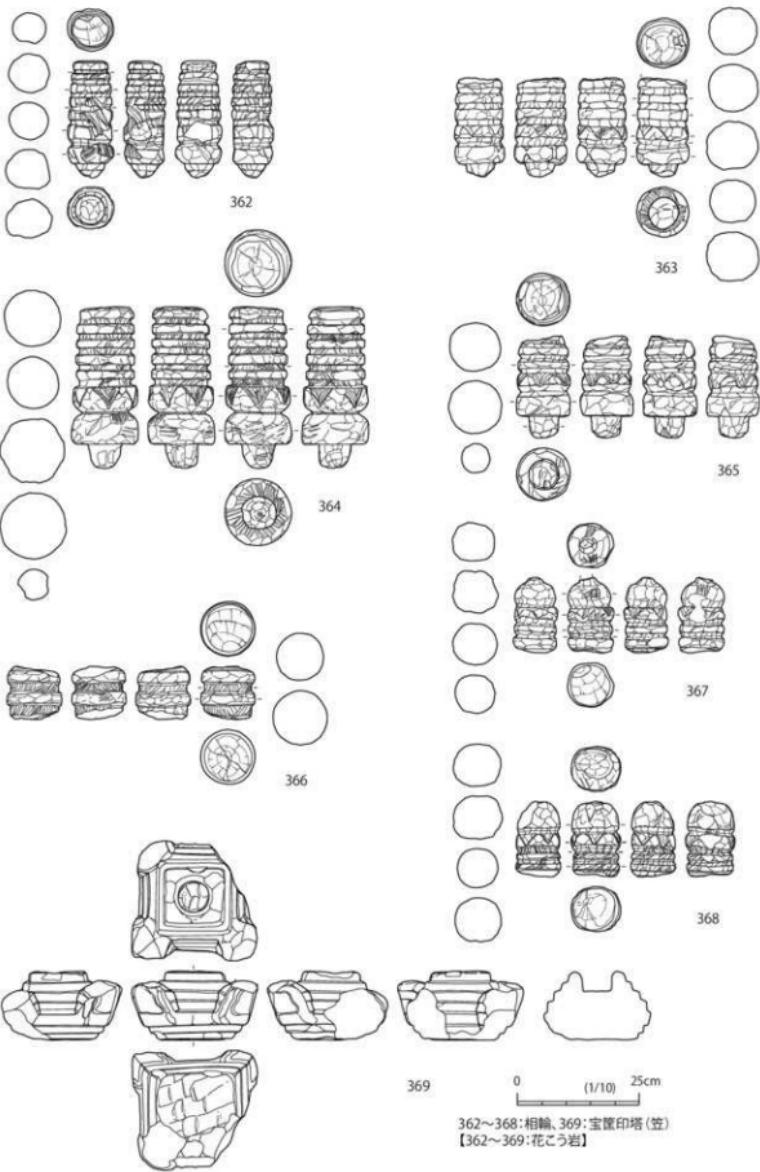
(4) 砧

1点のみで、C区001SBから出土した(第64図431)。一面には周囲からの打撃痕が認められ、別の用途に転用する意図があった可能性もあるか。泥岩製である。

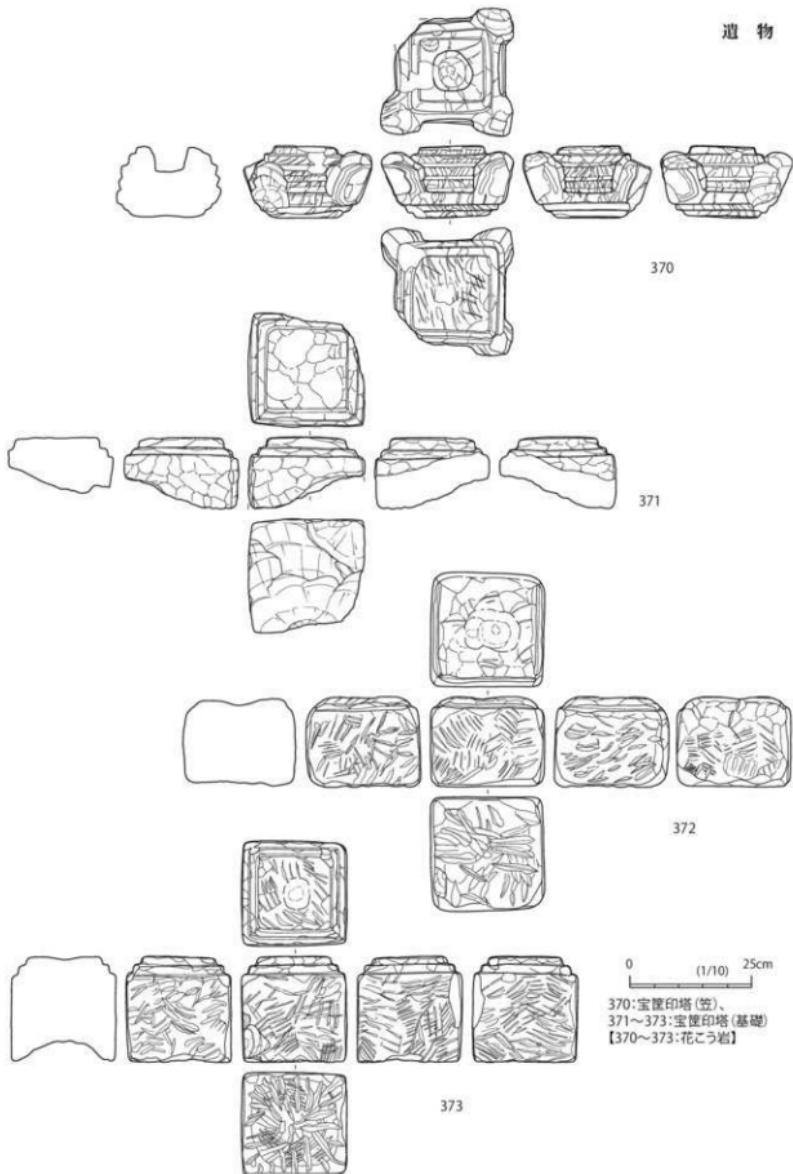
第6節 貝製品

貝製品は5点出土し、すべて図化した(第65図437～441)。いずれもC区001SB付近からの出土である。径1.5～2.5cm、厚さ0.3～0.6cm程度の、平面形状が梢円形あるいは隅丸形になっており、440など一部には最終

調整の研磨痕が認められる。重さは0.6g～3.0gを測る。素材になった貝種は詳細にはできないものの、成長線の様相あるいは断面の形状などから、ミルクイガイなどの貝種が考えられる。

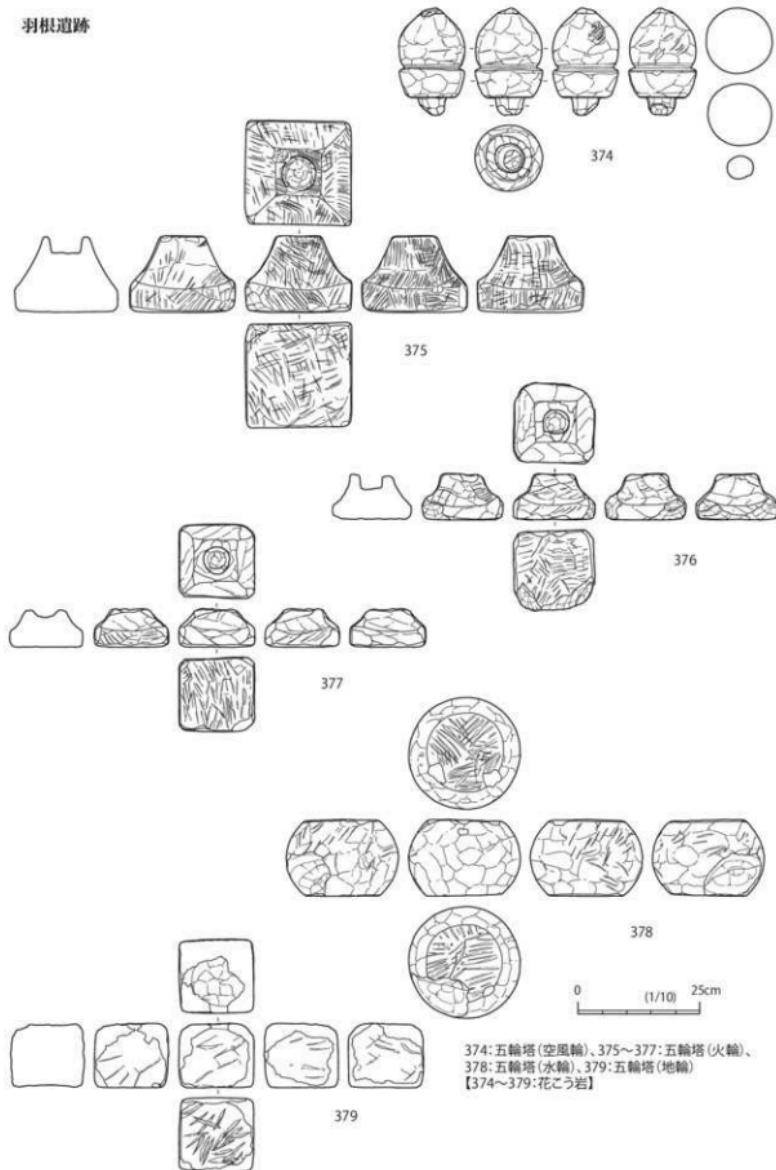


第 55 図 石塔類 (1)



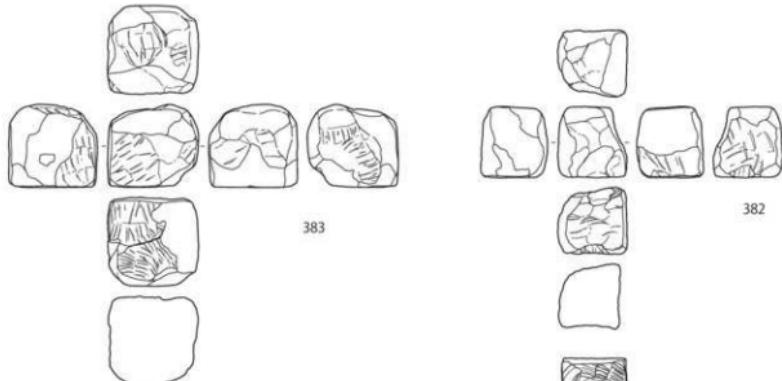
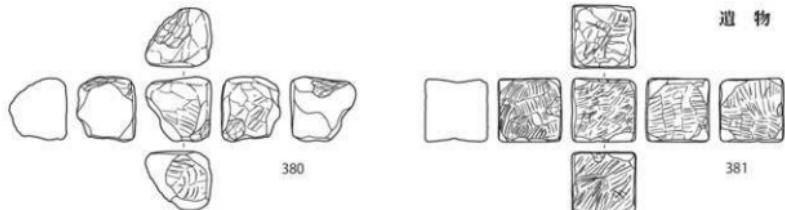
第56図 石塔類(2)

羽根遺跡



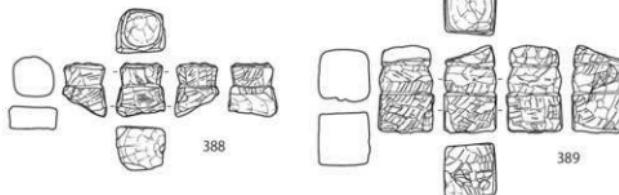
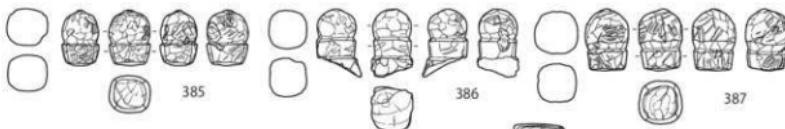
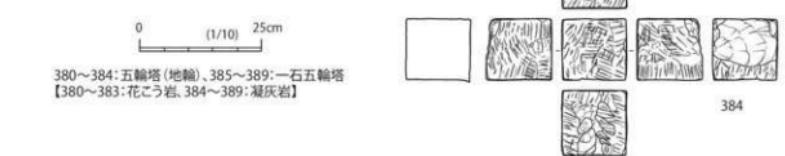
第 57 図 石塔類 (3)

遺物



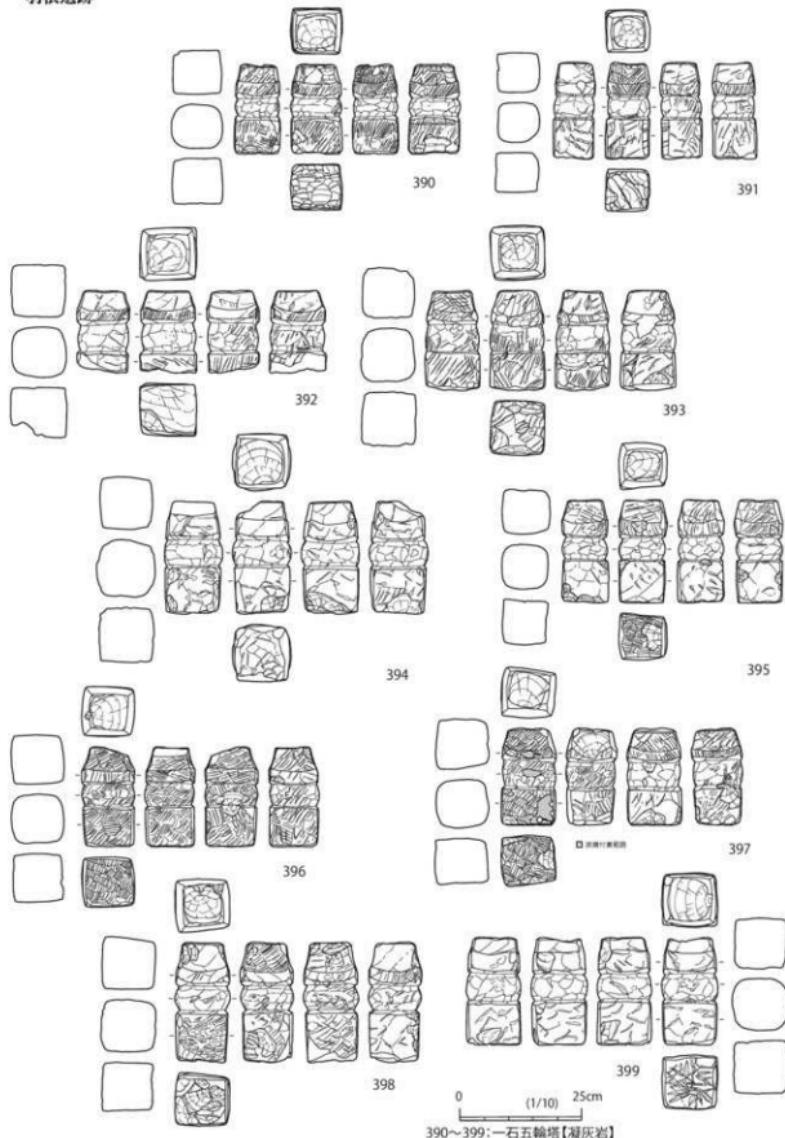
0 (1/10) 25cm

380～384：五輪塔（地輪）、385～389：一石五輪塔
【380～383：花こう岩、384～389：凝灰岩】



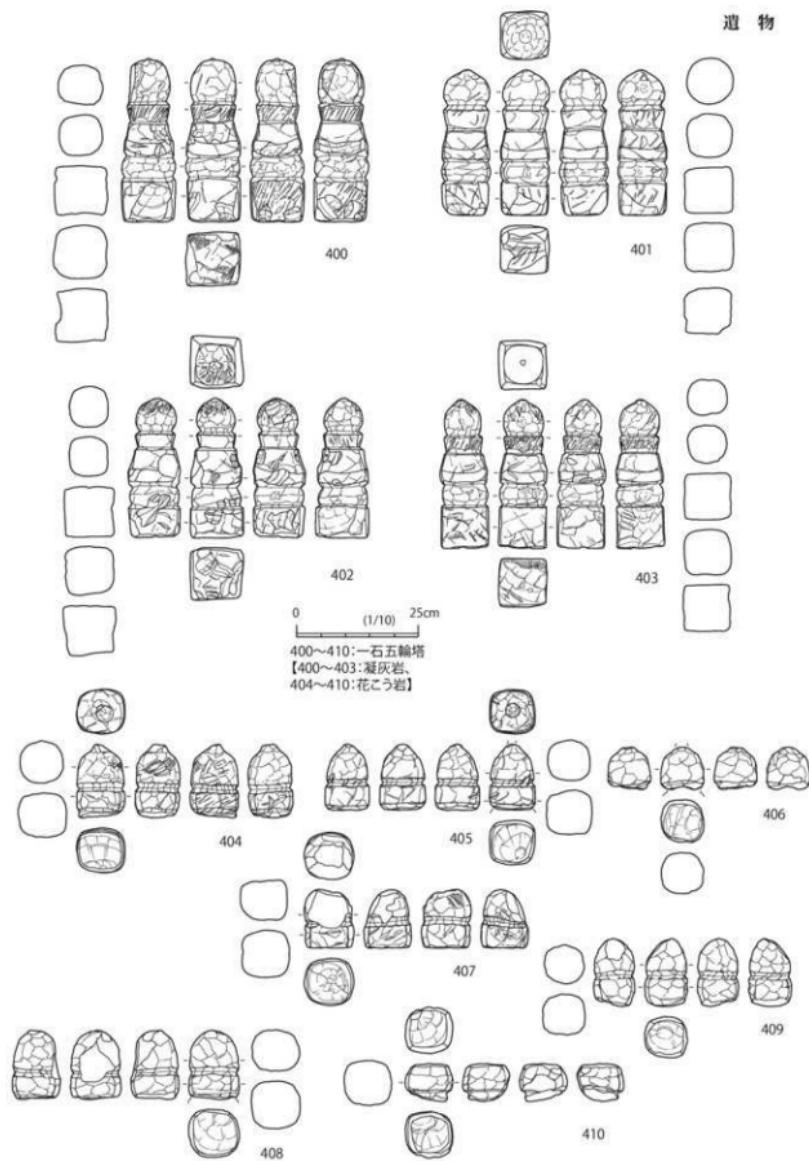
第 58 図 石塔類 (4)

羽根遺跡



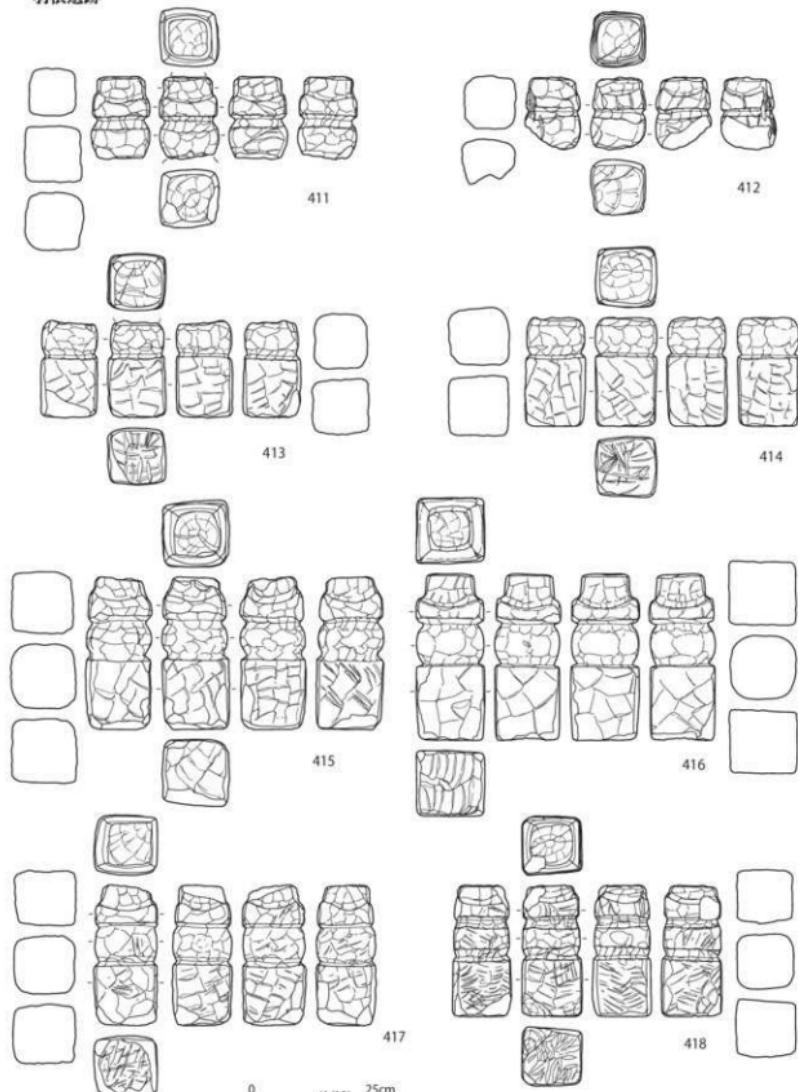
第 59 図 石塔類 (5)

遺物



第 60 図 石塔類 (6)

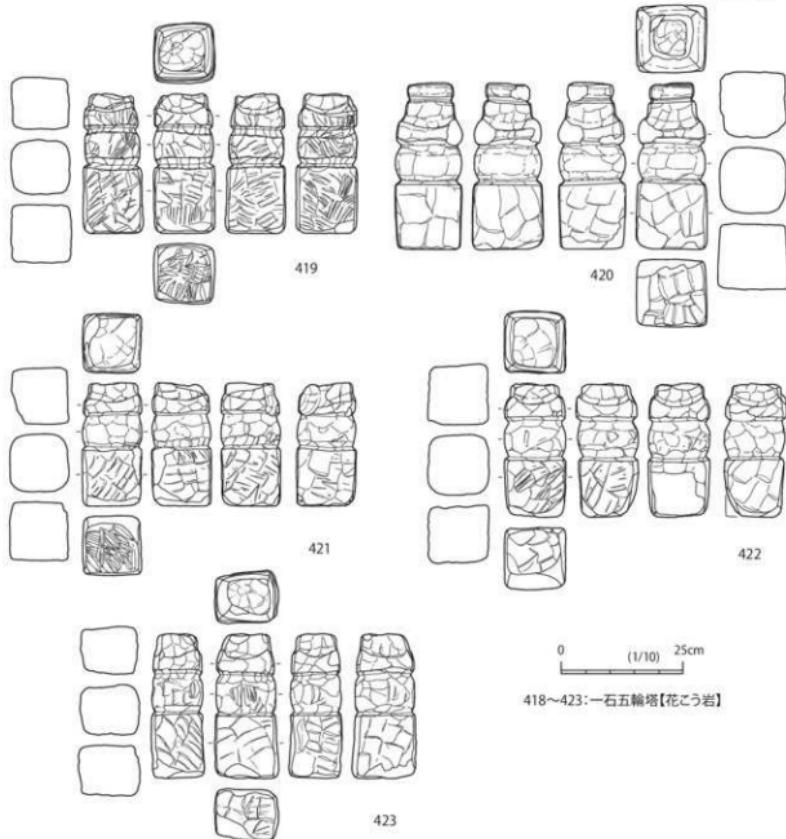
羽根遺跡



411~418:一石五輪塔【花こう岩】

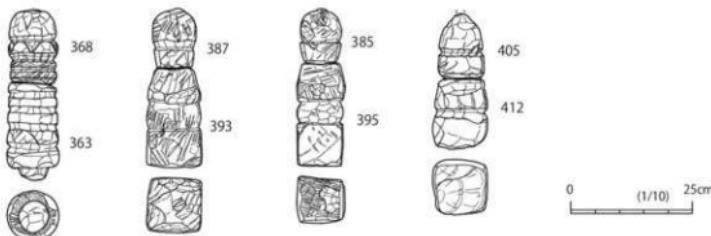
第 61 図 石塔類 (7)

遺物



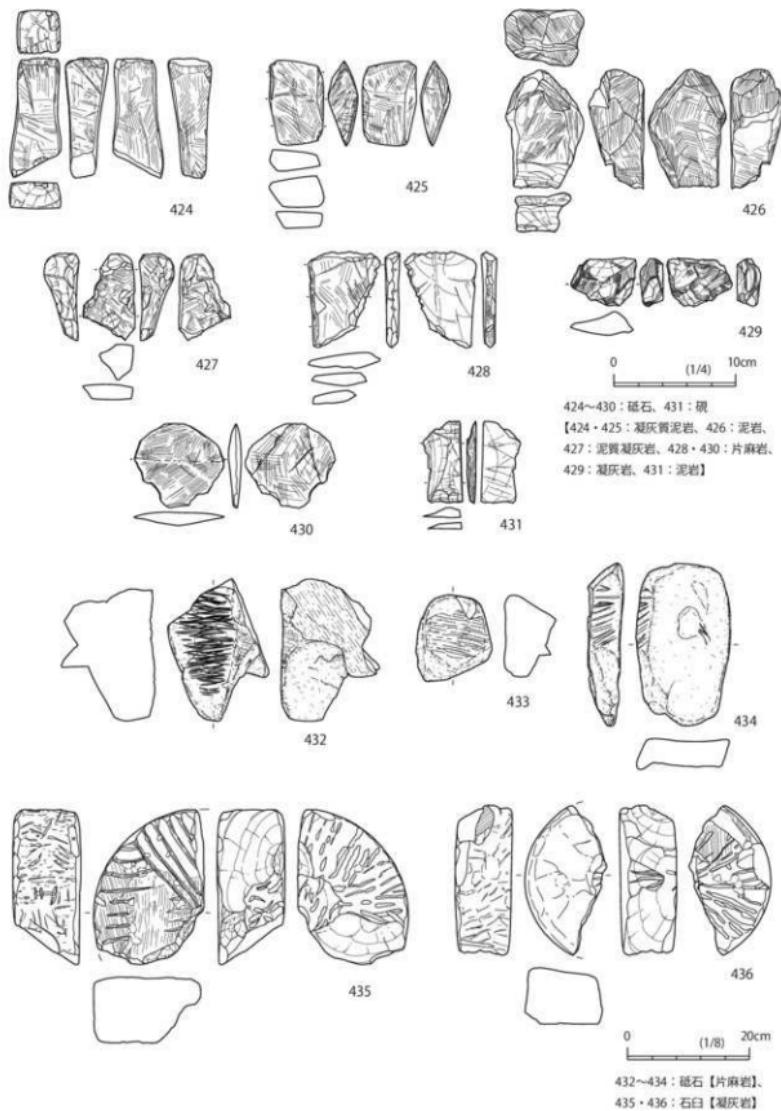
418~423:一石五輪塔【花こう岩】

第 62 図 石塔類 (8)

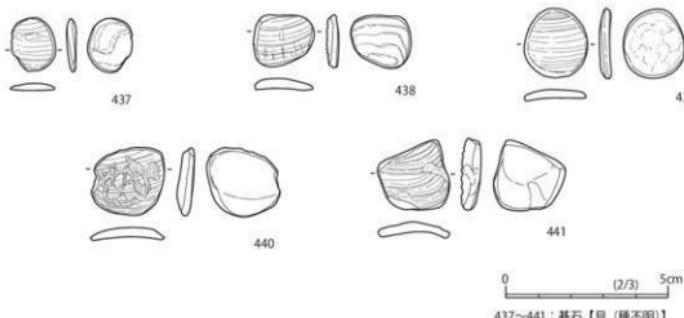


第 63 図 石塔類接合事例

羽根遺跡



第 64 図 石塔類以外の石器・石製品



第65図 貝製品

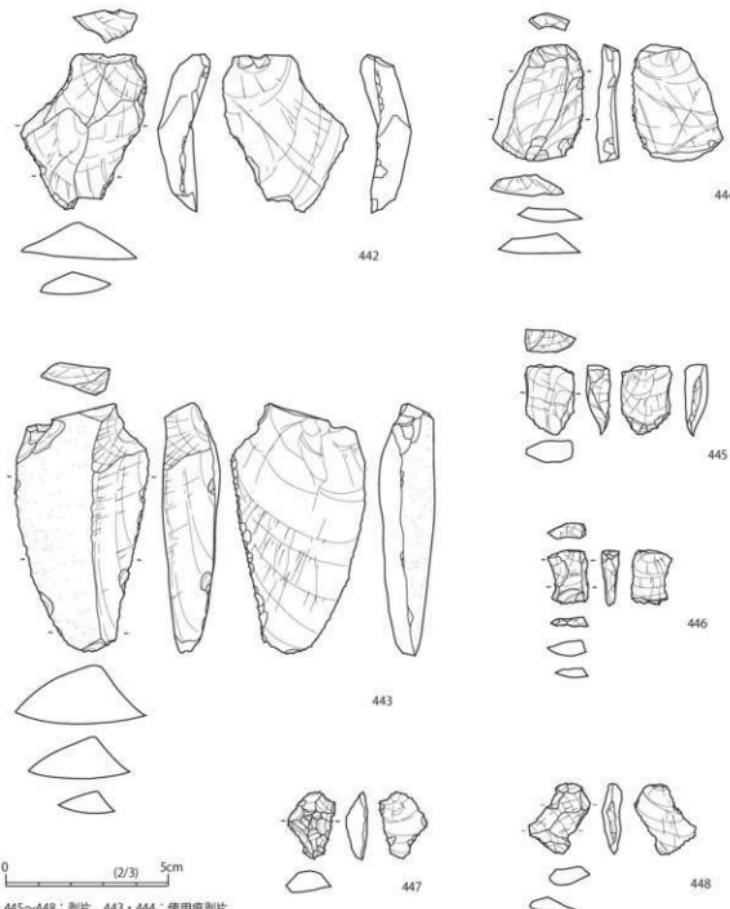
第7節 縄文時代以前の石器

該当資料は7点で、すべて図化した（第66図442～448）。A区からの出土が最も多いが、いずれも二次的な状態の出土と考えられる。すべて剥片石器で、細長い菱形あるいは縦長状の剥片である。442～446は剥片作出前に打面を調整したものと考えられる。442は一側面にノッチ状の抉りが認められるか。443・444は

一側面に不連続な微細剥離が認められ、使用痕剥片と考えられる。石材は、442・443が熔結凝灰岩、444～446がチャート、447・448が黒曜石で、熔結凝灰岩製の剥片がやや大型の傾向がある。

(川添和曉)

羽根遺跡



442・445～448：剥片、443・444：使用痕剥片。
【442・443：培殖凝灰岩、444～446：チャート。
447・448：黒曜石】

第 66 図 繩文時代に属すると考えられる石器

第4章 自然科学分析

第1節 羽根遺跡周辺の地形・地質

羽根遺跡のある愛知県豊川市は、知多半島と渥美半島とに挟まれた三河湾（渥美湾）の周りを囲む地域のひとつである。調査地点のある豊川市萩町羽根は市の北西にあり、豊川市役所から北西へおよそ 6.5 km 離たった場所にある。調査地点の約 1.0 km 南には東名高速道路が通る。

調査地点の場所は今でこそ豊川市の北西地域であるが、かつては音羽町として豊川市とは山地により隔てられていた。そのため調査地点を含めた一帯は額堂山（標高 420 m）、観音山（標高 400 m）、宮路山（標高 360 m）といった山地と分水嶺により囲まれている。その中を音羽川と山陰川という 2 つの河川が流れる。このうち調査地点の西約 120 m には山陰川が南流する。山陰川には調査地点の約 150 m 北西で室川が、約 1.0 km 南西で長根川が合流している。山地に周りを取り囲まれ、幅が狭くて長い平坦面を一般に谷床（または谷底）、そこに形成された低地を谷床平野（または谷底平野）と呼ぶ（高山, 1970；今村ほか, 1986）。音羽川と山陰川の流域は谷床平野の典型であるが、音羽川低地（岡田, 1976）と呼ぶ場合もある。

愛知県には三河湾にそぞぐ豊川付近を通り、長野県の諏訪湖にかけて北東から南西方向にのびる中央構造線がある。中央構造線で分けられる太平洋側を外帶、陸側を内帯と呼ぶ。調査地点周辺には内帯が広がり、1 億年前ごろの中生代と 180 万年前以降の新生代第四紀の地層が分布している。豊川の下流域にひろがる豊橋平野は、町田・大倉（1960）による段丘の区分とその堆積物についての研究を先駆として、その後、木村ほか（1981, 1982）により詳しく研究された。一方、羽根遺跡周辺の地形・地質

については荒巻（2005）、荒巻・原瀬（2005）、原瀬（2005）が音羽町史において詳しく述べており、本論も基本的にそれらに基づいて述べる。羽根遺跡の周辺には、中生代の基盤岩類とそれを覆う新生界第四系更新統の堆積物が明瞭に区分される場所にあたっており、調査地の東側半分には領家帯の変成岩類が露出する山地が広がる（図 1）。西は新生界第四系更新統以降の堆積物が分布する丘陵地や沖積地となっている。新生界第四系更新統は荒巻・原瀬（2005）によれば古期扇状地堆積層・新期扇状地堆積層・中位段丘堆積層に分類される。河川沿いには砂礫層からなる完新統が基盤岩類を覆う。

2500 分の 1 の豊川市都市計画図の標高値を基に山陰川流域の等高線を描くと、標高 70 m 前後を境にして、それよりも高いところには領家帯の砂質片麻岩が、低いところには更新統と完新統がみられる（図 1）。標高 70 m よりも高いところは山地と丘陵を形成し、低いところは近久・前田から羽根を通り、中大田面、赤坂と南へ向かうにつれて標高を減じる（図 2）。調査地点は領家帯の砂質片麻岩からなる山地から西側へ開析した谷の、標高約 70 m の西側斜面に位置している。遺跡調査で実施した深度 2 m の深掘では、赤褐色を呈する基質の粘土に砂質片麻岩からなる角礫を含む礫層により構成されていた。礫は、風化の進んだいわゆる「くさり礫」となっていた。これは荒巻（2005）の古期扇状地堆積物にあたる。

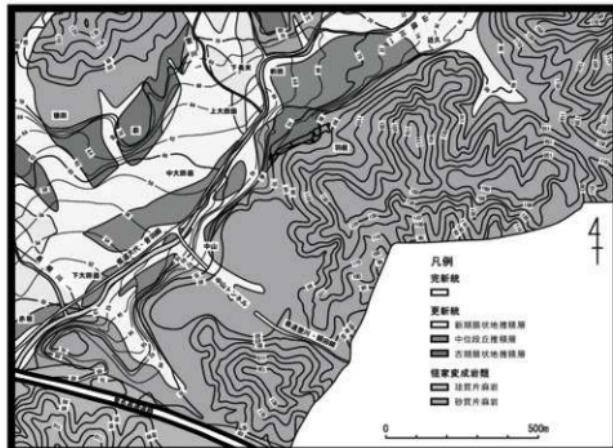
参考文献

- 荒巻敏夫, 2005, 地質, 音羽町史 自然-本文-, 音羽町, 10-21.
- 荒巻敏夫・原瀬能幸, 2005, 地形・地質概要, 音羽町史 自然-本文-, 音羽町, 3-4.
- 原瀬能幸, 2005, 岩石, 音羽町史 自然-本文-, 音羽町, 22-34.
- 今村達平・岩田健治・足立勝治・塚本 哲, 1986, 画

羽根遺跡

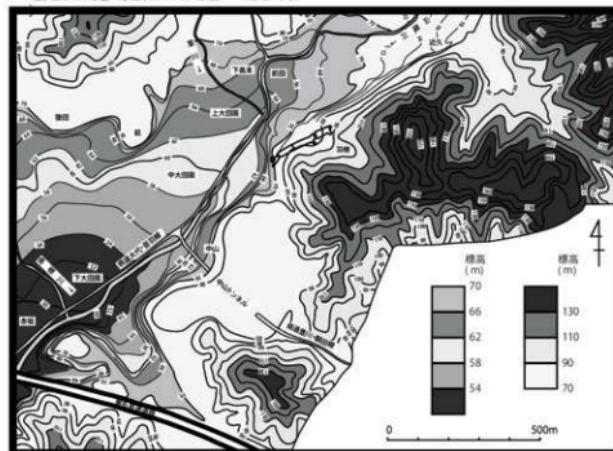
でみる地形・地質の基礎知識。鹿島出版界, 32p.
 木村一朗・荒巻敏夫・大澤正吾・池田芳雄, 1981, 豊川中流および下流の段丘と更新統(その1 段丘面),
 愛知教育大学研究報告(自然科学), 30, 221-232.
 木村一朗・荒巻敏夫・大澤正吾・池田芳雄, 1982, 豊川中流および下流の段丘と更新統(その2 段丘堆積層), 愛知教育大学研究報告(自然科学), 31, 195-210.

町田 貞・大倉陽子, 1960, 豊川中・下流の段丘地形, 地理評, 33, 551-563.
 岡田篤正, 1976, 地形分類, 国土庁土地局・愛知県企画部編 愛知県土地分類基本調査「御油」, 愛知県, 15-33.
 高山茂美, 1970, 谷床平野, 地学団体研究会編 増補改訂版 地学事典, 平凡社, 375.



第67図 羽根遺跡周辺の地質図

(図中に発掘調査区の位置も入れる。等高線は1/2500豊川市都市計画図の標高値をもとに鬼頭が、地質図は荒巻・原瀬(2005)を基に一部加筆。)



第68図 羽根遺跡周辺の等高線図

(等高線は1/2500豊川市都市計画図の標高値を基に作成。標高70mを境に等高線間隔が異なることに注意。)

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
 伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一
 Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani

1. はじめに

愛知県豊川市に位置する羽根遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、曆年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半

減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対して、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の曆年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ : INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は 95.4% 信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425–430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355–363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3–20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmeli, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talma, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029–1058.

羽根遺跡

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-13884	調査区: 30HINO8A グリッド: 4H108 遺構: 247SK	試料の種類: 炭化材 (広葉樹、枝) 試料の性状: 最外年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13885	調査区: 30HINO8A グリッド: 4H120 遺構: 256SP	試料の種類: 炭化材 (シイ属、みかん割り) 試料の性状: 最外年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13886	調査区: 30HINO8A グリッド: 4H119 遺構: 205SK 遺物 No.196	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: くの子形内耳縫 部位: 脚部側面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13887	調査区: 30HINO8C グリッド: 5G14F 遺構: 502SU 遺物 No.54	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 羽釜 部位: 脚部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13888	調査区: 30HINO8A グリッド: 4H120 遺構: 387SK 遺物 No.199	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: くの子形内耳縫 部位: 脚部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13889	調査区: 30HINO8B グリッド: 5H16F 遺構: 1256SD (トレンチ内) 遺物 No.117	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: くの子形内耳縫 部位: 脚部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13890	調査区: 30HINO8B グリッド: 5G9n 遺構: 1352SK 遺物 No.193	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 半球形内耳縫 部位: 口縫部外表面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13891	調査区: 30HINO8B グリッド: 5G9n 遺構: 1352SK 遺物 No.189	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 半球形内耳縫 部位: 口縫部外表面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13892	調査区: 30HINO8B グリッド: 5G9n 遺構: 1352SK 遺物 No.191	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 半球形内耳縫 部位: 口縫部外表面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13893	調査区: 30HINO8B グリッド: 5G9n 遺構: 1352SK 遺物 No.192	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 半球形内耳縫 部位: 口縫部外表面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13894	調査区: 30HINO8B グリッド: 5H13b 遺構: 1528SD 遺物 No.134	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 半球形内耳縫 部位: 脚部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13895	調査区: 30HINO8C グリッド: 5G16e 遺構: 501SW 袋込み 遺物 No.36	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 羽釜 部位: 脚部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13896	調査区: 30HINO8C グリッド: 5G15f 遺構: 502SU 下層 遺物 No.55	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 半球形内耳縫 部位: 口縫部外表面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13897	調査区: 30HINO8C グリッド: 5G14F 遺構: 503SM 遺物 No.84	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 内側内耳縫 部位: 脚部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13898	調査区: 30HINO8C グリッド: 5G14F 遺構: 503SM 遺物 No.79	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: くの子形内耳縫 部位: 脚部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13899	調査区: 30HINO8C グリッド: 5G14g 遺構: 503SM 遺物 No.89	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 半球形内耳縫 部位: 脚部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13900	調査区: 30HINO8C グリッド: 5G14f 遺構: 503SM 遺物 No.87	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 羽釜 部位: 脚部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.5N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13901	調査区: 30HINO8C グリッド: 5G14f 遺構: 769SD ベルト下層 遺物 No.180	試料の種類: 土器付着炭化物 層種: 内側内耳縫 部位: 脚部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-13902	調査区: 30HINO8C グリッド: 5G15g 遺構: 555SL	試料の種類: 炭化材 (クヌギ) 試料の性状: 最外年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・鹼洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)

表2 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP±1σ)	${}^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP±1σ)	${}^{14}\text{C}$ 年代を曆年較正した年代範囲	
				1σ 曆年較正年代範囲	2σ 曆年較正年代範囲
PLD-13884	-28.18±0.14	301±16	300±15	1525AD (49.5%) 1558AD	1521AD (69.6%) 1592AD
PLD-13885	-27.85±0.12	462±16	460±15	1631AD (18.7%) 1644AD	1619AD (25.8%) 1648AD
PLD-13886	-27.30±0.13	358±19	360±20	1470AD (43.3%) 1521AD	1458AD (50.3%) 1525AD
PLD-13887	-24.75±0.16	355±16	355±15	1475AD (41.0%) 1521AD	1465AD (48.3%) 1525AD
PLD-13888	-25.84±0.18	434±17	435±15	1592AD (24.9%) 1620AD	1557AD (45.1%) 1632AD
PLD-13889	-24.93±0.11	403±17	405±15	1439AD (68.2%) 1453AD	1432AD (95.4%) 1469AD
PLD-13890	-26.09±0.10	163±18	165±20	1675AD (6.8%) 1682AD	1666AD (17.0%) 1694AD
PLD-13891	-25.58±0.17	164±18	165±20	1735AD (43.0%) 1777AD 1799AD (6.4%) 1806AD 1900AD (11.1%) 1941AD	1727AD (48.4%) 1784AD 1796AD (10.9%) 1813AD 1918AD (19.2%) 1952AD
PLD-13892	-27.22±0.15	131±20	130±20	1675AD (6.0%) 1682AD 1735AD (45.0%) 1777AD 1800AD (5.7%) 1805AD 1900AD (10.9%) 1941AD	1666AD (17.1%) 1694AD 1727AD (48.5%) 1784AD 1796AD (10.7%) 1813AD 1918AD (19.1%) 1952AD
PLD-13893	-26.80±0.11	146±18	145±20	1683AD (11.0%) 1699AD 1723AD (8.2%) 1736AD 1805AD (7.3%) 1817AD 1834AD (29.5%) 1879AD	1686AD (33.4%) 1765AD 1774AD (0.4%) 1776AD 1800AD (45.8%) 1892AD 1908AD (15.5%) 1940AD
PLD-13894	-24.89±0.20	317±18	315±20	1680AD (11.4%) 1694AD 1727AD (29.2%) 1764AD 1800AD (10.0%) 1813AD 1919AD (17.6%) 1939AD	1668AD (15.4%) 1700AD 1721AD (33.9%) 1781AD 1796AD (11.5%) 1819AD 1832AD (16.0%) 1880AD 1915AD (18.0%) 1945AD
PLD-13895	-25.67±0.12	380±18	380±20	1522AD (49.7%) 1575AD	
PLD-13896	-25.55±0.12	382±20	380±20	1583AD (5.9%) 1591AD 1623AD (12.6%) 1638AD	1494AD (75.3%) 1602AD 1618AD (20.1%) 1644AD
PLD-13897	-26.57±0.13	369±18	370±20	1500AD (49.7%) 1553AD	
PLD-13898	-26.89±0.14	400±18	400±20	1601AD (18.2%) 1617AD	
PLD-13899	-25.24±0.26	397±21	395±20	1447AD (68.2%) 1478AD	
PLD-13900	-26.71±0.11	416±20	415±20	1448AD (68.2%) 1485AD	
PLD-13901	-27.40±0.19	384±21	385±20	1450AD (55.3%) 1494AD	
PLD-13902	-26.42±0.16	381±19	380±20	1602AD (12.9%) 1615AD	

第5章 考察・総括

第1節 遺構の変遷

(1) はじめに

今回の羽根遺跡の発掘調査では、戦国時代から江戸時代を中心に遺構と遺物が確認されているものの、それ以前については遺物の出土はあるが遺構はA区とB区の間の沢周辺で中世前半と考えられる遺構がわずかに確認されたにすぎなかつた。

そこで、今回の調査成果を分析するための作業として本遺跡の遺構の中心となる戦国時代から江戸時代までの遺構の時期区分を行うこととした。遺構の時期区分をするにあたっては、瀬戸・美濃窯産陶器の藤澤良祐らの研究成果を援用するとともに、その他の遺物や放射性炭素年代測定の結果等も加味して行った。

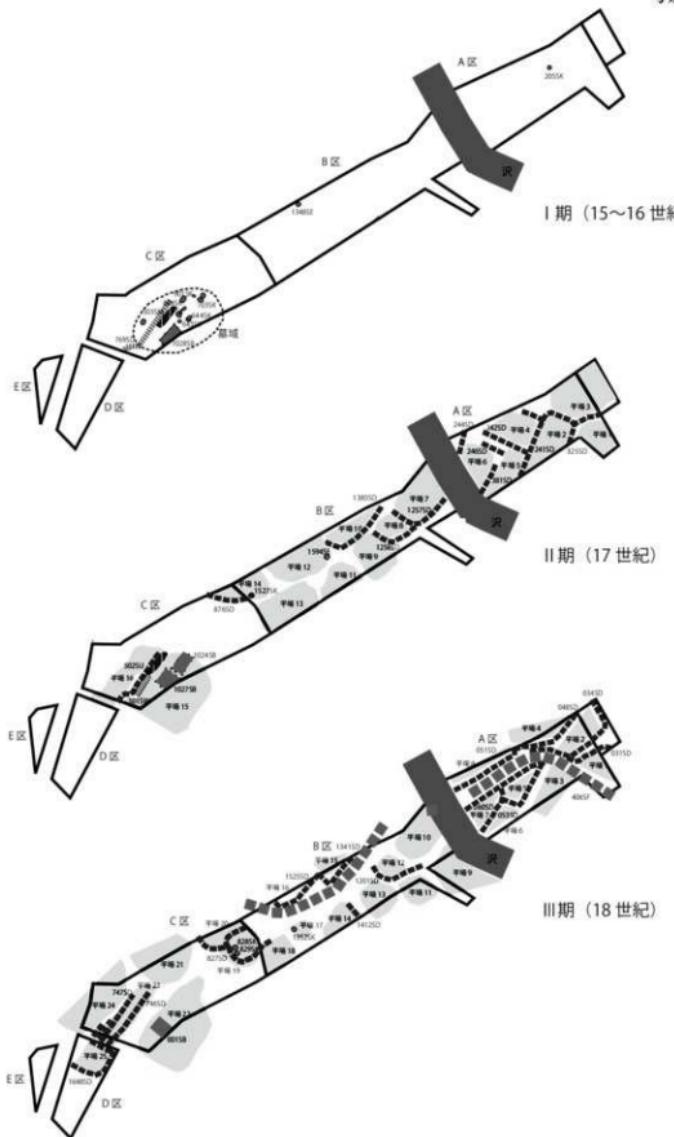
(2) 遺構の変遷（第69図）

遺構の分析の結果、羽根遺跡の遺構は大きくI期（15～16世紀）、II期（17世紀）、III期（18世紀）の3時期に区分できると考えられる。以下それぞれの時期について概観をまとめてみたい。

I期（15～16世紀） 遺構はC区にほとんど展開している。掘立柱建物1028SBの北側を中心にして643SK・644SK・884SK等一辺が1m以上の隅丸方形の土坑や大型の円形土坑が多く展開している状況や、一石五輪塔等を含む石塔類が数多く廃棄されていることから、この区域には石塔をもつ土坑墓群からなる墓域が形成されていたと考えられる。墓域は少なくとも15世紀代には形成されていたと考えられ、16世紀になり盛り土503SM、溝769SDなどが作られて最上段の平場がやや拡張され、17世紀初頭に土地利用の変更で墓域の移転・廃絶もしくは縮小等があったために石塔類の廃棄につながったと考えられる。

II期（17世紀） 調査区の北と南で遺構の様相を異にしていると考えられる。調査区北側のA区・B区では緩斜面を削平や盛り土により平場を形成し、それぞれの平場に溝を巡らせた区画が整備され、集落が展開していたと考えられる。一方、南側のC区では溝769SDの東側斜面に石垣501SWが作られ、上段の平場が拡張され、墓域から掘立柱建物の展開する場所へと変化を遂げたと考えられる。墓域については、現在の墓地がD区の東側に展開していることからこの時期にC区から南側の地へと移転が行われたとも考えられ、C区の掘立柱建物も墓地と関連する施設の可能性が高い。

III期（18世紀） 18世紀になるとA区・B区にはそれまでの区画を切るように道が作られ、道の両側に平場が展開する状況へと変化する。特にA区では尾根へとのびる道406SFがそれまであった平場区画を縦断したこともあり、一つ一つの区画が前段階よりも小規模になったことが確認された。また、それぞれの区画に展開する溝は、地盤の弱い部分や溝が複雑に合流する部分等を中心に地元産の片麻岩等を使った石組みによって強化していることが確認されている。B区・C区の境界付近には、828SK・829SK等常滑窑産の赤物窯を埋設した土坑が5カ所確認されたが、これらはカルシウム分等の付着がほとんどなく用途が不明のものである。平場21は調査区外も含め最も低い場所になってしまい、周辺の溝がここに向かいのびていること等から考えると、ここが池であったと推測される。C区の平場22については18世紀後半に旧宗桂寺基壇（001SB）をもつ建物が作られたと考えられる。



第69図 羽根遺跡主要遺構変遷図

第2節 総 括

羽根遺跡は中世から近世を中心とする遺跡であり、今回の調査でその一端を確認することができた。そこで総括として、羽根遺跡の成果をもとにそのまとめと課題を提起しておきたい。

遺物等から確認される羽根遺跡は縄文時代から近世まで確認されるものであったが遺構は中世以前のものは確認できていない。これらは中世以降の地形の変更により遺構が削平されてしまった、もしくは今回の調査区よりもやや高い位置に遺構が展開する可能性が指摘できる。戦国時代から近世の遺構は3段階に変遷が見られるが、画期となる時期にこの地域の支配権がⅠ期（奥平氏）、Ⅱ期（幕府）、Ⅲ期（鍋島氏）と替わっているのも注目すべき点であろう。また、今回の調査で15～16世紀にかけて土坑墓を中心とする墓域の展開が確認され、これが近世に現在地へと移動したと考えているが、明治17年の宝飯郡萩村の地籍図で羽根遺跡周辺を確認すると、D区東に現在の墓地がある一方、A区東側の沢沿いに「理葬場」と記載される場所があることから明治時代には埋め墓と参り墓を別にしていたと推測され、これがどの時期にこのような形態へと変化したかははつきりとしない。

中世から近世の遺物については、焼物として土師器の鍋・皿類が、石製品では石塔類が豊富に出土している。その特徴として鍋類については、東三河のハケ目をしっかりと残すものよりも西三河のハケ目のあまりないものが多く見受けられた。これに対し、皿類についてはそのほとんどが非クロロ調整皿であり、西三河より東三

河の様相が強い。石塔類では西三河の花こう岩を使ったものと東三河の凝灰岩を使ったものが同程度見られる。これらは羽根遺跡が東三河・西三河の境界に近いところに立地していることと無縁ではなさう。

今回の調査は、過去この地域であまり行われていなかった中・近世の集落遺跡の調査であったことから、この時期の集落の形成や変遷を知る上で貴重な資料を提供することができたと考える。本報告をきっかけに当地域の歴史解明が進むことを期待したい。
（成瀬友弘）

主要参考・引用文献

- 池上年 1962 「石塔の形式から見た津具盆地」津具郷土資料保存会
- 池上年編 1966 「旭村古石塔の根源」旭村教育委員会
- 井上和雄・後藤和夫編 1986 『三河国宝飯地方宗門人別改帳』書刊行会
- 鈴木正賀 1996 「東海地方の土師器内耳鍋の生産について」『鍋と甕—そのデザイン—』
- 鈴木正賀編 2009 『今町遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第162集
- 中野晴久 1994 「生産地における編年について」『「中世常滑焼をやって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
- 中野晴久 1995 「常滑の赤物」『常滑の赤物展～もう一つの常滑焼～』常滑市教育委員会
- 中野晴久 2006 「常滑窯」『江戸時代のやきもの生産と流通—記念講演会・シンポジウム資料集』財團法人瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター
- 萩原正彦他 2006 『音羽町史通史編』音羽町
- 萩原正彦他 2006 『音羽町史(史料編)1 近世村方資料』音羽町
- 藤澤良祐 2007 「總論」「愛知県史 別編窯業2 中世・近世瀬戸系」愛知県

羽根遺跡

石取り上げ観察表 4

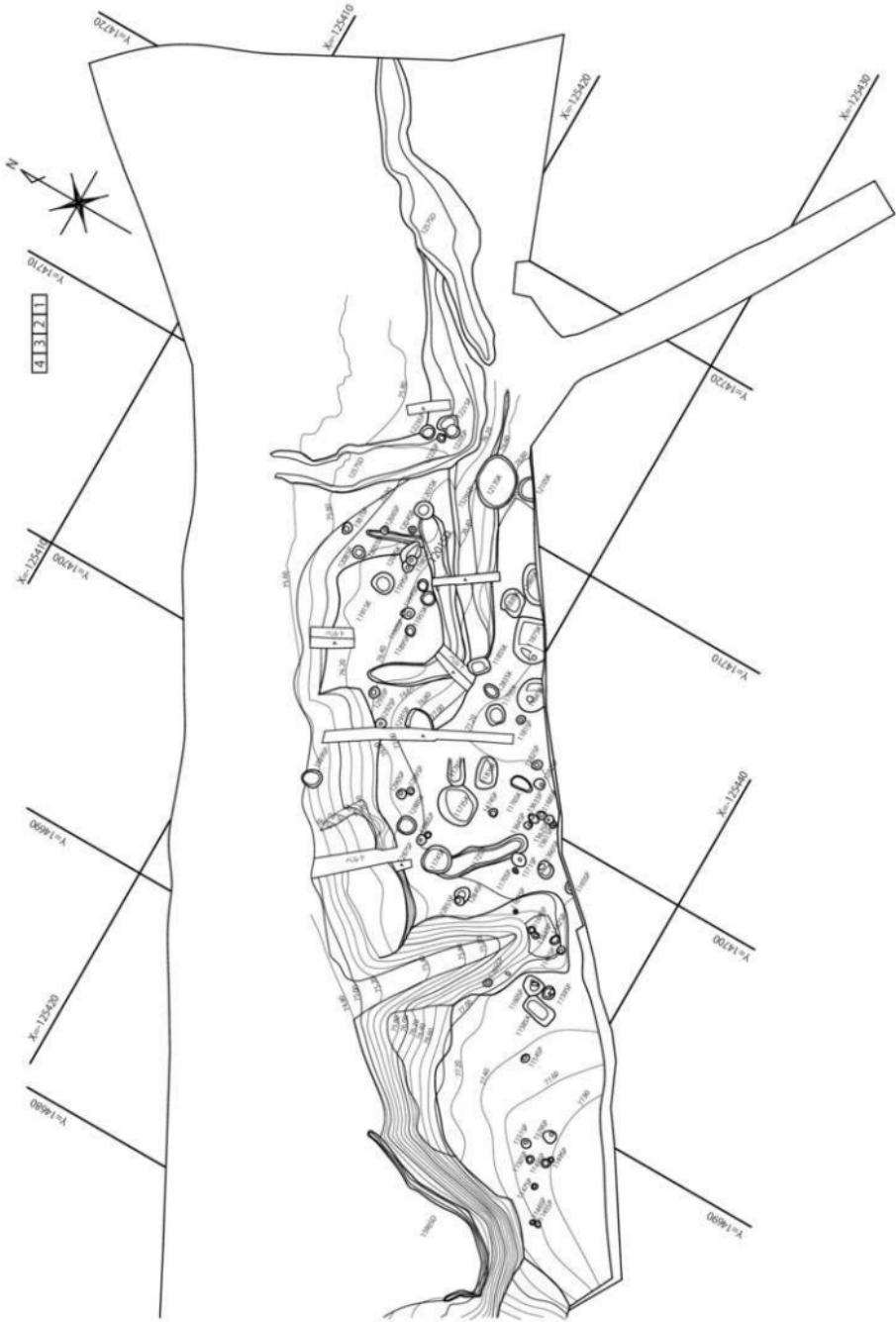
石取り上げ観察表 4												
番号	遺構番号	相位	柱		軸		横		柱		相位	編号
			高さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	幅 (cm)	柱	軸		
85	138050	10	5	4	10000		15	6	4	10002		9
87	138050	30	10	5	10000		11	9	3	10002		10
89	138050	25	20	12	10000	○	10	20	6	10002		11
90	138050	9	7	3	10000		25	15	7	10002		12
92	138050	16	12	6	10000		20	20	6	10002		13
91	138050	6	4	2	10000		22	13	9	10002		14
92	138050	8	7	5	10000		20	28	5	10002		15
93	138050	10	5	4	10000		25	17	7	10002		16
94	138050	12	9	2	10000		17	15	12	10002	○	17
95	138050	22	15	7	10000	○	26	17	9	10002		18
96	138050	20	11	4	10000		13	7	5	10002		19
97	138050	8	6	3	10000		14	8	3	10002		20
98	138050	10	6	3	10000		40	30	18	10002		21
99	138050	9	3	4	10000		42	17	9	10002		22
100	138050	8	5	3	10000	○	18	12	3	10002		23
101	138050	9	3	3	10000		23	13	7	10002		24
102	138050	8	3	4	10000		41	10	5	10002		25
103	138050	21	11	8	10000		34	16	4	10002		26
104	138050	19	10	4	10000		20	11	7	10002	○	27
105	138050	8	4	5	10000		32	13	4	10002		28
106	138050	8	6	3	10000		37	17	9	10002	○	29
107	138050	15	14	8	10000		22	20	6	10002		30
108	138050	12	6	4	10000		7	8	3	10002		31
109	138050	17	6	3	10000	○	23	20	6	10002		32
110	138050	10	6	4	10000		37	13	5	10002	○	33
111	138050	8	6	2	10000					10002		34
112	138050	24	4	4	10000					10002		35
113	138050	10	6	1	10000					10002		36
114	138050	6	4	2	10000					10002		37
115	138050	10	4	3	10000					10002		38
116	138050	9	3	4	10000					10002		39
117	138050	15	3	4	10000					10002		40
118	138050	12	9	4	10000					10002		41
119	138050	12	7	2	10000					10002		42
120	138050	10	4	4	10000					10002		43
121	138450	35	15	7	10000					10002		44
122	138450	17	8	3	10000					10002		45
123	138450	13	7	0	10000					10002		46
124	138450	32	10	7	10000					10002		47
125	138450	15	8	4	10000					10002		48
126	138450	10	12	5	10000					10002		49
127	138450	10	6	4	10000					10002		50
128	138450	10	6	0	10000					10002		51
129	138450	8	5	3	10000					10002		52
130	138450	15	2	4	10000					10002		53
131	138450	11	7	4	10000					10002		54
132	138450	10	4	4	10000					10002		55
133	138450	11	6	7	10000					10002		56
134	138450	20	8	7	10000	○				10002		57
135	138450	17	14	5	10000					10002		58
136	138450	22	9	3	10000					10002		59
137	138450	31	10	12	10000					10002		60
138	138450	20	13	5	10000					10002		61
139	138450	13	9	5	10000					10002		62
140	138450	18	13	5	10000					10002		63
141	138450	7	4	3	10000	○				10002		64
142	138450	17	9	0	10000					10002		65
143	138450	25	13	4	10000					10002		66
144	138450	8	6	3	10000					10002		67
145	138450	25	12	9	10000					10002		68
146	138450	32	20	6	10000					10002		69
147	138450	15	6	3	10000					10002		70
148	138450	26	5	3	10000					10002		71
149	138450	20	14	4	10000					10002		72
150	138450	18	10	0	10000					10002		73
151	138450	48	23	12	10000					10002		74
152	138050	33	13	8	10000	○				10002		75
153	138050	15	6	3	10000					10002		76
154	138050	29	14	6	10000	○				10002		77
155	138050	25	7	4	10000					10002		78
156	138050	10	6	3	10000					10002		79
157	138050	15	9	7	10000					10002		80
158	138050	14	10	5	10000					10002		81
159	138050	8	9	3	10000					10002		82
160	138050	0	7	8	10000	○				10002		83
161	138050	3	9	3	10000					10002		84
162	138050	8	7	4	10000					10002		85
163	138050	22	10	7	10000	○				10002		86
164	138050	14	9	8	10000					10002		87
165	138050	19	13	8	10000					10002		88
166	138050	12	6	5	10000					10002		89
167	138050	14	12	5	10000					10002		90
168	138050	0	6	2	10000					10002		91
169	138050	15	11	4	10000					10002		92
170	138050	10	6	3	10000					10002		93

石取り上げ観察表 6

番号	遺跡名	座標	左方			右方			形状	規模	属性
			B.L. (cm)	H.L. (cm)	幅 (cm)	B.L. (cm)	H.L. (cm)	幅 (cm)			
341	501SW	18	14	2	20	8	2	20	8	2	○
342	501SW	9	6	3	20	10	3	20	10	3	○
343	501SW	26	20	9	20	10	9	20	10	9	○
344	501SW	23	11	4	20	10	4	20	10	4	○
345	501SW	22	11	8	20	10	8	20	10	8	○
346	501SW	33	25	15	20	20	15	20	20	15	○
347	501SW	10	5	3	20	10	3	20	10	3	○
348	501SW	12	10	6	20	10	6	20	10	6	○
349	501SW	12	12	3	20	10	3	20	10	3	○
350	501SW	42	29	18	20	20	18	20	20	18	○
351	501SW	27	19	9	20	10	9	20	10	9	○
352	501SW	21	15	8	20	10	8	20	10	8	○
353	501SW	16	8	3	20	10	3	20	10	3	○
354	501SW	23	10	5	20	10	5	20	10	5	○
355	501SW	12	9	4	20	10	4	20	10	4	○
356	501SW	20	11	7	20	10	7	20	10	7	○
357	501SW	27	15	8	20	10	8	20	10	8	○
358	501SW	18	6	6	20	10	6	20	10	6	○
359	501SW	27	20	8	20	10	8	20	10	8	○
360	501SW	28	18	6	20	10	6	20	10	6	○
361	501SW	24	16	10	20	10	10	20	10	10	○
362	501SW	30	24	13	20	10	13	20	10	13	○
363	501SW	17	16	8	20	10	8	20	10	8	○
364	501SW	31	23	13	20	10	13	20	10	13	○
365	501SW	27	23	8	20	10	8	20	10	8	○
366	501SW	27	13	10	20	10	10	20	10	10	○
367	501SW	27	17	19	20	10	19	20	10	19	○
368	501SW	21	20	10	20	10	10	20	10	10	○
369	501SW	19	9	4	20	10	4	20	10	4	○
370	501SW	27	19	8	20	10	8	20	10	8	○
371	501SW	20	9	7	20	10	7	20	10	7	○
372	501SW	30	10	8	20	10	8	20	10	8	○
373	501SW	33	32	7	20	10	7	20	10	7	○
374	501SW	20	7	5	20	10	5	20	10	5	○
375	501SW	34	15	11	20	10	11	20	10	11	○
376	501SW	36	18	9	20	10	9	20	10	9	○
377	501SW	15	3	2	20	10	2	20	10	2	○
378	501SW	25	16	11	20	10	11	20	10	11	○
379	501SW	26	21	13	20	10	13	20	10	13	○
380	501SW	25	19	6	20	10	6	20	10	6	○
381	501SW	27	14	4	20	10	4	20	10	4	○
382	501SW	27	18	3	20	10	3	20	10	3	○
383	501SW	27	17	7	20	10	7	20	10	7	○
384	501SW	20	12	8	20	10	8	20	10	8	○
385	501SW	28	14	14	20	10	14	20	10	14	○
386	501SW	17	14	5	20	10	5	20	10	5	○
387	501SW	24	15	7	20	10	7	20	10	7	○
388	501SW	33	19	13	20	10	13	20	10	13	○
389	501SW	35	15	15	20	10	15	20	10	15	○
390	501SW	29	19	16	20	10	16	20	10	16	○
391	501SW	31	11	8	20	10	8	20	10	8	○
392	501SW	29	19	13	20	10	13	20	10	13	○
393	501SW	29	24	12	20	10	12	20	10	12	○
394	501SW	23	14	8	20	10	8	20	10	8	○
395	501SW	28	12	8	20	10	8	20	10	8	○
396	501SW	25	13	8	20	10	8	20	10	8	○
397	501SW	36	26	12	20	10	12	20	10	12	○
398	501SW	33	14	15	20	10	15	20	10	15	○
399	501SW	35	15	6	20	10	6	20	10	6	○
400	501SW	22	11	11	20	10	11	20	10	11	○
401	501SW	21	12	8	20	10	8	20	10	8	○
402	501SW	35	25	11	20	10	11	20	10	11	○
403	501SW	20	13	10	20	10	10	20	10	10	○
404	501SW	23	11	9	20	10	9	20	10	9	○
405	501SW	18	17	7	20	10	7	20	10	7	○
406	501SW	28	19	6	20	10	6	20	10	6	○
407	501SW	24	22	8	20	10	8	20	10	8	○
408	501SW	23	20	10	20	10	10	20	10	10	○
409	501SW	30	12	17	20	10	17	20	10	17	○
410	501SW	27	16	10	20	10	10	20	10	10	○
411	501SW	33	24	10	20	10	10	20	10	10	○
412	501SW	27	12	5	20	10	5	20	10	5	○
413	501SW	26	24	11	20	10	11	20	10	11	○
414	501SW	28	12	7	20	10	7	20	10	7	○
415	501SW	30	18	13	20	10	13	20	10	13	○
416	501SW	33	20	9	20	10	9	20	10	9	○
417	501SW	19	10	6	20	10	6	20	10	6	○
418	501SW	18	10	6	20	10	6	20	10	6	○
419	501SW	22	13	12	20	10	12	20	10	12	○
420	501SW	33	25	10	20	10	10	20	10	10	○
421	501SW	23	8	9	20	10	9	20	10	9	○
422	501SW	34	31	16	20	10	16	20	10	16	○
423	501SW	20	10	10	20	10	10	20	10	10	○
424	501SW	22	15	5	20	10	5	20	10	5	○
425	501SW	30	25	10	20	10	10	20	10	10	○
426	501SW	31	25	16	20	10	16	20	10	16	○
427	501SW	23	8	9	20	10	9	20	10	9	○
428	501SW	30	21	17	20	10	17	20	10	17	○
429	501SW	30	15	5	20	10	5	20	10	5	○
430	501SW	24	12	5	20	10	5	20	10	5	○
431	501SW	30	16	17	20	10	17	20	10	17	○
432	501SW	31	11	11	20	10	11	20	10	11	○
433	501SW	34	32	16	20	10	16	20	10	16	○
434	501SW	28	18	7	20	10	7	20	10	7	○
435	501SW	30	29	16	20	10	16	20	10	16	○
436	501SW	31	22	10	20	10	10	20	10	10	○
437	501SW	30	31	17	20	10	17	20	10	17	○
438	501SW	34	32	16	20	10	16	20	10	16	○
439	501SW	36	28	16	20	10	16	20	10	16	○
440	501SW	30	11	11	20	10	11	20	10	11	○
441	501SW	33	12	11	20	10	11	20	10	11	○
442	501SW	24	24	10	20	10	10	20	10	10	○
443	501SW	30	13	12	20	10	12	20	10	12	○
444	501SW	27	13	10	20	10	10	20	10	10	○
445	501SW	33	21	8	20	10	8	20	10	8	○
446	501SW	30	18	10	20	10	10	20	10	10	○
447	501SW	24	17	3	20	10	3	20	10	3	○
448	501SW	34	17	9	20	10	9	20	10	9	○
449	501SW	34	24	11	20	10	11	20	10	11	○
450	501SW	32	24	11	20	10	11	20	10	11	○
451	501SW	30	15	15	20	10	15	20	10	15	○
452	501SW	30	15	15	20	10	15	20	10	15	○
453	501SW	30	26	16	20	10	16	20	10	16	○
454	501SW	33	16	2	20	10	2	20	10	2	○
455	501SW	30	15	10	20	10	10	20	10	10	○
456	501SW	33	17	11	20	10	11	20	10	11	○
457	501SW	34	23	11	20	10	11	20	10	11	○
458	501SW	24	15	8	20	10	8	20	10	8	○
459	501SW	31	12	6	20	10	6	20	10	6	○
460	501SW	33	12	6	20	10	6	20	10	6	○
461	501SW	49	501SW	36	14	13	20	10	13	20	10
462	501SW	33	23	12	20	10	12	20	10	12	○
463	501SW	32	23	12	20	10	12	20	10	12	○
464	501SW	33	23	7	20	10	7	20	10	7	○
465	501SW	30	23	12	20	10	12	20	10	12	○
466	501SW	33	23	12	20	10	12	20	10	12	○
467	501SW	30	10	10	20	10	10	20	10	10	○
468	501SW	29	7	5	20	10	5	20	10	5	○
469	501SW	23	7	7	20	10	7	20	10	7	○
470	501SW	30	10	7	20	10	7	20	10	7	○
471	501SW	36	17	11	20	10	11	20	10	11	○
472	501SW	30	13	7	20	10	7	20	10	7	



遺構図 1 (1面遺構図 1) 1/200

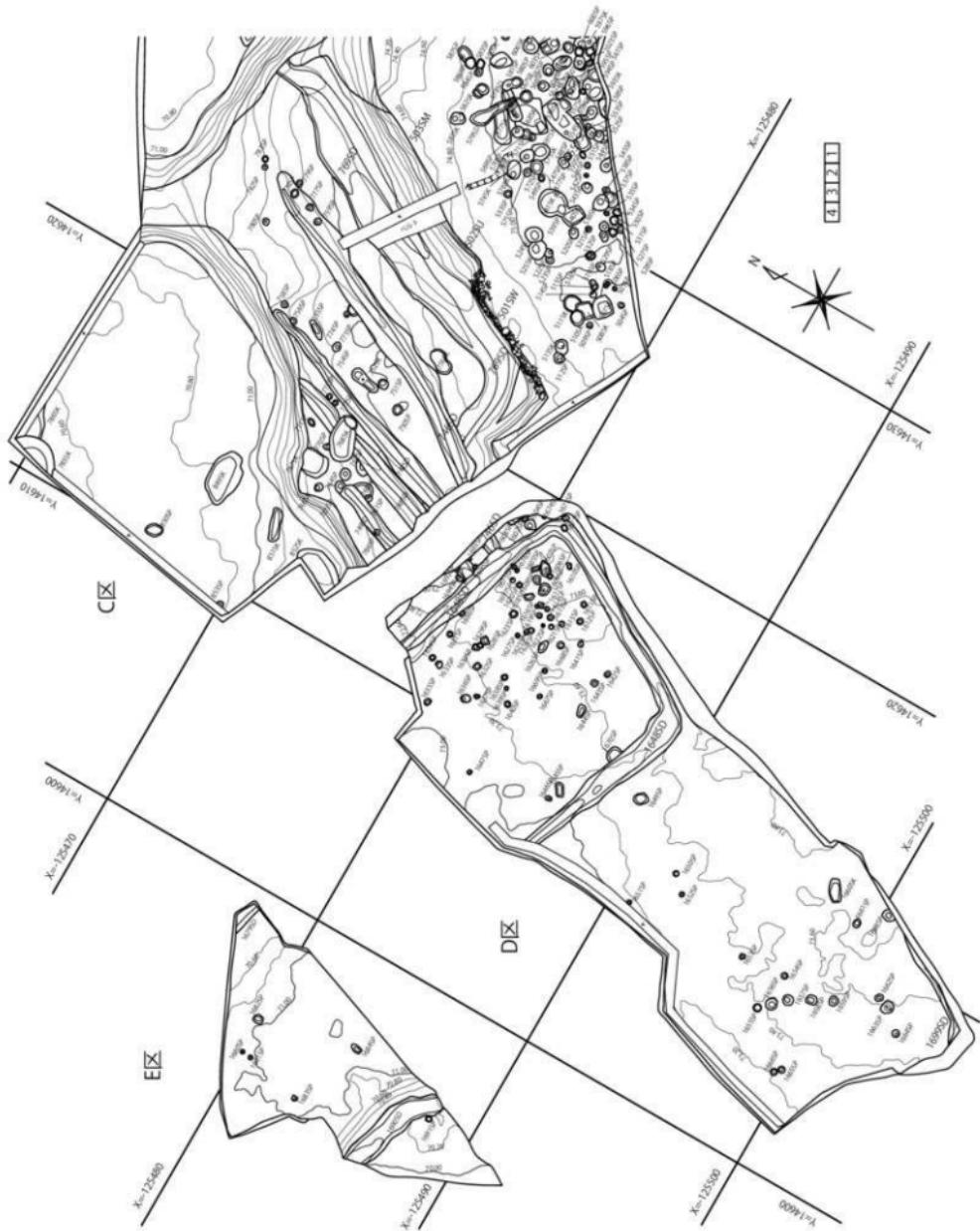


遺構図 2 (1面遺構図 2) 1/200



遺構図 3 (1面遺構図 3) 1/200

羽根遺跡

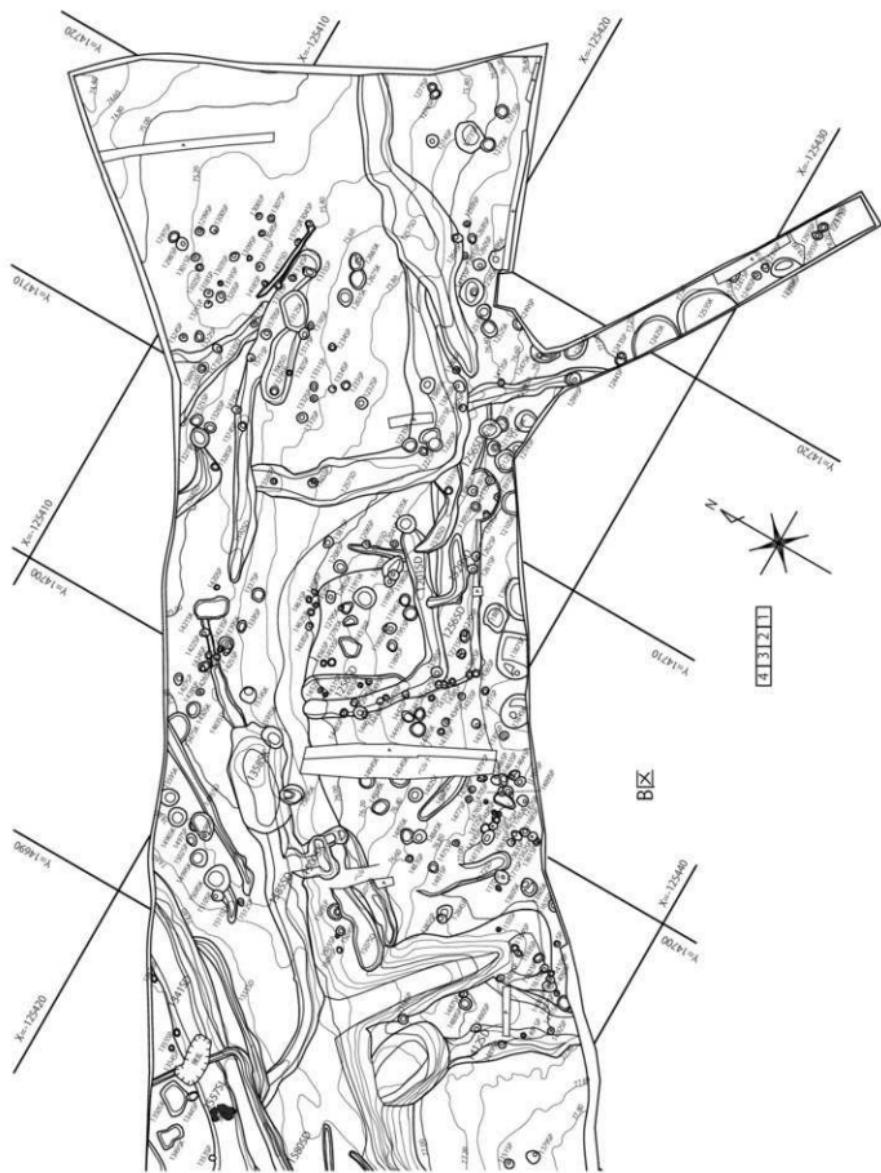


遺構図 4 (1面遺構図 4) 1/200

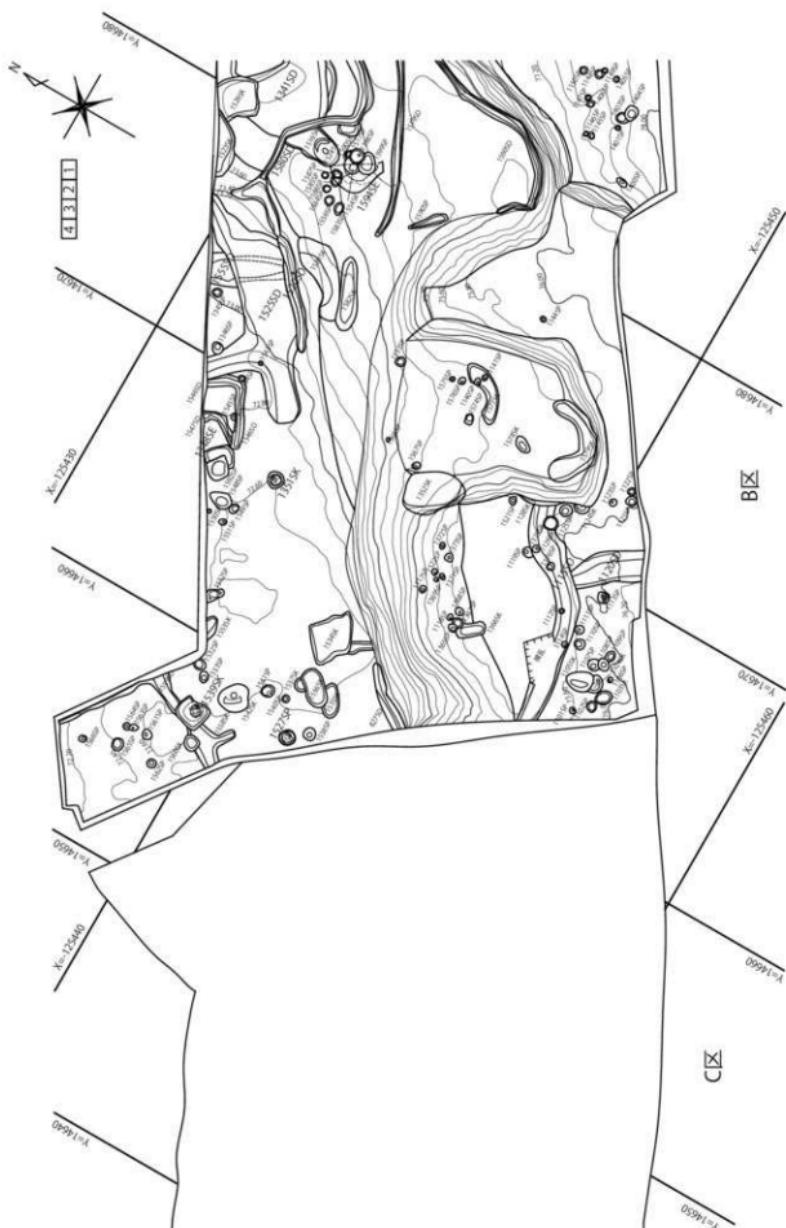


遺構図 5 (2面遺構図 1) 1/200

羽根遺跡



遺構図 6 (2面遺構図 2) 1/200



遺構図 7 (2面遺構図 3) 1/200

羽根遺跡



遺構図 8 (2面遺構図 4) 1/200



調査区遠景（南西からみる）



調査区全体（南西からみる）

写真図版 2



A 区 1 面全体（北東からみる）



A 区 2 面全体（北東からみる）



Ab 区全体 (東からみる)



B 区 1 面全体 (南西からみる)

写真図版 4



B 区 2 面全体（南西からみる）



B 区 2 面北半分（北からみる）



C 区 1 面全体 (北西からみる)

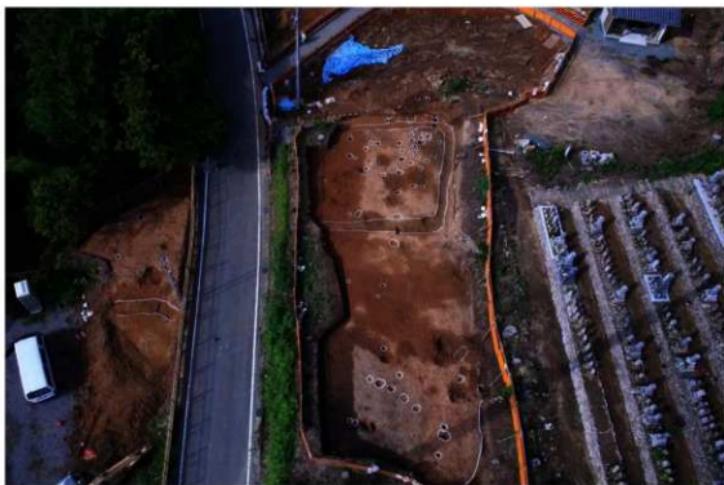


C 区 1 面南半分 (北東からみる)

写真図版 6



C区2面全体(西からみる)



D区・E区全体(南西からみる)



001SB 全体（東からみる）



322SI 土層断面（北東からみる）



1595SB 全体（南西からみる）



031SD 全体（南からみる）



034SD（南西からみる）



048SD 全体（南西からみる）



048SD 石組み（東からみる）



048SD 石組み（南東からみる）

写真図版 8



051SD 全体 (南西からみる)



051SD 石組み (西からみる)



053SD 全体 (北東からみる)



052SS 南東部 (北西からみる)



070SD 検出状況 (南西からみる)



070SD 全体 (北西からみる)



246SD 全体 (南西からみる)



386SD 全体 (北西からみる)



746SD・747SD・748SD 全体 (南西からみる)



746SD 石組み (北東からみる)



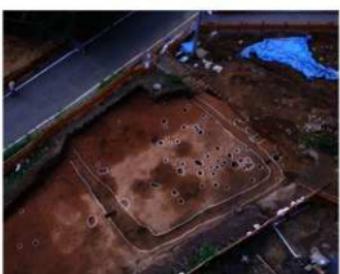
1256SD 遺物出土状態 (西からみる)



1341SD 石組み (北西からみる)



1385SD 石組み (北東からみる)



164D8SD 全体 (南からみる)



1591NR 全体 (西からみる)



501SW・502SU・503SM 検出状況 (北西からみる)

写真図版 10



501SW 全体 (北西からみる)



501SW 北端 (北からみる)



501SW 基底石 (西からみる)



502SU 全体 (北西からみる)



502SU 石塔廃棄集中部 (北西からみる)



503SM 全体 (北からみる)



503SM 土層断面 (北西からみる)



503SM 内耳鍋出土状態 (南西からみる)



205SK・206SX・248SK 全体（南西からみる）



247SX 全体（南西からみる）



265SP 全体（北からみる）



413SX 全体（北西からみる）



828SK・829SK（南西からみる）



884SK 全体（北西からみる）



950SK 全体（南西からみる）



1352SK 全体（西からみる）

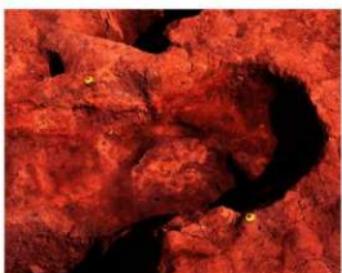
写真図版 12



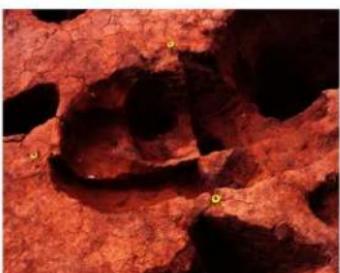
1358SK 全体 (北東からみる)



1500SK 全体 (北西からみる)



555SL 全体 (南からみる)



555SL 断ち割り断面 (南東からみる)



1557SL 検出 (南西からみる)



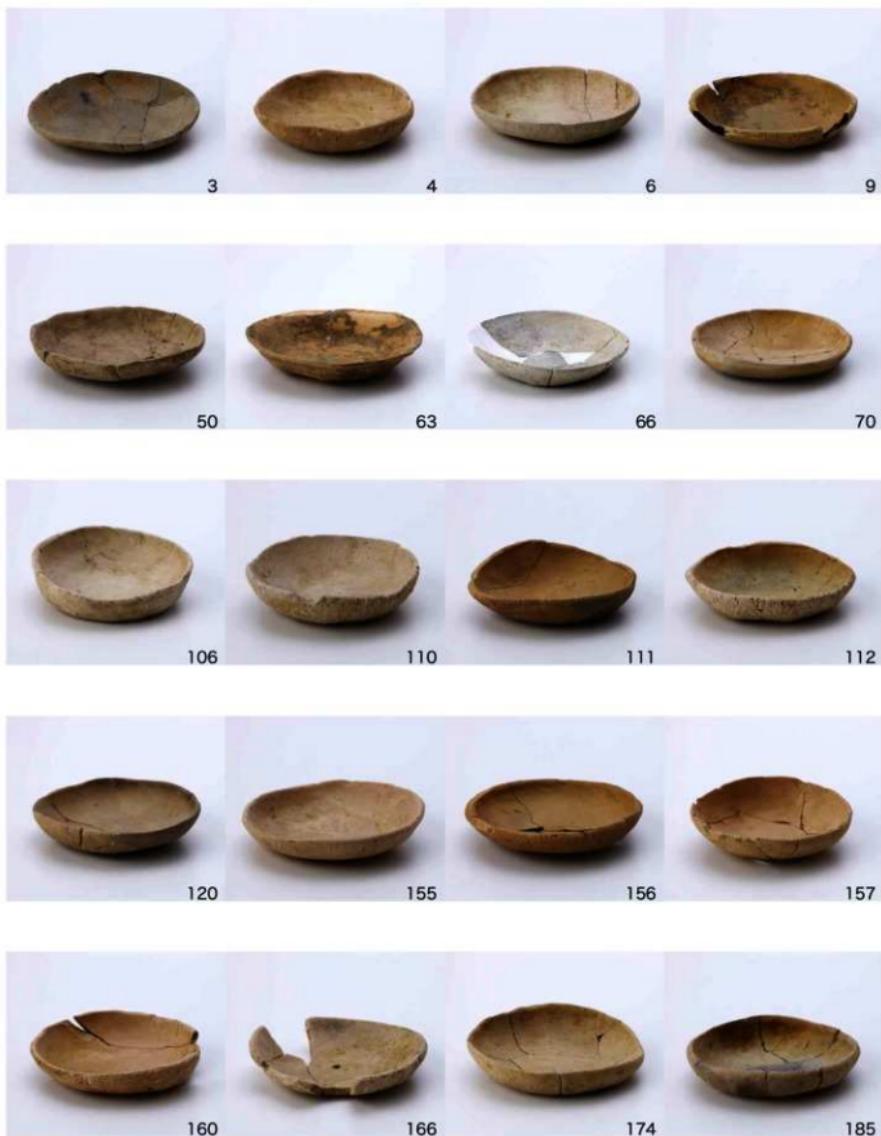
1557SL 全体 (南からみる)



1348SE 土層断面 (南東からみる)

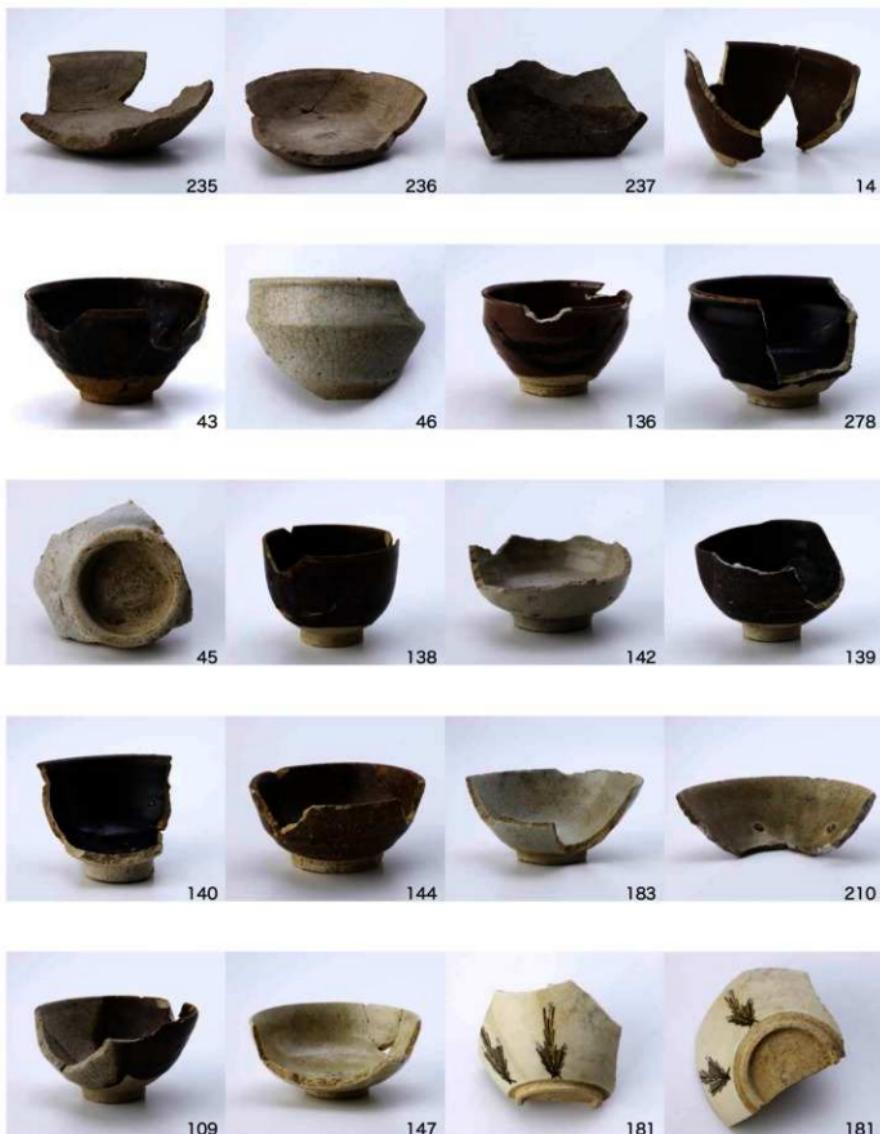


1594SE 土層断面 (北東からみる)



写真図版 14



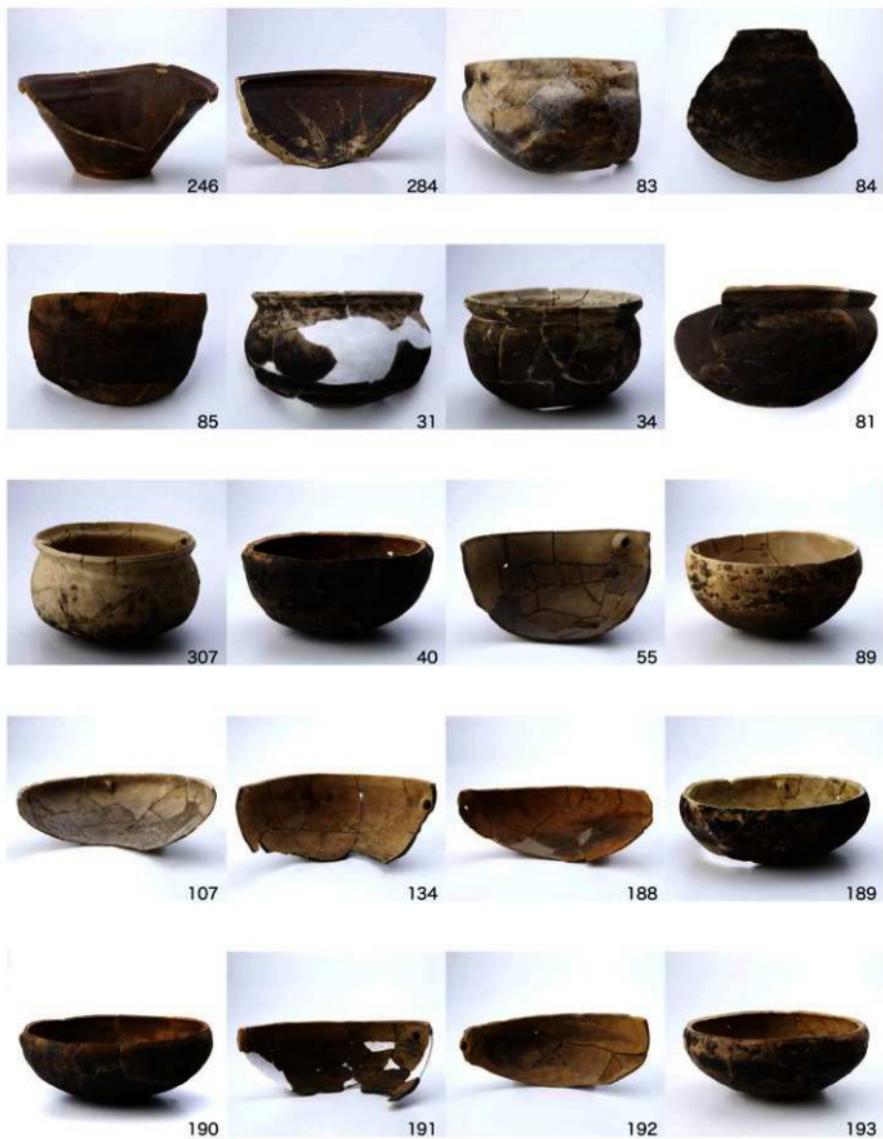


写真図版 16





写真図版 18





36



37



28



86



87



273



121



51



38



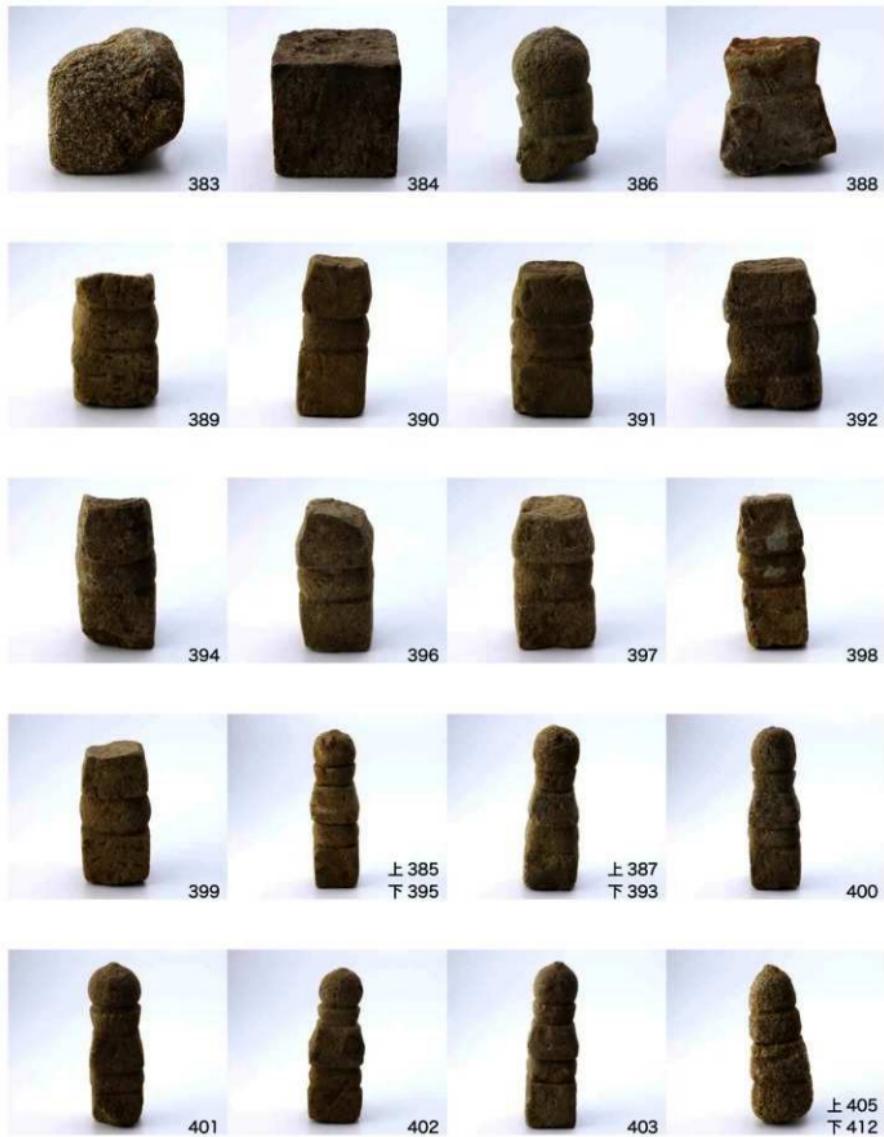
39



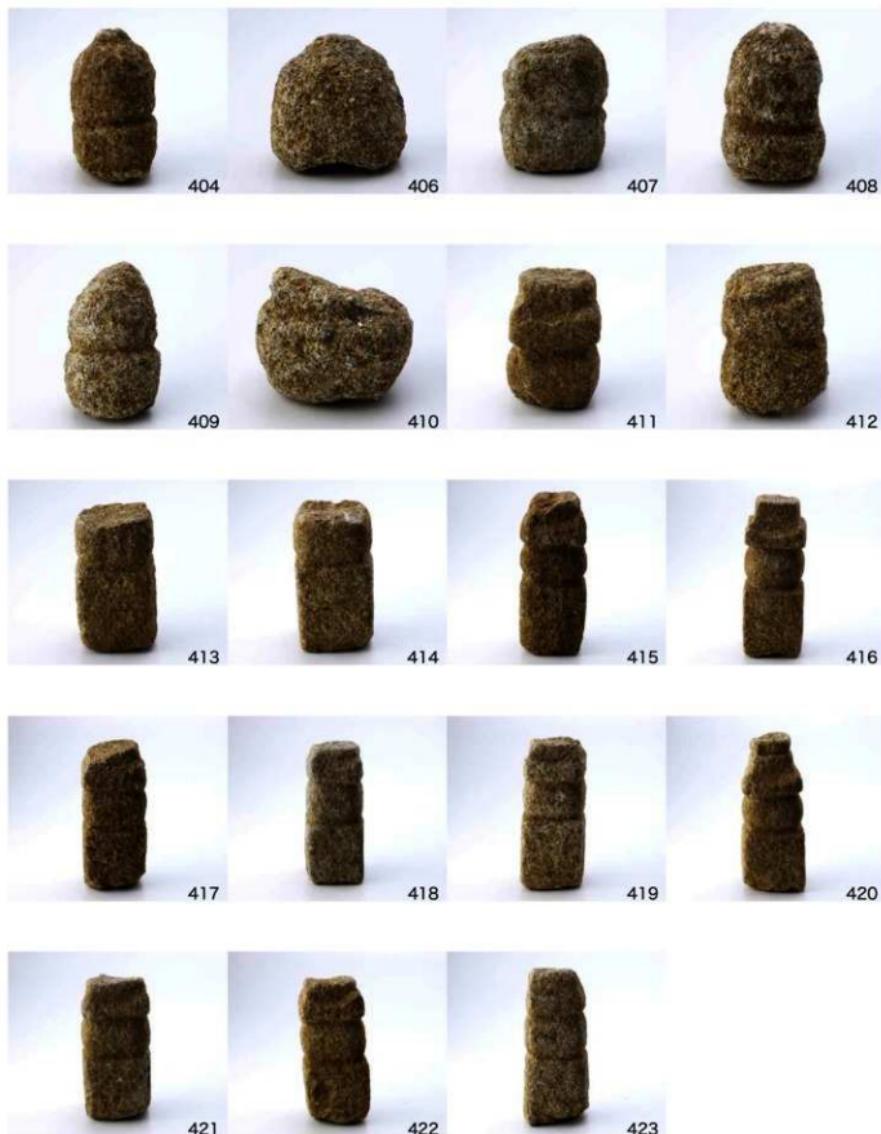
502SU 出土—石五輪塔

写真図版 20



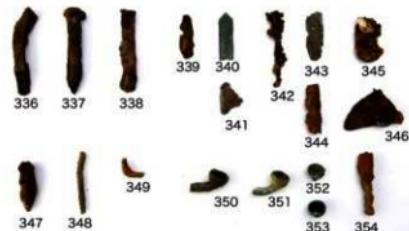


写真図版 22





鍛冶関連遺物



金属製品



木製品・石塔類以外の石器・石製品・貝製品



出土錢貨



縄文時代に属すると考えられる石器

報告書抄録

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第166集

羽根遺跡

2010年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社